

平成30年度

文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

「社会に開かれた教育課程」を編成する
カリキュラム・マネジメントに関する研究

平成31年3月

国立大学法人鹿児島大学

協力：全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として国立大学法人鹿児島大学が実施した平成30年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。

は　じ　め　に

私たちは、今年度、文部科学省初等中等教育局幼児教育課の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託を受けることとなりました。平成30年4月から新幼稚園教育要領に基づいた幼稚園教育が実施され、新時代にふさわしい教育研究を目指す転換期を迎えております。このような大切な時期に調査研究を受け、研究の成果は元より課題を明確にすることで、本園で取り組んでいる、「遊びの中で育まれる子どもの学び」の研究をより一層充実させることが可能だと考えました。また、新幼稚園教育要領においては、「カリキュラム・マネジメント」の充実に努めることが示され、効果的な「カリキュラム・マネジメント」の在り方を検討することは、幼稚園で求められる資質・能力を育み、教育活動の質の向上につながると考えました。

幼児期に育みたい資質・能力は、小学校以降のようないわゆる教科指導で育むものではありません。幼児の自発的な活動である遊びや生活の中で、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたりできるようになったことなどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育むことが重要であると言えます。そこで、調査研究課題は、「社会に開かれた教育課程を編成するカリキュラム・マネジメントに関する研究」とし、カリキュラム・マネジメントの取組状況についての収集や整理・検討を研究内容として進めました。

グローバル化や情報化が進展する社会の中では、多様な主体が速いスピードで相互に影響し合い、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝播し、先を見通すことがますます難しくなっています。そして、子供たちが将来就くことになる職業の在り方についても、技術革新等の影響により大きく変化することになると予測されています。

このような中で、全国の附属幼稚園の御協力を得て、事例収集・分析に焦点を当てた今回の研究は、必ずや皆様方の園における保育にお役に立てるものと考えます。

最後になりましたが、國學院大学教授 神長美津子先生、鳴門教育大学教授 木下光二先生、玉川大学教授 大豆生田啓友先生には、御講話を通して研究の方向性などについて御教示いただきました。また、九州地区をはじめとする全国の国立大学附属幼稚園（副）園長の皆様及び先生方には、具体的な事例収集に御尽力いただきました。衷心より御礼申し上げます。

本委託研究の成果が、全国の幼児教育現場で日々頑張っている先生方に広がり、少しでも役立つことを、心から願っております。

鹿児島大学教育学部附属幼稚園
園　長　假　屋　園　昭　彦

目 次

I	研究の目的と方法	1
1	研究の背景	1
2	研究の目的と期待される効果	2
3	研究成果の普及・啓発	2
4	研究の方法	2
II	研究の内容	3
1	カリキュラム・マネジメントの取組状況についての収集	3
(1)	情報収集の方法	3
(2)	カリキュラム・マネジメントの取組状況報告の収集結果	4
2	カリキュラム・マネジメントの取組状況についての整理・検討	13
(1)	カリキュラム・マネジメントの取組の分析方法	13
(2)	カリキュラム・マネジメントの取組の特徴の分析	13
(3)	カリキュラム・マネジメントの3つの視点から見た特徴分析	18
(4)	年間を通じたカリキュラム・マネジメントの実施回数や時期による分析	20
(5)	協力園のカリキュラム・マネジメントの取組状況報告	22
(6)	特徴的な取組のグルーピングと整理, 検討	38
(7)	効果的なカリキュラム・マネジメントについての考察	90
3	本園の教育課程編成の実際	91
(1)	昨年度の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を取り入れた教育課程の編成	91
(2)	本年度のカリキュラム・マネジメントの取組	93
(3)	本園の教育課程の課題	95
(4)	本年度のカリキュラム・マネジメントの取組	95
(5)	カリキュラム・マネジメントのポイントからの見直しの実際	97
III	研究の成果と課題	98
1	研究の成果	98
2	今後の課題	99

I 研究の目的と方法

1 研究の背景

本園は、平成25年度から27年度にかけて「協同性を育む保育の在り方～遊びにおける協同性の育ち～」、平成29年度から3か年計画で「遊びの中で育まれる子どもの学び」を主題にして、幼児の遊びの充実と保育の質の向上を目指す実践研究を積み上げ、各年齢の幼児の具体的な育ちの様子や教師の援助の在り方を探ってきた。

さらに、昨年度からは「幼稚園教育要領改訂のポイントを踏まえた保育実践」を副題にし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下「10の姿」という）を視点に遊びの中で育まれている幼児の学びを明らかにし、保育の質を向上させようと研究を進めている。昨年度の研究では、各年齢をⅠ期からⅤ期に分け、10の姿のそれぞれの視点から幼児の学びを捉え、指導計画作成のための資料としてまとめた。また、具体的な幼児の学びを各期の事例から捉え、「10の姿」を視点にしてまとめ、各期の幼児の学びについても整理した。それらを生かして、教育課程の編成を行い、本年度、活用しているところである。

本年度は、「子供の育ちを共有し、小学校とのつながりを深める保育実践」を副題として2年次の研究を進めた。研究の内容としては、ドキュメンテーションを通して日々の遊びを可視化し、幼稚園での幼児の学びを整理したいと考えた。さらに、幼稚園の幼児の具体的な遊びの中で育まれる学びが小学校の学習にどのようにつながっているかを整理し、まとめた。これらのことを通じて、幼児の姿を小学校と共有し、スタートカリキュラム等へ生かされることを期待して、更なる小学校の学習との滑らかな接続を図ることを目指している。

平成28年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」においては、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者にとって幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められた。「カリキュラム・マネジメント」とは、園の目標の実現に向けて、子供や地域、家庭での生活の実態を踏まえ、カリキュラムを編成、実施、評価し、その上で改善を図るということを計画的・組織的に実施していくことである。すなわち、「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）、そのためには、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「子供一人一人の発達をどのように支援するか」が重要であり、その結果「何が身に付いたか」、さらに、改善のために必要な方策は何か、という循環が必要になってくる。

これらのことを受けて、平成30年度から実施された幼稚園教育要領においては、新たに「カリキュラム・マネジメント」の充実に努めることと示された。教育課程の編成等これまでも実施されてきたことではあるが、改めて効果的な「カリキュラム・マネジメント」の在り方について検討することにより、幼児一人一人について、幼稚園教育において育みたい資質・能力を確実に育み、教育活動の質の向上へとつなげていきたい。

また、昨年度、鳥取大学附属幼稚園が全国の国立大学附属幼稚園の協力を得て取り組んだ「幼稚園における指導の評価の在り方に関する研究」も踏まえ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にした、ドキュメンテーションによる学びの共有の方法を検討して、教育課程の編成に生かしていきたい。

2 研究の目的と期待される効果

本調査研究では、幼稚園と小学校、保護者、地域が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点に子供の育ちを共有し、「社会に開かれた教育課程」を実現するカリキュラム・マネジメントの有効的な実施の方法を明らかにすることを目的とする。その際、本園以外にも、全国の附属幼稚園から「社会に開かれた教育課程」を実現するカリキュラム・マネジメントの事例を集め、整理し、成果報告書にまとめる。

また、本調査研究では、次に示す具体的な成果が期待される。

- (1) 協力園からカリキュラム・マネジメントの取組事例を集め、整理することにより、全国の附属幼稚園におけるカリキュラム・マネジメントの取組を明らかにすることができる。
- (2) 協力園の取組から分析を行うことにより、「社会に開かれた教育課程」を実現するために有効なカリキュラム・マネジメントを実施する上での流れやポイントを明らかにすることができる。
- (3) 小学校や保護者、地域との子供の姿の共有及び、自園の教育活動への理解と連携を深めながら教育課程の見直しを図ることにより、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上へつなげることができる。

3 研究成果の普及・啓発

研究成果の普及・啓発のために、次の取組を実施する。

- (1) 研究成果を報告書にまとめ、配布することで、幼稚園教育要領に示されたカリキュラム・マネジメントの在り方を全国の幼稚園等に広める。
- (2) 研究成果を報告する他、その概要版を作成し、全国の附属幼稚園が各都道府県の国公立幼稚園・こども園長会等関連団体の研修会等で伝達することにより、全国の幼稚園等へ普及する。
- (3) 研究成果の概要を本園のホームページに掲載することにより、参考にできるようにし、広く全国の幼稚園等へ普及する。

4 研究の方法

本調査研究においては、次の取組を実施する。

(1) カリキュラム・マネジメントの取組状況についての収集と整理、検討

園内でカリキュラム・マネジメントの勉強会を実施し、カリキュラム・マネジメントについての共通理解を図るとともに、全国国立大学附属幼稚園のカリキュラム・マネジメントの取組状況をまとめ、そのサイクルや課題を確認し、その中で改善の視点を整理する。

(2) 本園の教育課程編成の実際

(1)で明らかとなった改善の視点をういて、本園のカリキュラムを見直し、幼稚園教育要領で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、具体的な改善を図る。

Ⅱ 研究の内容

1 カリキュラム・マネジメントの取組状況についての収集

「カリキュラム・マネジメント」と一言と言っても、各幼稚園によって捉え方やその取組は、様々で多岐にわたっている。そこで、「カリキュラム・マネジメント」について、各園の取組を洗い出し、整理していくこととした。

本調査研究において、全国の国立大学附属幼稚園より取組状況等の報告を受け、研究協力を得ている。報告では、**①カリキュラム・マネジメントの取組状況報告**、**②特徴的な取組紹介**、**③教育課程の実際**についての3点の情報を収集し、整理することにより、「カリキュラム・マネジメント」の実際やそのサイクル、課題等を確認し、その中で改善の視点を明らかにすることができるものと考えられる。

以下にその収集と分析の具体的な手続きを示す。

(1) 情報収集の方法

平成30年10月に本園における「カリキュラム・マネジメント」の実際を例に示して、以下の3点について、全国の国立大学附属幼稚園48園に情報提供を依頼した。

① カリキュラム・マネジメントの取組状況報告

本報告書では、1 園の概要、2 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組、3 来年度に向けての改善点・課題の3点についてまとめた。

報告においては、幼稚園教育要領に記載されている次の3つの視点で記載を依頼した。

- ①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。
- ②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。
- ③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

各年度の後半に教育課程の見直し等を行う園も多いことが予想されるため、翌年度に向けての改善点・課題については、現段階での記載を依頼することにした。

② カリキュラム・マネジメントの特徴的な取組紹介について

①のカリキュラム・マネジメントの取組状況報告の中で示した自園の具体的な取組内容の内、自園の特色を表している取組の1つを選び、「実施の方法・実施状況」「実施後の効果」「今後の改善点」について詳しく報告書にまとめた。

③ 教育課程の実際について

各園で本年度使われている教育課程についても情報提供を依頼し、本園の教育課程の見直しを図る上での参考資料とすることにした。

(2) カリキュラム・マネジメントの取組状況報告の収集結果

国立大学附属幼稚園48園よりカリキュラム・マネジメントの取組について、情報提供された。本園分を含め、具体的な取組をまとめたものは、以下に示した通りである。なお、各園の「**1**カリキュラム・マネジメントの取組状況報告」については、付属のCD-ROMにデータとして記録した。また、「**2**特徴的な取組紹介」については、各園で参考にできる取組であるため、報告書の欄に★印で示し、参考資料として本報告書に掲載している。

項目にある「視点」は、幼稚園教育要領に記載されている下記の視点を番号で示したものである。

- ①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。
- ②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。
- ③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

なお、各園の事例は、提出されたものを可能な限りそのまま掲載しているため、表記が国の法令等とは異なるものも含まれる。

1 カリキュラム・マネジメントの取組状況報告

	園名	具体的な取組	実施時期	視点	報告書
1	北海道教育大学附属旭川幼稚園	保育記録	毎日	②	
		学級通信の作成	週1回	②	
		小学校との連携	年間	②③	★
		大学との協働体制	年間	③	★
		教育課程・指導計画の改善	随時	①②	
2	北海道教育大学附属函館幼稚園	教育課程・指導計画の改善	12月～	③	
		振り返りの時間	毎日	①②	
		ショートミーティング	毎日	①②	
		保育ミーティング	週1回	①②	
		4校園交流事業	年間	②③	★
		預かり保育	年間	②③	
3	弘前大学教育学部附属幼稚園	保育中の振り返りの時間の確保	毎日	①②	
		保育情報交換	毎日	①②	
		掲示用のドキュメンテーション	年間	②③	
		「健康教育」という視点からの保護者との連携	年間	①③	
		事例研究会と大学教員との協働研究体制	年5回	③	
		小学校との連携	年間	②③	★
		教育課程・指導計画の改善	12月～2月	①②	
4	岩手大学教育学部附属幼稚園	保育後の記録	毎日	①②	
		3時の会	毎日	①②③	
		学年会	月1～2回	①②③	★
		研究会	月2～3回	①②③	
		公開保育研究会	年1回	②③	
		保護者との連携	随時	①②③	
		小学校との連携	年7回	①②③	
		大学との連携	年間	②③	
		教育課程、指導計画の修正・改善	月末	①②	
5	宮城教育大学附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	12月～2月	①②	
		振り返りの時間の設定、保護者への連絡、週案への反省記録	毎日	①②③	
		学年会の実施、学級通信の作成・配付、ドキュメンテーションの掲示	週1回	①②③	
		生活全体会・研究全体会・現職教育研修会の実施	月1回	①②	
		保育カンファレンスの実施	年間	②	★
		保護者との連携	年間	②③	

	園名	具体的な取組	実施時期	視点	報告書
6	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	7月～2月	①②	
		週日案	週1回	①②③	
		写真を用いた幼児の育ちの理解と共有	年1回	①②	★
		エピソードメモ・エピソード記録	随時	①②	
		遊びを語る会	年間1～2回	①②	
		研究保育	年間1～2回	①②	
		小学校との連携	年間	①②	
7	山形大学附属幼稚園	保育の振り返り	毎日	②③	
		ホワイトボードを活用した情報共有	年間	①②	
		子供の育ちを共有する保護者会	年3回	②	
		自作教材を活用した体験型保健指導	年間	①	★
		子供自身による遊びの振り返り	毎日	②	
		保育サポーターとの連携	年間10回程度	③	
		外部との連携	年間	①③	
		教育課程・指導計画の改善	10月～12月	①②	
8	福島大学附属幼稚園	保育の振り返り	毎日	②③	
		共有フォルダの活用と園内研修	月2～4回	②③	★
		連絡帳〔月ごと〕HP	随時	②③	
		附属3校や大学との連携	年間	②③	
		教育課程・指導計画の改善	随時	①②	
9	茨城大学教育学部附属幼稚園	日々の記録	毎日	①②	
		前週までの子供の姿を評価	2週に1回	②	
		次の2週間のねらい及び内容の検討	2週に1回	①②	
		環境の構成・予想される子供の姿と援助のポイント・行事等の検討	2週に1回	②	
		期ごとの教育課程・指導計画の見直し	学期1回	②	
		安全点検	随時・月1回	③	★
		園内環境の整備	随時・月1回	③	
10	宇都宮大学教育学部附属幼稚園	保育反省	毎日	①②③	
		保育中の振り返りの時間の確保	毎日	②	
		特別支援学校(県立盲学校・聾学校)や近隣の保育園との協働体制	年間	③	
		小学校との連携	年間	②③	
		アクティブラーニングの視点からの教材研究	適宜	①	★
		教育課程・指導計画の改善	6月～2月	①②	
11	群馬大学教育学部附属幼稚園	保育反省	毎日	②③	
		振り返りの時間(遊びの見取り)の確保	毎日	②③	
		画像を活用した幼稚園生活の解説	年3回	②③	
		園内研修における園庭での遊びの分析と園庭づくり	週1回	②③	★
		小学校・特別支援学校との連携	年間	②③	
		教育課程・指導計画の改善	8月～2月	①②	
12	埼玉大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	年間	①②	
		家庭との園の方針の共有	年間	②	
		地域(大学含む)との協働体制	年間	②③	
		園内研修の取組	年間	①②	
		小学校教員との連携	年間	①②③	★
13	千葉大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	3月・7月・12月	①②	
		大学との連携	年間	②③	
		保護者との連携・情報の共通理解	年間	②③	
		環境構成の見直し	年間	②③	
		園庭の遊具の見直しプロジェクト	年間	①②③	★
14	東京学芸大学附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	年間	①②	

	園名	具体的な取組	実施時期	視点	報告書
14	東京学芸大学附属幼稚園	園内保育検討会	年2回	①②③	★
		保育記録	年1回	②	
		掲示用ドキュメンテーション・ホームページ作成	月2回	①	
		職員朝会	毎日	②③	
		校内委員会開催	年3回	②③	
		小学校との連携	年間	②③	
		学生との連携	年間	③	
15	お茶の水女子大学附属幼稚園	グランドデザインの整備	年1回	①②③	
		保育の考察の時間の確保	週1回・月1回	②③	
		掲示用のドキュメンテーションの作成	毎日	②③	
		保護者との懇談機会	学期に1回程度	②③	
		保護者との懇談機会の新設	不定期	②③	★
		保護者との連携	年間	②③	
		地域、社会との連携	不定期	③	
		教育課程・指導計画の改善	年間	①②③	
16	山梨大学教育学部附属幼稚園	入園時の聴き取り	入園時	①②	
		記録・読み取り	毎日	②	
		環境の改善	随時・月1回	③	★
		プランシートの作成	毎日	②③	
		育ちのみとり・家庭との連携	随時	③	
		教育課程・指導計画の改善	毎週・学期末・年度末	①②	
17	新潟大学教育学部附属幼稚園	幼小中の協働体制	月1回	②③	
		外部との協働研究体制	年2回	②	
		学校評議員会	年3回	②	
		学校評価	年2回	②	
		保育研究・授業研究	年6回	②	★
		日々の振り返り	毎日	②	
18	富山大学人間発達科学部附属幼稚園	保育の記録（教師）	毎日	①②③	
		保育中の振り返りの時間の確保（子供）	毎日	②③	
		期の初めと終わりの姿を全担任で確認	各期	②③	
		小学校との連携	年間	②③	★
		教育計画の見直し	年間	①②	
19	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	年間	①②	
		教員研修	年4回	②	★
		保護者との連携	年間	②③	
		地域【外部】との連携	年間	③	
		小学校との連携	年間	①②	
20	福井大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	7月～11月	①②	
		取組（SNSを活用した幼児教育の発信）	8月～	③	★
21	信州大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	月2～3回	①②	★
		取組（加フル入「語る会」・研究組織の再編成等）	毎日・月2～3回	①②	
		外部との協力体制	月1回	③	
		具体的な取り組みの発信	週1回	②	
22	上越教育大学附属幼稚園	保育の振り返り	毎日	①②	
		小学校との連携	年間	①	
		研究会での発信	年1回	①②	
		保育公開	年2回	②	
		週案の蓄積・改善、指導計画の修正	年間	②	★
		家庭との連携	毎日	②	
		教職員の研修	年間	③	

	園名	具体的な取組	実施時期	視点	報告書
22	上越教育大学附属幼稚園	幼児教育の担い手の育成	年間	③	
		園環境の見直し	年間	③	
		行事の見直し	年間	③	
23	静岡大学教育学部附属幼稚園	保育反省	毎日	②③	
		保育中の振り返りの時間の確保	毎日	②	
		掲示物・学級通信の作成	週1回	②③	
		実践の語り合い	年3回	③	★
		地域（外部）との協働体制	年間	③	
		小中学校との連携	年間	②③	
		教育課程・指導計画の改善	11月～2月	①②	
24	愛知教育大学附属幼稚園	保育反省・週案作成	毎日・週1回	②	
		からだ遊びシートの作成	2週間に1回	①②	
		大学教員との連携	随時	③	★
		教育課程・指導結果の改善	年3回	①②③	
		保護者アンケート	行事後、2月	②③	
		学校評議委員会	7月、2月	②③	
25	三重大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	週1回	①②	★
		園だより、学級通信、学年通信、「あそびと生活」の作成	適宜	②	
		掲示板の活用	毎日	②	
		保育の振り返り、話し合い	毎日	②	
		環境構成についての相互参観	年4回	①②	
		大学との連携	年間	②③	
		小学校、中学校、特別支援学校との連携	年間	①③	
		保護者との連携活動	年間	③	
26	滋賀大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	年間	①②	
		週案作成学年会議	週1回	②③	
		保育カンファレンス	毎日	②③	
		掲示用ドキュメンテーション・学級通信の作成	随時	②③	
		家庭との連携	随時	②③	★
		地域・保護者・学生・大学の先生との協働体制	随時	③	
		附属学校との連携	随時	②③	
27	京都教育大学附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	年間	①②	
		保育案の工夫	毎日	①②	
		保護者との連携	年間	②③	
		教員研修の実施	年間数回	②③	
		おたより(保護者向け学年通信)の作成	毎週	②③	
		附属学校との連携	年間随時	②③	
28	大阪教育大学附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	年間	①②	
		保育案の工夫	毎日	①②	
		ドキュメンテーションの作成	行事ごと	②③	
		保護者との連携	年間	②③	
		教員研修の実施	年間数回	②③	★
		地域との連携		②③	
29	兵庫教育大学附属幼稚園	学級経営方針の共有と振り返り	学期毎	①②	
		週案の共有	週1回	①②	
		毎日の情報の共有	年間	①②	
		記録に基づく話し合い	年間	①②	★
		保護者に対する情報発信	年間	①②③	
		保護者による保育参加、保育参観	年間	①②③	

	園名	具体的な取組	実施時期	視点	報告書
29	兵庫教育大学附属幼稚園	行事や保護者参加の活動後のアンケートの実施	年間	①②③	
		大学の資源を生かした教育活動	年間	①②③	
		附属小学校・中学校、公立高校、子育て支援ルームとの交流	年間	①②③	
		保護者対象の幼稚園アンケートの実施	3月	①②③	
		教育課程・指導計画の改善	2月～3月	①②	
		学校評価の実施と意見聴取	3月～4月	①②③	
30	神戸大学附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	学期毎・随時	②③	
		保育指導案の計画・実施・評価	毎日	②③	
		ドキュメンテーションの作成	月1回以上随時	①②	
		実践記録による分析的振り返り	週1回	②③	
		遊びや生活のまとまりとしての計画・実践・評価	随時	②③	
		小学校との連携研究	随時	②③	★
		保育参加による保護者との連携	随時	②③	
		大学との協働体制	週1回以上	③	
31	奈良教育大学附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	学期2回	①②	
		保育の振り返り	毎日	①②	
		保育の展望	月2回	①②	
		「保育のわくワークシート」(保育実践記録)への記入	随時	①②	★
		「保育ほっとトーク」(保育カンファレンス)の実施	月1・2回	①②	
		園内研修	随時	①②	
		行事内容の見直し	行事前・月2回程度	①②	
		保護者との共有	学期に1回	①②	
		大学との連携	随時	③	
		学生の保育サポーター	1学期毎日	③	
32	奈良女子大学附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	年間	①②	
		幼小一貫した教育課程及び評価の観点の編成	年間	①②③	
		日々の保育マネジメント	毎日	②③	
		教育内容説明会・コラムの作成	毎月	②③	
		「個人ファイル」の作成	年4回	②③	
		大学及び地域との協働体制	不定期	③	
33	鳥取大学附属幼稚園	加筆修正した教育課程を基にしたドキュメンテーションの作成と評価	通年	①②	
		教育課程・指導計画の改善	7月～2月	①②	
		ドキュメンテーションを作成し、保護者と共有する	10月～3月	①③	
		小学校との連携	年間	②③	
		関係機関との連携	年間	③	★
34	島根大学教育学部附属幼稚園	保育の記録・考察	毎日	①②	★
		『子供café』による共通理解	週1回	①②	
		保育計画の作成・工夫	各期	①②	★
		大学との連携	年間	③	
		小学校中学校との連携	年間	②③	
35	岡山大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	8月～2月	①②	
		日々の保育の反省を生かす取組	週1回・毎月1回	①②	
		幼児理解を深める取組	1～2週に1回	①②	★
		小学校との連携	月1回	①②③	
		地域との連携	年6・7回	①③	
		保護者との連携	年2回	①②	
36	広島大学附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	各期 1～2月	②③	
		保育反省	毎日	②③	
		園の教育方針と森での保育の理解と推進	月1回・年2回・毎	②	

	園名	具体的な取組	実施時期	視点	報告書
36	広島大学附属幼稚園	保護者との連携	年間	③	
		地域(外部)との連携	年間	③	
		教育課程・指導計画の改善	毎月	①②	★
37	広島大学附属三原幼稚園	保育反省	毎日	②	
		指導計画の改善・子供の見取り	毎日	①	
		小学校・中学校教員との連携	年間	①	★
		地域(外部)との連携	年間	③	
38	山口大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	随時	①②③	
		日々の振り返り(ミーティング)	毎日	①②③	
		事例検討会	月2回	①②	★
		幼小中合同会議	月1回	①②③	
		保護者による保育参加・保育アシスタント	学期1回	①②③	
		座談会	月1回	①②③	
		大学の資源や人材の活用	年9回	①②③	
		保護者アンケート	年4回	①②③	
39	鳴門教育大学附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	毎月	①②	
		園内研究会・大学教員との合同研究会	年間10回	③	★
40	香川大学教育学部附属幼稚園	保育の振り返りと記録	毎日	②③	
		週案の作成と検討	週1回	②③	
		子供向けクラスだより	毎日	②③	
		事例研究(保育カンファレンス)	週1回	②	
		小学校との連携	年間	②③	
		教育課程・指導計画の改善	年間	①②	
		研究大会	年1回	③	
		「保育について語ろうデー」の実施	年3回	③	★
41	愛媛大学教育学部附属幼稚園	園内研修の工夫	通年	①	
		教育課程・指導計画・環境構成の工夫・改善	学期に1回	②	
		正副園長が積極的に方針を語りかける会の実施	年間16回	③	
		ホームページによる情報の発信	毎週3~4回	①	★
42	高知大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	通年	①②	
		評価反省	毎日	②③	
		掲示用ドキュメンテーションの作際	2週間に1回	②③	
43	福岡教育大学附属幼稚園	附属特別支援学校に来てもらったの餅つき	年1回	③	★
		プロジェクト型保育の実践	年間	②	★
		年間計画の改善	年間	②③	
		きましよう・おはなししようの時間の確保	毎日	②	
		園内環境の見直し	年間	②③	
		保護者との連携	年間	③	
		小学校との連携	年間	②③	
大学との連携	年間	②③			
44	佐賀大学教育学部附属幼稚園	保育記録	毎日	②③	
		降園前の全体活動	随時	②	
		学級通信の作成	週3回程度	②③	
		一人一人の育ちを共有する「ポートフォリオ」の配付	年3回	②③	★
		大学(学部)や附属学校との連携	年間	③	
		小学校との協働活動	年間	②③	
		教育課程・教育計画の改善	8月~2月	①②	
45	長崎大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	毎日	①②	
		情報交換会	週3回	②③	
		保育記録	毎日	②	

	園名	具体的な取組	実施時期	視点	報告書
45	長崎大学教育学部附属幼稚園	子どもの遊びの図	月1回	①②	
		おたより帳のコメント	月1回	③	
		大学との連携	年間	②③	
		他の附属学校との連携	年間	①②③	★
46	熊本大学教育学部附属幼稚園	週の指導計画作成	毎週	①②③	
		園内保育研究会	年6回	①②	★
		保護者との連携	年間	①②③	
		小学校との接続	年間	①②③	
47	大分大学教育学部附属幼稚園	教育課程・指導計画の改善	年1回	①②	
		企画委員会	毎月	①②③	
		保育カンファレンス	週1回	①②	
		週案作成	毎週	①②	
		保育記録	毎日	②	
		にこにこフォト	週2回	②	
		指導要録の作成	3月	①②	
		園内研究	2年間	②	★
48	宮崎大学教育学部附属幼稚園	事例検討	年間	①②	
		保育記録	毎日	②③	
		保育研修会	週1回	②③	
		掲示資料の作成	11月	①②	★
		HP及びブログによる情報発信	年間	③	
		共同研究	月1回	①②	
		小中学校及び地域との連携	年間	②③	
		教育課程・指導計画の改善	4月～12月	①②	
49	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	保育の振り返り	毎日	②③	
		保育中の振り返りの時間の確保	毎日	②	
		掲示用のドキュメンテーション・学級通信の作成	週1回	②③	★
		幼児一人一人の育ちを共有するドキュメンテーション(個人用の配付)	年3回	②③	
		地域(外部)との協働体制	年間	③	
		小学校との連携	年間	②③	
		教育課程・指導計画の改善	8月～2月	①②	

② カリキュラム・マネジメントの特徴的な取組紹介について

	園名	特徴的な取組	実施時期・回数	主な対象
1	北海道教育大学附属旭川幼稚園	大学, 附属小・中学校との連携	年間	教師 保護者
2	北海道教育大学附属函館幼稚園	4校園交流事業	年間	幼児, 保護者, 教師
3	弘前大学教育学部附属幼稚園	小学校教育研究会での保育提案	年1回	小学校教師 幼児教育関係者
4	岩手大学教育学部附属幼稚園	豊かな遊びを育む教材の工夫	年1回	幼児 教師
5	宮城教育大学附属幼稚園	保育カンファレンス	年間	教師間
6	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	写真を用いた幼児の育ちの理解と共有	年1回	教師間
7	山形大学附属幼稚園	自作教材を活用した体験型保健指導	年間	幼児(保護者)

	園名	特徴的な取組	実施時期・回数	主な対象
8	福島大学附属幼稚園	共有フォルダの活用と園内研修	毎日	教師間
9	茨城大学教育学部附属幼稚園	園内環境の整備・改善（多くの人の目で）	年間	教師, 参観者, 保護者, 実習生
10	宇都宮大学教育学部附属幼稚園	砂粘土の事例（アクティブラーニングの視点から教材研究）	5～6月	幼児（4歳児）
11	群馬大学教育学部附属幼稚園	園内研修における園庭での遊びの分析と園庭づくり	毎週	教師間
12	埼玉大学教育学部附属幼稚園	小学校の教員との研修	入学当初	幼・小教師間
13	千葉大学教育学部附属幼稚園	園庭の遊具の見直しプロジェクト	年2回	幼児 保護者
14	東京学芸大学附属幼稚園	保育検討会（保育者の資質向上）における記録の活用	年6回	教師間
15	お茶の水女子大学附属幼稚園	保護者懇談会『ホットモタイム』の新規実施	不定期 2回実施	保護者
16	山梨大学教育学部附属幼稚園	環境の改善（ヒヤリハット報告書から）	年間 月1回	教師間
17	新潟大学教育学部附属幼稚園	幼小中全体研修・園内研修	毎週	教師間
18	富山大学人間発達科学部附属幼稚園	幼小連携の強化	年間	教師, 幼児, 児童
19	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	教員研修	年4回	教師間, 学生, 公開研究会参加者
20	福井大学教育学部附属幼稚園	SNSを活用した幼児教育の発信	通年・毎日	保護者, 地域, 幼児教育関係者
21	信州大学教育学部附属幼稚園	幼・小・中一貫した12年間の教育課程の作成	毎月	幼・小・中の教師
22	上越教育大学附属幼稚園	教育課程及び年間指導計画の改善・修正	年間	教師間
23	静岡大学教育学部附属幼稚園	実践の語り合い（ラウンドテーブル形式の研修）	年3回	教師間
24	愛知教育大学附属幼稚園	専門機関との連携（大学教員）	年1回	幼児, 教師, 大学教員
25	三重大学教育学部附属幼稚園	事例検討による教育課程の見直し	週1回	教師間
26	滋賀大学教育学部附属幼稚園	食育の取組	年間	幼児 保護者
27	京都教育大学附属幼稚園	保育形態の工夫	年間	幼児, 教師
28	大阪教育大学附属幼稚園	教員研修会	年間	教師間 幼児教育関係者
29	兵庫教育大学附属幼稚園	保育の質を高めるための記録に基づく話し合い	週1回	教師間
30	神戸大学附属幼稚園	小学校との連携研究	年間	教師, 幼児, 保護者
31	奈良教育大学附属幼稚園	「わくワークシート」（保育記録）と「ほっとホットトーク」（保育カンファレンス）	年間	教師間
32	奈良女子大学附属幼稚園	育ちの履歴から編成するカリキュラム	各期終了後	教師間

	園名	特徴的な取組	実施時期・回数	主な対象
33	鳥取大学附属幼稚園	県教育委員会との連携・教職員の研修	年数回	教師間 幼児教育関係者
34	島根大学教育学部附属幼稚園	保育のメタ認知化	各期 1 回	教師間
35	岡山大学教育学部附属幼稚園	幼児理解を深める取組 ～「こどもカフェ」～	1～2 週 間に 1 回	教師間
36	広島大学附属幼稚園	園内研修の取組(保育カンファレンス を通して)	月 1 回 年 2 回	教師間
37	広島大学附属三原幼稚園	幼小接続・異校種交流の取組	年間	教師間
38	山口大学教育学部附属幼稚園	事例検討会（各年齢の期ごとに）	月 2 回	教師間
39	鳴門教育大学附属幼稚園	保育カンファレンス「幼児期の終わり までにいかに育つか」	月 2 回	教師間
40	香川大学教育学部附属幼稚園	保育について語ろうデー	年 3 回	教師間 地域の保育者
41	愛媛大学教育学部附属幼稚園	ホームページにおける幼稚園の様子 発信	週 4 回	教師間 保護者
42	高知大学教育学部附属幼稚園	餅つき	年 1 回	幼児 特支高等部学生
43	福岡教育大学附属幼稚園	プロジェクト型保育 (年長～虫, 種) (年中～土)	年間	幼児 教師
44	佐賀大学教育学部附属幼稚園	ポートフォリオ（個人用）	年 3 回	教師間 保護者
45	長崎大学教育学部附属幼稚園	幼小連携・幼中連携	年間	幼児, 児 童, 生徒
46	熊本大学教育学部附属幼稚園	園内保育研究会	年 6 回	教師間
47	大分大学教育学部附属幼稚園	チーム研究の成果をカリキュラム編 成に生かす	年間	教師間
48	宮崎大学教育学部附属幼稚園	掲示資料	年 2 回	教師間 幼児教育関係者
49	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	掲示用ドキュメンテーション	週 1 回	教師間 保護者

2 カリキュラム・マネジメントの取組状況についての整理・検討

(1) カリキュラム・マネジメントの取組の分析方法

収集した「**1**カリキュラム・マネジメントの取組状況報告」と「**2**カリキュラム・マネジメントの特徴的な取組紹介」の2つの報告書をもとに、次の方法で分析・検討を行った。

方法1：「**1**カリキュラム・マネジメントの取組状況報告」の中から具体的な取組を整理し、似ている取組をグルーピングし、カリキュラム・マネジメントの特徴や流れを明らかにする。

方法2：「**1**カリキュラム・マネジメントの取組状況報告」の具体的な取組を下記の視点で分類し、関連をベン図に表し、カリキュラム・マネジメントの3つの視点から見た取組の特徴を明らかにする。

～カリキュラム・マネジメントの視点～

- ① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。
- ② 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。
- ③ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

方法3：「**1**カリキュラム・マネジメントの取組状況報告」の中から具体的な取組を実施時期や回数に着目して整理し、カリキュラム・マネジメントの流れやサイクルを明らかにする。

方法4：「**2**カリキュラム・マネジメントの特徴的な取組」を似ている取組でグルーピングし、特徴を捉える。また、本誌に掲載することにより、各園でカリキュラム・マネジメントを実施する上での参考にできるように整理する。

方法5：各園の「**1**カリキュラム・マネジメントの取組状況報告」を考察し、カリキュラム・マネジメントを行う上での参考になることをまとめる。

(2) カリキュラム・マネジメントの取組の特徴の分析

次の表は、「**1**カリキュラム・マネジメントの取組状況報告」の具体的な取組を見直し、まとめた表である。

園番号	具体的な取組	補足	実施時期	視点	巻
1	保育記録	写真＋文章，教育課程の改善に役立てる	毎日	②	
1	学級通信の作成	写真＋文章	週1回	②	
1	小学校との連携	子供同士の交流，公開研究会の相互参観等	年間	②③	★
1	大学との協働体制	大学教員，学生ボランティア	年間	③	★
1	教育課程・指導計画の改善	適宜指導計画に朱書き，保育カンファレンスでの交流，公開保育における参加者アンケート	随時	①②	
2	教育課程・指導計画の改善	行事ごとに教職員・保護者アンケート，自己評価アンケート，保護者アンケート	12月～	③	

園番号	具体的な取組	補足	実施時期	視点	巻
2	振り返りの時間	降園後、担任、副担任で情報交換	毎日	①②	
2	ショートミーティング	全職員による情報交換	毎日	①②	
2	保育ミーティング	月曜日の降園後全職員で前の週の活動報告・反省	週1回	①②	
2	4校園交流事業	乗り入れや参観 公開研究会への参加 「情報活用能力」のカリキュラム作成	年間	②③	★
2	預かり保育	月に数回のイベント 学生との交流	年間	②③	
3	保育中の振り返りの時間の確保	幼児同士の「振り返りの時間」 活動の見直しをもつ	毎日	①②	
3	保育情報交換	保育の前後の情報交換 特別支援教育 社会情報性スキル	毎日	①②	
3	掲示用のドキュメンテーション	写真＋文章 幼児の目に触れるところ、保護者へも	年間	②③	
3	「健康に関する教育」という視点からの保護者との連携	附属学校園全体で「健康に関する教育」 保護者に理解を深めてもらう取組 「健康な心と体」 食に関する指導も	年間	①③	
3	事例研究会と大学教員との協働研究体制	大学教員、特別支援学校小学部教員と共同研究 事例検討会	年5回	③	
3	小学校との連携	公立小学校の教員と「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」に関する研修 附属小学校→公開研究会 子供の交流	年間	②③	★

上記の表を一つ一つの具体的な取組に切り分け、模造紙に似ている取組のものを集め、グルーピングを行った。その結果、「記録・評価」、「事例検討(園内研修)」、「小学校との連携」、「保護者との連携」等、23個のグループに分けることができ、図1(15頁)に整理した。また、その過程やグループごとに分けた結果、カリキュラム・マネジメントの視点から有効だと考えられる事項を赤字で書き加えた。

図2(16頁)には、各グループの関係を考察した。例えば、「記録・評価」と「事例検討(園内研修)」であれば、「記録・評価」で作成した資料を生かして、事例検討や園内研修を行うことが取組状況報告で記されていることから、『記録の蓄積』というキーワードで両グループを矢印でつなげた。また、カリキュラム・マネジメントの中心となる「教育課程・指導計画の改善」については、「保育案」、「小学校との連携」「保護者との連携」などの改善につながる取組のグループとつなげるなどして、キーワードとなる言葉で関係性をまとめた。

記録・評価

○毎日の記録¹²
 (幼児の姿、援助を記入)
 ○随時行う記録¹¹
 ※資質・能力や 10 の姿の視点で記入
 ※記録を蓄積することで、幼児の見取りを深める。

事例検討(園内研修)

○事例(幼児の姿)を基にした話し合い¹⁴
 ※幼児に対する教師の見取りが深まる。
 ※10 の姿などそれぞれの園の視点から考察する。
 ※大学教員などの高い専門性を生かす。

園内研修

○園内研修³
 ※共通テーマに基づいた研究
 ※年間を通した研究を見直しをもって進める。

研究公開

○研究公開⁷
 ※研究の成果を発表する。
 ※地域の保育の質の向上へ貢献

小学校との連携

○小学校教員とのカリキュラムや研究についての話し合い・引き継ぎ¹⁸
 ○子供の交流活動¹¹
 ※授業・保育の相互参観
 ※10の姿を基に子供の姿を共有する。
 ※交流活動では互恵性を意識した開かれた教育課程

情報共有(職員間)

○毎日の振り返り²²
 ○毎日の打ち合わせ³
 ○週1回～月1回の情報共有
 ○データによる情報共有²
 ○ホワイトボードの活用
 ※全職員での協力体制の構築
 ※幼児の姿の共有→一次の日や翌週の遊びにつなげる。
 ※遊びの見直しをもつ。

保育案

○日案の作成⁶
 ○週案の作成⁹
 ○2週ごとの週案作成³
 ○保育計画の作成
 ○指導計画の修正
 ※情報共有を図る。
 ※幼児の姿を踏まえて、翌日(翌週)のねらい等を考える。
 ※教育課程との照合
 ※環境の構成や援助等を見直す。

保育研究

○保育研究⁶
 ※保育側、参観側の両者の自らの保育を振り返る機会に
 ※学び続ける姿勢、自己研鑽を深めることが保育の質の向上につながる。

現職教員研修

○現職教員を対象にした研修⁵
 ○園外研修への積極的参加²
 ※研修体制づくり
 ※地域の保育の質の向上への貢献

合同研修

○幼小の合同研究⁶
 ※一貫カリキュラムの研究と体制づくり
 ※研究の組織やビジョンの共有

附属間・他校種の学校との連携

○附属間交流¹⁵
 ○一貫カリキュラム⁹
 ※相互参観や交流活動で子供の姿を共有し、教育課程や指導計画の改善に生かす。
 ※交流活動では互恵性を意識した開かれた教育課程

教育課程・指導計画の改善

○教育課程・指導計画の改善⁴⁴
 ○行事内容の見直し²
 ○グランドデザインの整備
 ○教育計画の見直し
 ○環境の構成の工夫・改善
 ※保育記録や週案等を根拠資料にして見直しを図る。
 ※自己評価、保護者アンケート、学校評議員会等の意見を基に見直しを図る。
 ※5領域や10の姿、資質・能力等の位置付けを検討。

地域との連携

○外部の施設・人材を活用した活動⁹
 ○学校評議員委員会²
 ※自然や食育について講師を招いて活動。
 ※地域の自然・祭りを生かす。
 ※教育課程に位置付けた取組を検討する。

教材研究

○プロジェクト型保育
 ○自作教材を活用した保育
 ※幼児の実態に即し、教育課程に沿って進める。

園内環境の見直し

○園環境の見直し⁵
 ○安全点検³
 ○環境の構成についての相互参観
 ○園内研修における園庭での遊びの分析と園庭づくり
 ※幼児の遊びと園内環境のつながりを考える。
 ※保護者や他機関との連携を図る。

保護者へ発信(学級)

○園便り・学級通信等¹⁰
 ○掲示用ドキュメンテーション¹⁰
 ○降園時にその日の遊びを知らせる⁶
 ○掲示板の活用⁵
 ○スライド
 ○資質・能力に関するコラムの作成
 ※写真の活用
 ※送迎時に毎日保護者と顔を合わせる良さを生かす。
 ※幼児一人一人の遊びや学びを伝える。→教師の見取り

評価

○学校評価³
 ○保護者アンケート⁵
 ※様々な視点から意見を集めることで、改善に生かす。

大学との連携

○共同研究¹¹
 ○専門家として保育に招聘¹³
 ○施設利用⁵
 ○学生の参加⁶
 ※大学の専門性を教員や幼児に生かす。
 ※教員には、保育の質の向上が期待できる。
 ※幼児には、学びの深まりが期待できる。

振り返り(幼児)

○保育中の振り返りの時間の確保⁸
 ○幼児向けクラス便り
 ※遊びの見直しをもつ
 ※学級共通の認識をもつ→遊びにつながる。

保護者との連携

○園・学級の方針説明⁹
 ○保育参観・保育参加⁷
 ○保護者による保育アソシエイト⁵
 ○環境整備・ボランティア²
 ○食に関する指導・健康に関する教育²
 ※十分な説明と幼児の育ちを共有する協力体制づくり

情報発信

○ホームページやブログ等による情報発信⁸
 ※保育・幼児の成長の「見える化」を図る。
 ※保護者や地域へ情報を発信し、園経営の理解につなげる。

保護者へ発信(個人)

○評価指標の活用
 ○連絡帳でのやりとり
 ○おたより帳のコメント
 ○個人用ドキュメンテーションの配付
 ※個の育ちの見取りを保護者と共有する。

子育ての支援

○保護者との懇談機会の新設
 ○預かり保育
 ※保護者と子育ての迷いや悩みを話せる場をつくったり、子育ての支援を行ったりする。

※ ○内の数字は、取組園数

【図1：グループ別の取組】※赤文字はポイントとして書き加えた

図 1,図 2 から、本園では、カリキュラム・マネジメントの取組の特徴を次のように捉えた。

【カリキュラム・マネジメントの取組の特徴】

○ 職員間の情報共有を図る。

職員間の協力体制を特徴に掲げている園が多く、職員間の情報共有は欠かせないものになっている。幼児の主体性を大切にする保育においては、1日の保育を振り返り、情報共有をする時間が大切である。

○ 記録の蓄積を幼児理解や園内環境の見直し、保育案の改善、園内研修に生かす。

保育後に、紙媒体で、付箋で、データで、写真と文章でなど様々な方法で記録を残し、それらの記録を蓄積することで、幼児理解や園内環境の見直し、週案等の保育案の改善、園内研修等に生かしている園が多く見られた。保育後の記録の蓄積は、幼児一人一人の育ちの見取りにもつながり、幼稚園教育の中で最も大切にしていきたいものである。

○ 遊びの振り返りや教材研究で、見直しをもった保育につなげる。

幼児と共に一日の保育を振り返り、学級で遊びを共有し、次の日や翌週の遊びへとつなげることが充実した遊びへとつながる。幼児の遊びの実態を把握し、記録や週案等の保育案、教育課程や指導計画へとつなげていくことが大切になってくる。

○ 教育課程や指導計画の改善につながる取組を図る。

前頁に挙げられたカリキュラム・マネジメントの具体的な取組は、教育課程や指導計画へとつながっている。記録や事例検討、情報共有の時間等で話し合われたものを、教育課程や指導計画の見直しへとつなげている園が多く見られた。また、幼稚園教育要領で示された「5領域」や「資質・能力」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で教育課程や指導計画を見直し、幼児の姿と照らしながら、改善に努めていく必要がある。

○ 幼小接続を意識した連携を図る。

小学校との交流だけに留まらず、保育と授業の相互参観や、研究テーマを共有して互いに研修を行うなどの幼小接続を意識した取組を行う園が多く見られた。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から幼児の育ちを見取り、小学校と共にスタートカリキュラムづくりを行う園があるなど、これから益々、小学校とのつながりを強くする取組が必要になってくる。

○ 地域とのつながりを深める取組を図る。

地域の人材や施設を活用した保育内容としている園が多く見られた。カリキュラム・マネジメントでは、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていく必要がある。地域の素材や人材を生かす中で、国立大学附属幼稚園においては、大学が身近にあり、大学の人的・物的環境を生かした取組も多く行われている。大学の高い専門性を生かしつつ、地域の他の外部資源を洗い出し、保育に生かすことができる内容を教育課程や指導計画に反映させ、共有していくことが大切である。

○ 保護者への情報発信を行い、幼児の育ちを共有し、連携・協力する取組を図る。

保護者と共に幼児の成長を支えるという思いのもと、幼稚園では、幼児の育ちの見取りや園の方針等を細かに知らせる必要がある。お便りや連絡帳、懇談会、送迎時の連絡等で細かに情報交換を行い、園への理解を得たり、環境整備などで協力を得たりしながら、共に幼児の成長を支えていくことが大切である。また、園内研修等で見取った個々の育ちを各家庭に知らせ、今後の指導に生かしていくことも大切だと考える。

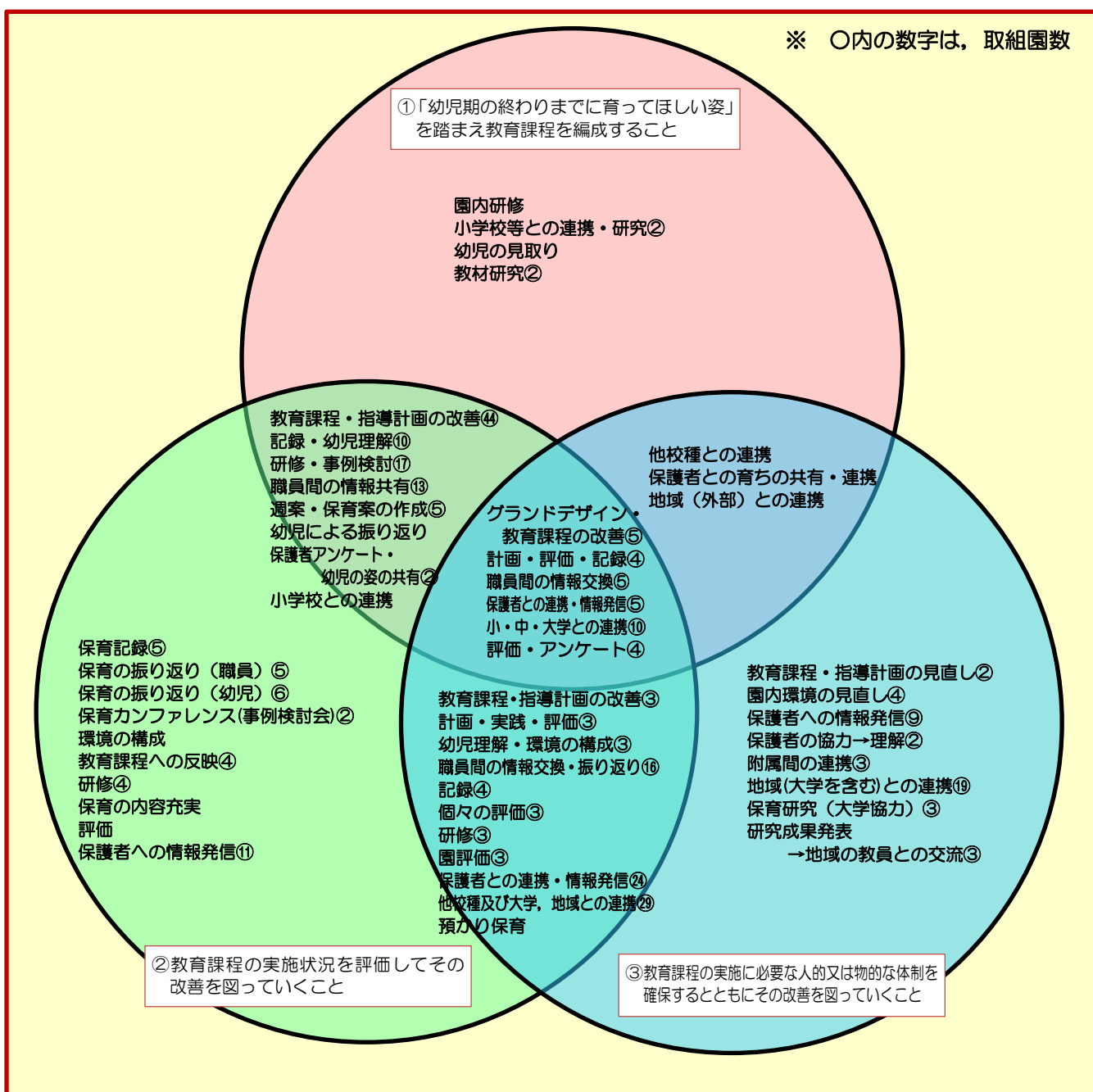
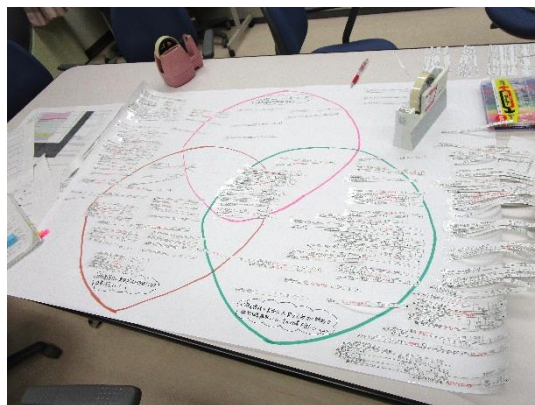
○ カリキュラム・マネジメントの中で効率的な取組を考える。

データによる情報共有や朝の打合せの時間をカットするなど、カリキュラム・マネジメント上、効率的な方法を模索している取組が見られた。効率的で効果的なカリキュラム・マネジメントの視点も大切にしていきたい。

上記の特徴をつかんだ上で、「幼稚園教育要領に示されているカリキュラム・マネジメントの3つの視点」から分析・検討を行うことにした。また、分類をする中で「実施回数や時期」によっても特徴が現れるのではないかと考え、「実施回数や時期」による分析・検討も行うことにした。

(3) カリキュラム・マネジメントの3つの視点から見た特徴分析

「1」カリキュラム・マネジメントの取組状況報告」の具体的な取組を①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること、②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことの3つの視点で分類し、関連を次の図のように表した。図に示すことで、カリキュラム・マネジメントの3つの視点から見た特徴を明らかにする。



【図3：カリキュラム・マネジメントの3つの視点から見た特徴】

図3から、本園では、カリキュラム・マネジメントの3つの視点から見た特徴を次のように捉えた。

【カリキュラム・マネジメントの具体的な取組の特徴】

①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。

本年度から実施されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえてどの園も教育課程に取り入れている。①のみの視点だけでなく、取組においては、『②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。』や『③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。』なども取り入れながら総合的に実施している園が多く見られた。

日々の記録や職員間の情報交換、事例検討等の際にも、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かして、園児の姿を見ることが、全職員が共通の視点で園児の姿を見取ることへとつながり、幼児理解に基づいた指導案の作成につながる。

②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

②の視点からみても『①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。』、『③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。』との相互的なつながりが見られる。

日々の保育の中の幼児の育ちを記録したり、職員同士で共有したりすることが次の日の保育につながることで、書き溜めた記録を事例に起こし、職員や大学や小学校との教員と検討し、改善を図ること、保護者や地域の思いや願いをアンケート等で受け止め、教育課程に反映させることなどPDCAサイクルでのつながりを意識して教育課程を編成することが大切である。

③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

③の視点においては、『①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。』や『②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。』との関連を図りながら、保護者や附属間の他校種の学校、大学、公開研究会を通して、地域の先生方と連携を図って実施されている。

地域の素材や人材を洗い出し、教育課程の実施にあたり、「何ができるか」「どのように生かしていくことができるのか」を考えていく必要がある。また、保護者の理解と協力は、園運営にとっては不可欠であり、幼児の育ちを共有するためにていねいな情報発信を行い、園運営への理解と協力を得ていくことが、カリキュラム・マネジメントを行う上でも大切である。

【まとめ】

カリキュラム・マネジメントにおいて、様々な取組はつながって行われている。効果的なカリキュラム・マネジメントを考える上では、上記の視点において取り組み、一つ一つの取組が、効果的につながっていくことが大切だと考える。そして、最終的には、様々な取組が教育課程へとつながっていかねば、効果的なカリキュラム・マネジメントとは言えないであろう。一つ一つの取組のつながりと目的を明らかにしながら、カリキュラム・マネジメントを実施していく必要がある。

また、様々な取組がある中で、それらを自園に生かすためには、時間や労力等も考えながら、バランスよく取り入れていくことが大切である。

(4) 年間を通したカリキュラム・マネジメントの実施回数や時期による分析

カリキュラム・マネジメントの具体的な取組を分類し、関係性を示す中で、「実施回数や実施の時期」による特徴を明らかにすることで、各園のカリキュラム・マネジメントの効果的な取組の参考にできるのではないだろうか。そこで、次頁のように図に分類したものを「実施回数や実施の時期」で整理し、赤文字で示した上で、特徴を検討することにした。

下記は、図4から、カリキュラム・マネジメントの実施回数や時期の特徴を捉えたものである。

【カリキュラム・マネジメントの実施回数や時期による特徴】

○ 毎日実施し、積み重ねることが必要なもの

毎日行っているものとしては、情報共有・記録・振り返り（幼児）が多く挙げられた。これらは、翌日の保育へと直接つながるものである。その日の保育を振り返り、情報を共有し明日への見通しをもつことで、翌日の保育へのつながりが見られ、保育の質の向上を図る。

○ 週単位での見直し、検討が必要なもの

週単位で行っているものとしては、保育案や事例検討が挙げられる。週を単位として保育案を作成し、実施後に振り返ることで、教育課程・指導計画の改善へとつなげている園が多く見られた。また、幼児の姿や育ちを事例として話し合うことで、全教職員で共有することができ、園全体として次週の指導の改善につなげることができる。

○ 年間を通して実施する取組

外部との連携については、年間を通して数回実施している園が多く見られた。園の実態により実施状況は異なるが、幼児の実態に基づき、身近な人材や施設を活用したり、他校種の学校と連携を図ったりして、1回のみではなく、複数回実施することで、より充実した連携となる。また、そうして外部との連携を行う上で、教育課程・指導計画の共有を図ることが、社会に開かれた教育課程の実現につながる。

○ 保護者との連携や情報発信

保護者との連携や情報発信については、週単位や年間を通して定期的に行われているものが多く挙げられた。週単位で幼児の様子を発信したり、定期的に幼児の育ちを振り返ったり、共に幼児と関わったりすることで、幼児の育ちを園と保護者で共有することができ、園への理解や協力を高めていくことへとつながる。

○ 教育課程・指導計画の改善に向けて

毎日行うものや週単位で行うもの、また年間を通して行うものなど、様々な間隔で振り返りが行われている。大きな見直しを年度の後半に行うものの、常に教育課程・指導計画の見直しを視野に入れながら、小さな改善を日ごと、週ごと、期ごとに実施し、改善を図っていくことが有効だと考えられる。



※ ○内の数字は、取組園数

【図 4：実施回数や時期から見た考察】※赤文字はポイントとして書き加えた

(5) 協力園のカリキュラム・マネジメントの取組状況報告

48園から「①カリキュラム・マネジメントの取組状況報告」を受けた中、各地区のブロックより1園を抽出して7園のカリキュラム・マネジメントの取組を紹介する。

山形大学附属幼稚園

1 園の概要（平成30年度）[園・教育課程の特色]

(園の概要)

本園は、1学年34名定員の小規模幼稚園である。各学級担任の他は、副担任2名と養護教諭のみの配置であるため、学年交流や全体での遊びを大切にし、全身体制で保育を行っている。また、大学附属の幼稚園として、教育学部のほか、他学部とも連携した保育活動を取り入れている。附属学校園全体の特別支援コーディネータ（特別支援学校籍）とメンタルケアコーディネータ（中学校籍）による早期支援や保護者への支援活動も取り入れている。



【コーディネータによるコミュニケーション活動】

○ 園の教育課程の特色

本園の教育目標「心豊かでたくましい子どもの育成」に基づき、附属学校園全体のコーディネータと連携しながら、一人一人の個性や発達に応じた援助のもと、自らが選んだ活動（遊び）に主体的に取り組み、遊びこむ子供の育成を目指して、教育課程を編成している。また、秋にはトンボが飛び交う広い園庭と50種類以上の樹木が生育する豊かな自然環境を生かし、年間を通して季節の変化に応じた遊びを取り入れたり、行事と関連づけたりした活動を位置づけている。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や小学校との学びの接続を視点に、5歳児の子供の調和の取れた姿に至るまでの、各期の具体的なねらいやその時期に大切にしたい遊び、援助のポイントなどをまとめた「遊びの保育デザイン」を作成し、ディスカッションを行って更新を図りながら、保育にあたっている。

○ 新幼稚園教育要領の実施に向けた改善点【平成29年度の取組】

「遊びの保育デザイン」と各学年の実践を照らし合わせ、重点的に取り組む内容やより具体的に示す項目等について検討・整理を行い、教育課程に反映させた。働き方改革に向けての取組も求められていることから、これまで伝統的に行っていた活動等についても、ねらいの再検討を行い、優先順序をつけて、削減を図った。

2 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。

- ・ 学年で取り組む活動や園行事について、それぞれのねらいを再検討し、年間におけるその期の育ちと学年の発達との関わりについて共通理解を図って、教育課程を編成している。
- ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる学年ごとの子供の姿や教師の援助について、打合せ時間の工夫やツールを活用し、園職員全員で共有することができるようにしている。

② 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

- ・ 日々の保育のねらいや援助について、週案及び個人の記録をもとに学年及び全体で話し合う場を設け、改善に努めている。
- ・ 行事や主な活動終了後に、保護者からの感想及び意見を集約し、ねらいの達成度を確認し、課題については、その都度検討して改善に努めている。
- ・ 年に2回、園務分掌ごとに反省の場を設け、目指す子供の姿等とともに働き方改革の視点からも検討して、改善を図っている。
- ・ 保護者、学校関係者及び教職員による学校評価アンケートを実施し、次年度の教育課程編成に生かすと同時に、必要に応じて、随時保護者へ説明する機会を設けている。
- ・ 学校評議員会において保育参観を含めた説明及び意見交換を行い、教育課程の改善に生かしている。

③ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

- ・ 附属学校全体のコーディネータを、それぞれ週に1～3回配置し、保育中の子供の様子や登降園における保護者とのかかわり等を観察してもらい、必要な援助等について保育者と話し合う機会を設けている。また、小学校籍の学習支援員を幼稚園の保育にも入ってもらい、小学校との

接続をふまえて気付いたことを情報提供してもらったり、活動をサポートしてもらったりしている。

- ・ 今年度の重点である「食育」に関して、大学の教員にアドバイザーをお願いしている。幼児期に必要な栄養やお弁当について、保護者に向けて講演を行ってもらったり、研究室の学生からは年間を通じて食に関する保育活動をサポートしてもらったりしている。
- ・ 園の自然環境を生かした遊びを充実させるために、植物研究の方を講師に迎えて、園内研修を行っている。
- ・ 暑い時期であっても、子供達が十分に身体を動かしたり、集団で一斉活動を行ったりすることができるように、今年度より遊戯室にエアコンを設置した。

(具体的な取組内容)

- 保育の振り返り【毎日】…②, ③
毎日の保育後、子供達の姿と遊びの様子をもとに、教師の援助や環境構成について、担任と副担任、さらには支援員やコーディネータと振り返る時間を設けている。加えて、研究の視点から遊びを重点に話し合う「UTC」(カフェ形式)を取り入れ、柔軟な形で話し合う機会を設けている。
- ホワイトボードを活用した情報の共有【年間】…①, ②
勤務日が異なる講師やコーディネータ、支援員などとも、子供の様子や教師の援助・ねらい等について共有することができるように、研究会をホワイトボードに記録し、話し合いの過程及び内容の可視化を意識しながらすすめている。つぶやきや意見の交換等もイラストや図式を用いて加えて記録し、終了後も職員室に設置して、どの時間帯でも見るようにしている。
- 子供の育ちを共有する保護者会【年3回】…②
活動のねらいや遊びを通した子供の育ちを保護者と共有するために、長期休業前の保護者会において、写真と映像を用いて子供の姿をもとに説明している。
- 自作教材を活用した体験型保健指導【年間】**【別添参照】**…①
日常生活の中で起こるけがや病気、自分の身体等について関心を持ち、健康な身体づくりに必要な活動や習慣を身につけることができるように、養護教諭が体験型教材を自作して掲示している。さらに、身体計測時には、その教材を使って保健指導を行ったり、学級に掲示したりして担任とともに指導し、健康な生活習慣の定着を図っている。
- 子供自身による遊びの振り返り【毎日】…②
降園前にその日の遊びについて、学年に合った形(〇〇タイムなど)で友達に紹介する時間を設けている。紹介活動を行うことで、それぞれが遊びを振り返り、興味・関心が友達とつながったり、発展したりしている。
- 保育サポーターとの連携【年間10回程度】…③
保護者に行事や保育活動のねらいを理解していただき、円滑な運営ができるようにするために、選択制で諸活動の準備・運営に参加してもらっている。
- 外部との連携【年間】…①, ③
今年度よりJRC(※青少年赤十字)活動に加盟し、危険な場所や遊び方、災害時における自分の身の守り方などについての理解を深めるとともに、安全意識を高め、自分で判断・考えて行動できるよう意識化を図っている。
- 教育課程・指導計画の改善【10月～12月】…①②
日々の保育の振り返りや活動・行事の反省をまとめ、次年度の教育課程編成に生かしている。学校評議員や保護者からの意見についても、検討し、改善を図っている。

3 来年度に向けての改善点・課題

- ◇ 働き方改革に向けて一層の取組が求められる中、限られた時間内でいかに教職員それぞれが質の高い保育に向けての準備及び研修を行っていくかが課題である。
- ◇ 附属学校全体の「目指す子供」を改訂したのを受け、特に小学校との接続で特に大切にしたい育ちについて検討していく。

東京学芸大学附属幼稚園（小金井園舎）

1 園の概要（平成30年度）〔園・教育課程の特色〕

（園の概要）

本園は、各学年2学級で全員3年保育を実施している。徒歩での登園可能な範囲を区域とし、7、8割の卒園児は地域公立小学校へ就学しており、地域（家庭）とのつながりが密である。そして、地域の一般的な幼児を受け入れるという理念のもと、30年以上前から、入園募集にあたり、障害枠を設けている。本園の教育体制の中で、受け入れ可能な幼児と共に一人一人を生かした保育を実践している。また、大学キャンパスと同一敷地内にあることを生かし、大学学部とのつながりも密である。学部1年生から現場経験の希望を受け入れており、自主的に来園する学生数は例年間のべ500名を超える。在園児・保護者にとっても学生は身近な存在として位置づいている。



【遊び方も必要なものも自分で考える】

○ 園の教育課程の特色

本園の教育目標「人や身近な環境にかかわる中で、主体性と協同性を育みながら、明るく伸び伸びと自己を発揮する子どもを育てる」に基づき、体験を通して自ら考え・行動し・感動する子供の育成を目指して教育課程を編成している。各学年を3期ずつで捉え、学年ごとの発達を意識しやすくなるようにしている。一方、それぞれの期の期間は年度当初には定めず、幼児の実態に応じるためにある程度の幅をもたせている。そのため、幼児の育ちをしっかりと捉え、移行の時期を見極めている。また、豊かな自然環境を生かすだけでなく、特に5歳児学年では、動植物との関わりの中で、より経験を積み重ねたり見通しをもった体験をしたりできるよう、アヒルや鶏などの飼育活動や水田での稲作活動を重視し位置付けている。

○ 新幼稚園教育要領の実施に向けた改善点【平成29年度の取組】

本年度教育課程編成の段階で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で、全学年の内容を見直した。各学年・各期のねらい及び内容に含まれる、10の姿をみいだしたり、文言の表現を改善したりした。

2 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

(1) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。

- ・教育目標や今まで積み重ね大切にしてきた教育実践を、改めて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で見直すことにより、教育課程の中に散りばめられている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」への意識を高め、今年度の教育課程を編成した。
- ・園内においては、職員会議のほか教員会議や毎日の朝会において、育ちの捉えを共有したり、学年発達の違いに気付き合ったりできるようにしている。また、研究テーマを「しなやかな心と体をはぐくむ保育」とし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の1つ1つがバラバラな到達の姿ではなく、複合的な姿として捉える視点をみいだし、幼児理解や教師の援助について検討し、教育課程編成と日々の保育に生かしている。
- ・家庭に向けては、園長や副園長講話により、園の教育目標などを説明すると共に、ホームページや園だより、保護者会時での写真を使った説明などにより、幼児の姿とその中での学びや育ちについて説明を行っている。

(2) 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

- ・日々の記録は、原則として全担任が共通の形式で行う。自身の振り返りが積み重なると同時に、学年を超えて互いの記録内容の理解がしやすくなったり、幼児の捉えについてより深い評価や教師の援助が検討できたりしている。
- ・園内研修においては、観察者になる教師は、A4用紙1枚分にポイントを絞って記録を作成する。全員の記録用紙をもとに、検討を深めることで、保育の改善や教育課程の見直しにつながる。
- ・小学校の教員との連携においては、年中児と3年生の交流活動が互いのカリキュラムに位置づいている。幼小共に互いの育ちやねらいなどを検討しあい、互いの子供たちにとって互惠性を意識した検討を毎年重ねている。
- ・講師を招いての保育検討会や研究協議会において、保育の見直しや幼児の育ちについて、より多くの視点から、見直したり捉え直したりしている。

(3) 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保すると共にその改善を図っていくこと。

- ・ 幼児一人一人の育ちを見取りながら、それぞれの発達と集団の育ちを支えるために、担任のみならず、全教職員が幼児の教育及び安全に関与できるようにする。
- ・ 担任は、学級・学年を超えて幼児とかかわる意識を高める。
- ・ 障害枠入園児を含め、個別の支援を要する幼児への理解、保護者対応について、大学専門家教員と連携を図っている。
- ・ 保護者が保育内容にかかわる機会や行事運営を担う機会などを設け、園と家庭が共に幼児の成長を支え合う意識を高めている。
- ・ 大学学部生・院生の受け入れを積極的に進め、幼児が多様な人との関わりを経験できるようにし、学生にとっても体験を伴う専門性の学びを深められるようにしている。
- ・ 飼育栽培活動においては、学校獣医師や地域住民など専門家との連携を図っている。
- ・ 大学の教育支援員制度や育児支援員制度などを活用し、教職員が様々な状況に余裕をもって対応できるように努めている。

(具体的な取組内容)

○教育課程・指導計画の改善【年間】・・・①②

月に1、2回の教員会議で日常保育や個々の行事などの振り返りを行い、各行事では保護者アンケートを実施している。日常保育や行事などにおけるねらいや内容を教員間で共通理解すると同時に、保護者アンケートでは、園の意図が伝わっているか、保護者の納得などを細やかに捉えたりニーズに応えたりなど、改善に生かしている。

○園内保育検討会【各学年年2回】・研究協議会【年1回】・・・①②③【別添参照】

園内保育検討会では、園内教員同士が互いの保育を見合い、幼児の育ちについてより具体的に共通理解が図れるようにしている。研究協議会は、研究テーマに基づくが、参会者と共に、多様な視点から保育を見直したり、幼児の育ちを捉えなおしたりする機会としている。いずれも教育課程改善にもつながる取り組みとなっている。

○保育記録【毎日】・・・②

主に環境マップ型記録を活用している。広い園敷地内、また、学年運営で幼児が学級を超えて関わりを広げている中で、それぞれの育ちや集団の育ちを短期・長期で捉えられるようにしている。

○掲示用ドキュメンテーション・ホームページの作成【月2回】・・・①

各学年で、日々の保育活動やトピック的な活動について写真を用いた掲示を作成し、様子を伝えている。また、月2回程度、保育内容について写真や解説をホームページに掲載し、保護者だけでなく、地域に実践を開いている。

○職員朝会【毎日】・・・②③

毎日朝会を開き、一日の予定だけではなく、各学年の幼児の育ちや指導などの重点を述べ合い、全教職員で情報共有を行う。保育時間中に、どの学年の幼児に会っても、より学年の意図に即した対応が可能になるようにしている。

○校内委員会開催【年3回】・・・②③

大学専門家教員を招き、個別の指導について専門的な意見や情報を得たり、集団生活での育ちについて専門家からの見方を知ることができたりする。担任のみならず、保護者の相談窓口にもなっており、幼児・教師・保護者いずれの支えにもなっている。

○小学校との連携【年間】・・・②③

幼児・児童の交流活動は年3回だが、幼稚園教諭と小学校教諭が互恵性を意識した指導内容及び指導計画を同一紙面に一緒に作成している。明文化することで、相互の育ちを確かめ合ったり、幼稚園教員にとっては、就学後の見通しの手掛かりが得られたりすることで、日常保育の見直しを図るきっかけにもなっている。

○学生との連携【年間】・・・③

自主参加や卒論・修論などについて可能な限りの受け入れ、地域未就園児の会を学生主体で企画運営、行事における学生スタッフなど、可能な限り現場体験の中から気付きや学びを深められるようにしている。幼児にとっては大人が増えることで、安心感や満足感を得られる姿もあり、教師とは違う育ちの支えとなっている。

3 来年度に向けての改善点・課題

◇保護者や外部関係者などに説明可能な明文化の工夫は課題だと感じている。

上越教育大学附属幼稚園

1 園の概要（平成30年度）[園・教育課程の特色]

(園の概要)

本園は平成4年に開園し、全国の附属幼稚園の中では最も歴史が浅い園である。3歳児から5歳児まで各1学級、各学級には担任と副担任の2人、その他に教育補佐員と養護教諭が各1名配置されている。自然豊かな広い園庭と開放的な園舎で展開される幼児の主体的な遊びを全職員で援助している。平成28年度から預かり保育を始めた。専属の保育担当職員3人が正規保育時間の前後に、同園舎と園庭で預かり保育を行っている。



【広い園庭と森に囲まれた園舎】

○ 園の教育課程の特色

開園当初から、幼児主体の保育実践を行っている。幼稚園教育要領のねらいを総合的に達成するために、これまでの文部科学省研究指定の「幼小連携」「幼小接続」及び「仲間関係」「遊び込む子ども」のそれぞれの研究成果を踏まえて、その都度、教育課程および年間指導計画を構築・発展してきた。教育期は、幼児の発達と生活の節目を捉えて、年齢ごとに4期に区分している。また、5歳クラス9月から小学校1年生の上旬までは幼小の接続期と設定している。また、幼児の1日の園生活を、「遊び」「みんな」「せいかつ」の3つの観点で分類し、指導計画の内容に反映している。

○ 新幼稚園教育要領の実施に向けた改善点【平成29年度の取組】

遊びを通して、生きる力の基礎が育成されるよう、環境を構成し援助することを大切にしている。遊びを一層充実させ、より質の高いものにしたいと考え、平成25年度から「遊び込む子ども」をテーマにして、6年計画の研究に取り組んでいる。既存の教育課程に沿って教育活動を進めながら、平成25～27年度には遊び込んだ事例の蓄積、分析を行い、本園における遊び込む姿の定義づけ、それを支える教師の援助と環境構成を探った。平成28年度からは、従来の教育課程を見直し、再編成に取り組んでいる。平成29年度は、年間指導計画のうち、「みんな」と「せいかつ」の活動内容と教師の援助についての見直しを行った。その上で、2つの活動から各教育期における教師のねらいや期待する幼児の姿を「こんなふうに育てほしい」という項目に付け加え、教育課程及び年間指導計画の素案を作成した。

2 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。

- ・小学校経験豊富な学級担任が中心となって、学校教育のスタートとしての幼児教育の重要性を踏まえ、小学校教育に何を発信し、接続していけばよいのかを追究し、教育課程の中に位置付ける。
- ・幼児教育の重要性を考え、それを支えている家庭や地域との連携を深める工夫をする。

② 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

- ・平成29年度に作成した教育課程および年間指導計画の有効性を様々な角度から検証し、その検証過程と根拠を協議、蓄積する。
- ・幼児の「遊び込んだ」事例を分析、考察、蓄積し、遊びを中心とした幼児の自発的な活動を支える園生活の具現に努める。

③ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

- ・担任と副担任で行うチーム保育の意義を考え、それを積極的に取り入れた教育に努める。
- ・園生活における各種行事の意義を考え、年齢や幼児の発達の過程に応じた行事を計画的に位置付ける。
- ・園舎内外の物的な環境を計画的、意図的に見直し、適当な環境を通して行う教育の実現に努める。

(具体的な取組内容)

- 保育の振り返り【毎日】・・・①②
 - ・毎日の保育後に、全職員で保育の振り返りを共有する時間を確保する。
 - ・各教育期の目指す子供像に合わせて、保育の振り返りおよび幼児の評価を日々行い記録する。
 - ・過去の「幼小連携」および「幼小接続」の研究成果を生かした教育課程、年間指導計画の中に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が溶け込んでいることを幼児の学びの姿を通して検証する。
- 小学校との連携【年間】・・・①
 - ・上記の研究の際に設定した本園の接続プログラムを継続して活用し、小学校との連携、連絡・協議を行う。子供同士の交流活動(年6回)、教員同士の情報交換・活動案検討、保護者説明会等
 - ・附属小学校1年生担任に研究協力者を依頼し、保育参観、研究協議を通じて指導・助言をもらう。
- 研究会での発信【年1回】・・・①②
 - ・研究会に、県内の小学校教員にも参加してもらい、保育と幼児の学びについて理解を深める機会とする。特に、本園がある上越市の学校教育研究会生活部会の部員から多くの参加を募る。
- 保育公開【年2回】・・・②
 - ・地域の公立及び私立幼稚園やこども園の職員に研究協力者を依頼し、保育参観と協議を通じて、指導助言をもらう。
- 週案の蓄積・改善、指導計画の修正【年間】【別添参照】・・・②
 - ・昨年度に作成した年間指導計画に沿って実践を進めながら、週案による保育の振り返りや遊び込んだ事例の収集を行い、教育課程および年間指導計画の有効性を検証する。
- 家庭との連携【毎日】・・・②
 - ・学級担任が降園時に、保護者にその日の幼児の遊びや学びを具体的に話したり、前日の園生活の様子を写真入りの掲示物で毎朝知らせたりする。このことは教師自身の保育の振り返りと教育課程等の改善にもつながっている。
- 教職員の研修【年間】・・・③
 - ・保育の質を向上させるため、職員には他園の視察、研究会等に積極的参加を促す。
 - ・県や市町村教育委員会主催の研修会等の講師を積極的に引き受け、自園のカリキュラムや環境等の見直しに役立てる。
 - ・年間を通して、本学の幼児教育コースの先生に研修に加わってもらい、協議と連携を深める。
- 幼児教育の担い手の育成【年間】・・・③
 - ・職員が研修等で不在の間は、大学の幼児教育コースで学ぶ学生や院生の保育ボランティアを受け入れ、現場での保育実践を通じて、将来の幼児教育の担い手の育成に努める。
- 園環境の見直し【年間】・・・③
 - ・幼児の遊びを支える樹木の植樹をするとともに、不要な樹木の伐採をする。
- 行事の見直し【年間】・・・③
 - ・幼児や保護者連携にとって有益な行事を精選し実施する。また行事の内容をねらいに沿って見直し、行事の内容を教育課程に沿ったものに改善する。

3 来年度に向けての改善点・課題

- ◇担任(副担任)と預かり保育担当で、正規保育時間とのつながりを意識した預かり保育の指導計画を整備する。
- ◇幼児教育や子育ての重要性について、これまで以上に地域に発信する拠点となるよう、地域との関連施設・団体との連携を深め、地域に貢献する。

愛知教育大学附属幼稚園

1 園の概要（平成30年度）〔園・教育課程の特色〕

本園は今年で94年目を迎える歴史ある園であり、親子二代三代にわたり通園している家庭もある。今年度、3歳児が一学級増設され、各学年二学級、計6学級となった。園庭は3歳児の中庭と4.5歳児の南園庭に分かれており、それぞれの学年が思う存分体を動かして遊ぶことができる。敷地内には大きな木々が育ち、附幼の森、草の広場、ブランコの森、ビオトープなどがあり、都市部であるが虫や木の実や葉などの自然に触れ、季節の変化や興味に応じた遊びがたっぷりできる。

同じキャンパスに小学校、中学校があり一年生との交流、行事参観など三校園の連携を図っている。



【附幼の森にロープを張り忍者の修行】

○ 園の教育課程の特色

教育目標である「一人一人の自己肯定感を育み、生涯にわたる人格形成の基礎を培うこと」に基づき「心も体もたくましい子ども」「感性豊かで思いやりのある子ども」「自分で考え行動し、やりぬく子ども」を育成することを目指して教育課程を編成している。今年度の研究主題「体と心を十分に動かして遊ぶ幼児の育成」の視点から教育課程の見直しを行っている。

○ 新幼稚園教育要領の実施に向けた改善点【平成29年度の取組】

学校評議員会で「幼稚園の教育内容を保護者にもっと理解してもらえるとよい」という意見をもらった。「社会に開かれた教育課程」を目指し、学年だよりや保護者会を通じて子供たちの遊びの意味や育ち、教師の意図を説明したり、ホームページで遊びの様子のブログ公開を始めたし、保護者に教育内容を理解してもらえるように取り組んでいる。

隣接する小学校、中学校と三校園で教科研究を行った。幼小接続を意識し、職員間で交流を深めたり、保育参観、授業参観を行い互いの教育について理解を得たりした。

2 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。

- ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、今年度は『健康な心と体』の視点から育てたい姿や発達の過程の共通理解を図り、教育課程を編成する。
- ・ 事例検討や日々の保育実践から見えてきた幼児の育ちの過程を明らかにし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、教育課程の改善を図る。

② 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

- ・ 日々の保育の反省や週案作成時に、幼児の姿や遊びについての情報交換を行い、幼児が主体的に活動できる場や空間の確保、幼児の気付きや工夫を促す教材の工夫をし、より深い学びへと導くことができるよう短期指導計画の作成をする。
- ・ 事例検討を通して、幼児の育っている姿を明らかにし、必要な教師の援助、ふさわしい環境構成について考え、必要に応じてハード面での園内環境（自然環境・固定遊具・大型遊具など）の見直し・整備を行う。
- ・ 各学期末に各学年の幼児の育ちの状況を共通認識し、教育課程の評価・改善をする。

③ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

- ・ 大学の保健体育講座の教員に保育現場で指導をしていただき、体と心を動かして遊ぶことに関して専門的知見を得たり、教材について助言を求めたりする。
- ・ 大学教員より学んだことを保育に生かし幼児がふさわしい経験ができるよう指導計画を見直し改善する。また、幼児の成長を捉え、ねらい、内容について検討し教育課程に位置付けていく。
- ・ 保護者アンケート（行事後、2月）を実施し、評価を日々の保育、教育課程編成に生かす。
- ・ 学校評議員会を年に2回開催し、園の取り組みや保護者アンケートの結果を説明し、意見交換を行い、教育課程の改善に生かす。

(具体的な取組内容)

○ 保育反省・週案作成【毎日・週1回】・・・②

毎日の保育後に、他学年の担任やフリー教師とその日の子供たちの姿や遊びの様子を話題にし、話し合い多面的な幼児理解に努め、次の日以降の教師の援助やふさわしい環境について考えたり、週案作成をしたりする。

○ からだ遊びシートの作成【各学年2週間に1回】・・・①②

幼児が体と心を動かして遊んでいると思われる場面の事例を集め、体と心の育ちや発達の過程について明らかにし、どのような教師の援助や環境の工夫が必要であるかを考える。また、からだ遊びシートを基に話し合うなかで、見直しが必要な環境について改善する。

○ 大学教員との連携【随時】【別添参照】・・・③

休日保育参加で『親子でからだ遊び』の講師として保健体育講座の大学教員を招き、マット遊びや親子の触れ合い遊びを指導していただき、親子で思う存分体を動かして遊んだ。そこで楽しんだ経験や学んだ環境を保育に取り入れ、体を動かして遊ぶ楽しさを味わうことができるように日々の保育を計画する。

運動会の種目について考える際に、今まで経験してきたことを基に自分の力を発揮し体を動かして遊ぶ楽しさを味わえるような工夫について大学教員にアドバイスを求め、教えていただいた。

○ 教育課程・指導結果の改善【各学期末 年3回】・・・①②③

各学期の終了時に各学年で保育を振り返り、指導計画・教育課程を修正している。今年度は、からだ遊びシートを検討する中で分かったことについて盛り込みながら加除修正している。

○ 保護者アンケート【行事後、2月】・・・②③

休日保育参加、運動会などの大きな行事の後に保護者アンケートをとり、幼稚園教育の意図がどのくらい伝わっているのか確かめ、保育や教育内容の伝達に生かす。2月には幼稚園の教育に関するアンケートをとる予定である。保護者による園評価を参考に教育課程・教育環境の改善を図る。

○ 学校評議員会【7月、2月】・・・②③

7月には園の概要と今年度の取り組みについての説明と意見聴取を実施、2月には保護者の園評価の結果分析についての意見聴取を行い、次年度の幼稚園教育、教育課程の改善に生かしていく。

3 来年度に向けての改善点・課題

① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた教育課程の編成について

『健康な心と体』の視点から見直しを行ったが、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は相互に関連し合って育っていくことが、事例検討する中でよく分かった。しかし、まだ、教師自身感覚的な捉えであり、3歳児、4歳児でのどのような姿が幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながっていくのか育ちのプロセスの分析が十分できていないので、理解を深めていきたい。

② 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくことについて

学期末に指導計画・教育課程の実施状況を話し合う際に、子供たちの育ちから見直しを行っているが、保護者アンケートの分析や学校評議員の意見等の評価から自分たちの保育を分析し、園の教育方針や教育課程を編成することが十分できていない。職員と話し合う中で、自園の特色について明確にし、再度共通理解し、教育課程の改善に生かしていきたい。

③ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制の確保とその改善について

専門機関として大学教員の助言や指導を必要に応じて求めてきたが、年間を見通して計画を立て、そのような機会を作り、幼児の生活がより豊かになり教職員自身も力をつけていくことができるようにする。

奈良教育大学附属幼稚園

1 園の概要（平成30年度）〔園・教育課程の特色〕

本園は「豊かな自然に囲まれた『ころも』も『からだ』も育つ幼稚園」として、恵まれた環境を生かし、これまでの研究成果を基盤に「自尊心」と「からだ力」を育むことを目指している。園児は抽せんで入園しているため、配慮の必要な子供たちも少なくないが、大学教員や地域のセンターと連携し、専門的な見地から個別の関わりも丁寧に行うことで、一人一人が輝く保育の実践につないでいる。



【広い園庭で遊ぶ子供たち】

○ 園の教育課程の特色

2004年に「自尊心を育むための保育を考える」というテーマで研究に取り組んだ。「自尊心」を「かけがえのない自分を大切に思う心。自分の弱いところやいやなところも含めて、自分をまるごと肯定する気持ちであり、自分の存在そのものを価値あるものと認める心。そしてその心は人のことも同じように大切に思う気持ちにつながる」と定義し、研究から導き出された「自尊心を育むための保育の在り方・保育者の在り方」を園の教育目標と結び付けた「自尊心が育まれる教育課程」を編成した。教育目標の「生き生きとあそぶ子ども」「精いっぱいがんばる子ども」「友だちといっしょにのびる子ども」それぞれに、自尊心を育む3つの要素「安定」「充実」「共存」を当てはめた。各期のねらいや指導計画における環境構成や援助のポイントも、この3つの視点で考えている。

○ 新幼稚園教育要領の実施に向けた改善点【平成29年度の取組】

- ・教育課程の見直しと改善 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以降「10の姿」）の視点から各期の子供の姿を見直し、修正を加えた。それを基に指導計画の「自ら選んで遊ぶ」「みんなでする活動」についても、改訂作業を進めた。
- ・保育の振り返りと園内研修の改善 保育のエピソード記録を「10の姿」の視点からも読み取り記入できるような形式に改善した。それを基にカンファレンスを行い、「10の姿」の視点で子供の姿を見とる力量が高まるようにした。

2 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。

- ・「10の姿」の視点から、各学年のI期からV期までに見られた姿について見直し、「ねらい」「内容」について、加筆修正を行っている。偏りを見直し、足りないところを補ったり、ふさわしい時期に変更したりしている。また、今年度は全学年の保育観察及びカンファレンスを行い、その時に共有した姿をもとに見直している。
- ・終礼時のその日の保育の振り返りや職員会議で保育や子供の様子を話し合う時には、「10の姿」を念頭に置きながら、今後の方向を含めて報告し合い、教育課程の改善に生かしている。
- ・保育カンファレンスにおいても、事例の中の子供の姿を「10の姿」の視点から分析し、教育課程の見直しに生かしている。
- ・学期に1度、園の教育目標及び方針、幼児教育の最新情報、子供の学びや育ちについて、園長や副園長から保護者に説明している。参観や行事の前にはその週のねらいや行事のねらいなども伝え、これらに対する保護者からの反応や声を教育課程の改善に生かしている。
- ・地域には、年2回の学校評議員会などで説明や意見交換を行い、教育課程の改善に生かしている。

②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

- ・2016年度より本園の「自尊心を育むための教育課程」を実践するために、指導計画にも自尊心を育む3つの視点を書き込んできた。日々の自ら選んで遊ぶ活動、みんなでする活動など、指導計画に当たる部分を整理しまとめてきており、今年度はその最終年である。これまで討議してきた内容を各年齢の今年度の担当が日々の実践と照らし合わせ、原案を作成している。その原案を期（1年V期）の前後に研究会議で提示し、皆で検討して、指導計画を仕上げている。
- ・保育カンファレンスでは、実践事例の子供の姿やねらいを丁寧に振り返り、その期の教育課程にも反映させている。
- ・学期に数回程度、保護者から、任意、無記名で子供の育ちに関する内容を記入してもらっている。それをもとに、保育をふりかえり、評価につなげている。

③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保すると共にその改善を図っていくこと。

- ・1学期は実習を終えた4回生に保育サポーターとして保育に関わり、安全を守りながら、子供たちが主体的に活動することを支えてもらっている。卒業論文研究のため、保育観察をしている学生にも、卒論に関する観察以外の時間帯は保育補助として保育に関わってもらい、保育記録や学生の所見を保育に生かしている。
- ・子供たちに必要な経験を大学教員の専門知識を生かして関わってもらったり、大学生に教材開発を委託し、子供たちに伝えてもらったりしている。

(具体的な取組内容)

- 教育課程・指導計画の改善【各期に2回】・・・①②
教育課程の「子供の姿」「内容」について「10の姿」の視点で見直しを行った。IV期については各学年の保育を観察した後に見直した。期ごとに指導計画の内容と今年度の保育実践をもとに精選し、教育課程改訂に向けて写真を入れて整えていった。
- 保育の振り返り【毎日】・・・①②
毎日「終礼」を行い、担任がその日の保育について話す。「好きな遊び」「みんなでする活動」などを振り返り、次の日の活動予定、非常勤教師の配置などの確認を行う。子供の見とりなどを互いに学び、日々の保育実践に生かしている。
- 保育の展望【月2回】・・・①②
職員会議で、各担任がクラスの子供の実態、ねらいと保育の方向性について報告し、意見やアドバイスを交換し、実践に生かしている。
- 「保育わくワークシート」(保育実践記録)への記入【随時】【別添参照】・・・①②
「保育者が楽しいと感じた場面」を思い起こし、そこに至るまでの経緯を「子どもの姿」「保育者の援助」「保育者の思い」で書き表す。余力があれば「保育者の思いや援助」の根拠となる「子どもの姿」や「ねらい」についても振り返り記入する。「10の姿」の視点で事例の中から子供の経験や育ちを分析し、記録している。
- 「保育ほっとホットトーク」(保育カンファレンス)の実施【月1, 2回】【別添参照】・・・①②
本園教諭、時には幼児教育専門の大学教員と共に「保育わくワークシート」をもとに「保育ほっとホットトーク」という名の保育カンファレンスを行う。実践者に質問などをしながら、実践者の思考を明らかにしていき、今後の実践に生かすための環境構成や援助のポイントや年齢や時期ならではの子供の姿などを導き出している。「10の姿」の視点でも分析している。
- 園内研修【随時】・・・①②
1日で1学年の好きな遊びの場면을教員が交代しながら観察する。大学教員にも観察してもらう。観察者が「楽しいと感じた場面」を付箋に記入し、保育終了後に「保育わくワークシート」と付箋をもとに「保育ほっとホットトーク」(保育カンファレンス)を行う。
- 行事内容の見直し【行事前・月2回程度】・・・①②
今年度新たに2人の教員が着任したため、行事ごとにこれまでのねらいや具体的な内容を振り返り、丁寧に伝える機会をもった。その際、着任者からの新たな視点も取り入れ、行事内容を改善した。また、振り返りも丁寧にを行うことで、次年度以降の行事の在り方についても検討している。
- 保護者との共有【学期に1回】・・・①②
1学期の参観の際に園長・副園長が「本園の教育について」「非認知能力」「好きな遊びの中での子供の学び」「その期のねらい、今週のねらい」「保育者が日々行っている環境構成と援助」について保護者に伝えた。1学期の終わりには1学期の子供の育ちについて写真や動画を用いて解説した。運動会前には、各学年のねらいと今年度より取り入れた競技についての意図や子供の育ちについて説明した。特に運動会後は保護者からのアンケートをもとに全教員で実践を振り返り、子供たちの育ちについて保護者に伝えた。
クラス懇談会では、保育内容と共に子供の育ちや学びを写真を用いて伝え、保護者には子供の育ちを語ってもらっている。保育を振り返るよい機会となり、実践の改善にもつながっている。
- 大学との連携【随時】・・・③
1学期は、子供たちが身近な生き物や植物に関心が高まってきたころに「生き物博士」として、理科(生物)専門の理事(渉外・連携担当)に園に来てもらい、子供の日ごろの疑問に答えてもらったり、園内の「子どもの森」でフィールドワークを行ったりした。2学期は「速く走れるようになりたい」という子供たちのねがいをうけ、「走り方先生」として体育専門の大学教員を招いた。声楽、ピアノが専門の大学教員には「秋に聞かせたい曲、歌いたい曲」を子供たち、及び保護者にも聞かせていただいた。その後、子供たちと共に歌ったり、絵に描いたりもした。
- 学生の保育サポーター【1学期毎日】・・・③
1学期は1日1, 2人の保育サポーターとして登録した4回生に保育補助をしてもらい、3, 4歳のクラスの子供たちが園に慣れるまでの生活を支えてもらった。
2学期の行事の際にも保育サポーターに保育補助を要請した。特別な配慮が必要な中国人の園児に対して中国からの留学生に週1回程度関わってもらっている。

3 来年度に向けての改善点・課題

- ◇互いの保育を参観した後の、教育課程の見直しには効果があった。次年度は期に一度は互いの保育を見る機会を定着させたい。
- ◇毎日の終礼では保育の振り返りのポイントを定め、端的に語り、短い時間で効果を上げられるようにする。金曜日には次週の保育の展望を語るようにし、余裕と見通しをもって、新しい週を迎え、保育が展開できるようにする。終礼での語りを整理し記録として残るものを考案し、日々の反省が教育課程に生かされるようにしていきたい。

鳥取大学附属幼稚園

1 園の概要（平成30年度）〔園・教育課程の特色〕

（園の概要）

本園は、幼児の自主性・自発性を尊重する“自ら選んだ遊び”を中心とした保育に取り組んでいる。園庭や松林、大学施設である農場、青島や砂丘など様々なフィールドで自然体験活動を行うなど、大学の人や施設を活用した保育を実践している。県教育委員会と連携し、県主催の研修の場として園を活用することで、教職員の指導力向上を図っている。



【芝生の園庭は迷路だよ】

○ 園の教育課程の特色

幼児期にどんな力を育てたいのか検討を重ね、幼小接続期までの各時期で「育てたい力の系統表」を作成し、学びのつながりを意識している。また、人やものとのかかわりを通して、様々な感情体験をすること、「心が動く」体験を通して遊びは充実していくと考え、子供の内面に目を向けた「（その時期に）大切にしたい心の動き」を加え、3年間の学びのつながりを意識した教育課程を編成している。

○ 新幼稚園教育要領の実施に向けた改善点【平成29年度の取組】

年間指導計画を新しい幼稚園教育要領の改訂のポイントを踏まえて見直しを行った。また、5歳児1月から3月までのⅡ期は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目に留意して編成し直した。見直しでは、指導計画の内容全てについて、どの項目に属しているのか書き記し、全ての項目が含まれているかを確認した。そして、5領域のねらい及び内容を踏まえた指導計画に沿って教育を積み重ねることで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながることを共通理解した。

2 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

(1) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。

- ドキュメンテーションを活用した実践記録を基に日々の保育を振り返り、教育課程の内容を再検討する。
- 園内研修で、担任が作成したドキュメンテーションについてカンファレンスを行い、多面的・客観的な幼児理解となるようにしている。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて、改善した教育課程を実践・検証する。
- 園便り（年4回）、学級便り（毎月）、学年懇話会等で、園の教育目標・取組を保護者に説明し理解を得るとともに、学校評議員会（6月、2月）で意見交換を行い、教育課程の改善に生かす。

(2) 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

- 作成したドキュメンテーションを基に、発達区分に沿って整理した幼児の姿と教師の援助や環境の構成について検討し、遊びの充実を図るための保育を改善し、教育課程に反映する。
- 小学校との連携では、1年生と年長児の交流の他、互いの保育や授業を参観したり、ドキュメンテーションを活用して幼稚園での学びを伝えたりするとともに、接続を意識した生活科の学習展開について1年担任と年長担任が話し合う機会をもつ。
- 1月に保護者アンケートを実施し、目指す子供像の達成状況についての評価を次年度の教育課程を編成する際の参考とする。
- 保護者対象の保育参加、未就園児親子対象の「おやこぴよんぴよんサークル」を実施、実施後のアンケートでいただいた意見を、教育課程を編成する際の参考とする。

(3) 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

- 小学校教師、次学年の担任、保護者等と「ドキュメンテーション」という形式を活用し、幼児の学びを共有する。また、地域の保幼小連絡会では、引き継ぎを行うだけでなく、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有する機会を設けている。
- 幼児の主体性、いわゆる“自ら選んだ活動”を尊重するため、クラスの枠を超えて園内のあちこちで遊びが展開されている。また、日常的に異年齢でも関わっているため、各クラスに副担任を置くとともに、全クラスの保育に関わる級外（教諭）、養護担当の他、全教職員で保育に当たり安全面の確保も行っている。

- ・ 大学の農場で農学部教員の指導を受けながらサツマイモの苗植えや収穫をしたり、大学教員と保育カンファレンスをもって助言を受けたりするなど、大学附属ならではの連携を進めている。
- ・ 県教育委員会の研修を積極的に受け入れ、園の教育実践や研究について発信するとともに、保育参加型の研修を通して地域の幼稚園・保育園等関係者に学びの機会を設けている。また、その際、参加者と意見交換をするなどして、本園の教育課程改善の参考にしていく。
- ・ 平成24年度から実施している預かり保育と通常の保育とのつながりを大切にし、預かり保育担当と保育や幼児・保護者の様子を共有し、遊びの保障と子育ての支援に努めている。

(具体的な取組内容)

○加筆修正した教育課程を基にした、ドキュメンテーションの作成と評価【通年】・・・(1)(2)

1か月に2つの遊びに焦点を当て、日々の記録や実践を写真などに残し可視化した「ドキュメンテーション」を作成し、毎月保育カンファレンスを行った。保育カンファレンスでは、「事実」と「解釈」を分けて整理し、教師の思い込みや先入観にとらわれず、遊びの内容や幼児の学びを表現するように話し合った。また、2か月分のドキュメンテーションの中から1つを選び、発達区分に沿って整理した幼児の姿と教師の援助や環境の構成について検討し、遊びの充実を図るために保育改善と指導計画及び教育課程に反映させた。

○教育課程・指導計画の改善【7月～2月】・・・(1)(2)

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識しながら期の指導計画、月の指導計画の見直しを行った。また、昨年度幼稚園教育要領の改訂のポイントを踏まえて見直しを行い、年間指導計画との整合性を確認した。その結果、社会生活との関わりで、『地域の公共施設を訪れたり、地域で働く人々に感謝の気持ちをもったりする』『伝統行事に興味をもち進んで参加する』といった内容を加筆修正した。これらの内容は実際に活動していたことであるが、改めて内容に明記することで意識付けることができた。

毎月ドキュメンテーションを2つずつ作成し、2か月に1つ評価を行った。また、保育カンファレンスを行い、援助や環境の構成が適切であったか話し合っ指導計画に反映した。

○ドキュメンテーションを作成し、保護者と共有する【10～3月】・・・(1)(3)

保護者向けに様式を少し変更したドキュメンテーションを作成し、園児玄関に『あそびのひろば』として掲示した。保護者は送迎の際に玄関先に立ち寄り、子供たちの遊びが日々発展している様子を知り、より子供の成長を実感することができるようになった。教師も、具体的な子供の姿が抽象的な言葉でばやけないように、遊びの中の学びを読み取ろうという意識が生まれた。

○小学校との連携【年間】・・・(2)(3)

小学校へ入学する年長児の引継ぎをする際に、昨年度作成したドキュメンテーションを活用した。また、互いの保育や授業を見合い、子供の活動の様子を知り、幼児教育と小学校教育の接続を意識した学習の展開について考えた。7月には小学校生活科の「夏と遊ぼう」の単元の授業を参観し、1年生の遊びの内容や学んだことを確認した。秋の遊びについても同様の取組を行った。小学校との学びの内容の違いと関連、つながりについても再確認し、日々の保育に生かした。

地域の保幼小連絡会では、年度当初と年度末の2回、主に情報交換や卒園児の引き継ぎを行っていたが、11月にも会をもち、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について伝えたり、小学校1年生の学習や入学までに身に付けてほしい姿について話を聞いたりする機会を設けた。

○関係機関との連携【年間】【別添参照】・・・(3)

県教育委員会と福祉保健部が平成24年度から実施する「幼保一体化に向けた幼児教育・保育相互理解研修事業」を毎年受け入れ(今年度2回)、設置者の異なる施設で行う1日以上保育体験研修を通して、本園の保育の特色や研究実践を参加者に紹介するとともに、本園の教員の学びの機会とした。

3 来年度に向けての改善点・課題

- ◇月1回の保護者向けのドキュメンテーションの掲示回数を増やすことが課題であるが、教員の負担も考えながらドキュメンテーション作成に要する時間を確保していきたい。
- ◇幼児自身が遊びの中で気付いたこと、感じたことなども加えたドキュメンテーションを教師と幼児が一緒に作成することで幼児の遊びの振り返りや共有ができるようになると思われる。
- ◇改善した教育課程に沿った実践を基に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を明確にするとともに、小学校との接続を図るカリキュラムを作成する。

熊本大学教育学部附属幼稚園

1 園の概要（平成30年度）〔園・教育課程の特色〕

本園は、3歳児1学級、4・5歳児各2学級の全園児129名の幼稚園である。

熊本市役所や賑やかな商業施設が徒歩圏内という熊本市の中心部に位置しているものの、広い園庭、虫とりのできる裏庭、その周りを囲むように四季折々の花や果実を付ける数々の樹木など自然環境に恵まれ、その中で子供たちは思い思いの遊びに取り組んでいる。園庭の中央には樹齢130年を超える楠木がそびえ立ち、その横の「キリンさんすべり台」も、本園のシンボルとして共に親しまれている。



【キリンさんすべり台と楠木の周りで遊ぶ子供たち】

○ 園の教育課程の特色

本園の教育目標「未来を切り拓く幼児に、生きる（ぬく）力の基礎を培い、生涯に渉る人格形成の基礎を培う」に向けて、本園の全職員が、子供・保護者と「ともに学び、ともに育ち、ともに伸びるチーム附幼」という姿勢で教育活動に臨んでいる。

本園は、平成27年度より3年間「学びをつなぐ教育課程の創造」～遊び込む子供から自ら学ぶ子供へ～という研究テーマのもと、子供の遊ぶ姿から発達を捉え、発達の道筋を明確にし、より遊び込むことを大切にした教育課程を編成した。また小学校教育への円滑な接続を意識したアプローチカリキュラムを作成することができた。それに伴い、子供たちの遊びに向かう意欲や発想の柔軟さなどが育ち、遊び込む姿がより多く見られるようになった。

○ 新幼稚園教育要領の実施に向けた改善点【平成29年度の取組】

本園は、平成29年より2年間、国立教育政策研究所の研究指定事業において研究委嘱を受け、研究テーマを「学びをつなぐ教育課程」～幼児期にふさわしい評価の在り方を探る～として研究を進めてきた。子供がさらに遊び込むことを中心に据えてカリキュラム・マネジメントの充実に努め、子供の遊ぶ姿から発達を読み取って（C）教師の指導を評価し（C）、改善する（A）という、評価（C）を起点とするPDCAサイクルを考えた。

また、実践を重ねる中で、幼児理解を深めると共に、教師の指導の工夫改善に生かすという目的で評価指標（試案）を作成した。

2 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。

- ・昨年度、評価指標は、入園から終了までの子供の発達の道筋がベースになると考えた。そこで、遊びの姿（発達の姿）をより多面的に捉えるために、本園の具体的な幼児の姿を「10の姿」を視点として整理し、10の項目ごとに評価指標（試案）を作成した。本年度は、評価指標の妥当性や信頼性を高めるために、再度一つ一つの文言や枠組みを見直し、評価指標の改良を重ねている。
- ・家庭に向けては、新入園児保護者会や学期末毎の保護者会、園便り等で、園の教育目標や方針、及び幼児教育の重要性を園長や副園長、研究主任、各担任から保護者に説明している。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても実際の遊びの姿を通して具体的に分かりやすく伝えている。地域に向けては、年2回の学校評議委員会等で説明や意見交換を行っている。これらのことを通して、子供たちに求められる資質・能力について社会と共有し「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて取り組んでいる。

②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

- ・年度当初と各学期末に、評価指標を使って学級全員の育ちの現状を捉え、次学期の指導の方向性を見直す際に活用する。
- ・園内保育研究会や次週の打ち合わせ、学年ミーティングなどにおいて、子供の学びや教師の援助について検討したことを明日からの保育に生かしている。特に園内保育研究やエピソード研究の際は、評価指標を作成した経験や評価指標そのものを活用することで、子供の学びや育ちの姿をより広く多面的に評価して次の教育活動への改善を図り、計画・立案につなげている。

- ・年長児が附属小学校を訪れ、1年生と交流活動を計画的に行っている。交流後には、小学校と幼稚園の担任が話し合い、子供の学びや次の活動に向けての改善点、具体的な計画案を見出している。

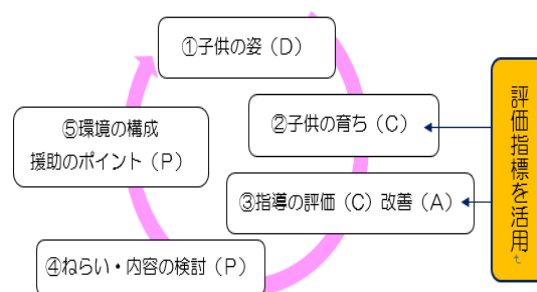
③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

- ・本園は、校区が広い地域との密接なつながりが少なく、地域の自治会や敬老会、公立小学校等との交流はできていない。しかし、近隣で行われる人権フェスタの参加や熊本城、近くの公園への園外保育など地理的な利点を活用した教育活動を実施している。
- ・各家庭に対しては、写真パネルや園便り等で子供たちの様子を伝え、連携を図っている。また、夏祭りや運動会、餅つきなどの行事やトランポリン遊びの活動など、家庭の協力を得て、一緒に行事をつくりあげている。
- ・教育学部との協働体制を整えており、3人の教授・准教授に研究推進委員を委嘱している。また、運動会の親子ダンスや、夏祭りなどのアトラクションで大学教授や大学の関係者の指導を得て、充実した活動を実施することができている。

(具体的な取組内容)

○週の指導計画作成【毎週】・・・①, ②, ③

週の指導計画案を作成する際、①「子供の姿」から②「子供の育ち」を捉え、その姿から③指導の評価・改善を考え、④翌週のねらいや内容を見直し、⑤環境構成や具体的な援助を考えている。そして、再び①の子供の姿を捉えることを繰り返し、次週の指導計画を立てている。②で「子供（クラスや学年全体）の育ち」を分析する際、さらに③, ④, ⑤で改善した計画を立案する際に評価指標を活用し、子供のよさや可能性を把握して指導の改善に生かしている。



【評価指標を活用した PDCA サイクル】

○園内保育研究会【年間6回】【別添参照】・・・①, ②

各クラス2名の抽出児に対して、全職員が子供の姿や評価指標を使って捉えた発達についての読み取りを報告し合うことで、多面的な幼児理解と指導の工夫改善について検討している。担任はそのことを受けて指導計画を立案し、それに基づいた実践を重ねて、一人一人の発達に必要な体験を得られるような指導内容・指導方法の在り方について改善を繰り返している。

○保護者との連携【年間】・・・①, ②, ③

毎学期末に出している保護者への通信に記入する際に、子供の具体的な姿だけでなく、どのようところが育ってきているのかを評価指標の文言を参考に記入している。また、個人面談を行う際にも、評価指標を活用して、遊びを通してどんなことを学んでいるのか分かりやすく説明している。本園の教育活動と、子供の学びや育ちに対する保護者の理解を得ることで、「社会に開かれた教育課程」の実現につなげている。

○小学校との連携・接続【年間】・・・①, ②, ③

年に3回の子供同士の交流や幼小連絡会を行った。

3 来年度に向けての改善点・課題

- ◇評価指標を活用することにより、PDCA サイクルの中で子供の発達を多面的に捉え、実態に応じて指導の工夫や改善を重ねることができた。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「社会生活との関わり」で、子供の育ちを促すような園外活動や地域の人との交流を実施できたことも成果である。次年度は週や月の指導計画にとどまらず、教育課程の編成にも目を向けることが課題である。

【カリキュラム・マネジメントの取組状況報告における考察】

○ 山形大学附属幼稚園（22頁～23頁）

具体的な取組としては、「情報共有の方法の工夫」「子供自身による振り返り」「JRC活動の取組」などがみられる。

その中でも、「情報共有の方法の工夫」における附属学校園全体のコーディネータとの連携や「UTC」（カフェ形式）による話し合う機会の設定、ホワイトボードを使ったツールの活用、幼児の育ちを共有する保護者会など、全員参加でのカリキュラム・マネジメントとしての人的または物的な体制を工夫・整備している。

さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や小学校の学びの接続を視点とした「遊びの保育デザイン」を作成し、質の高い保育へ向けた教育課程の編成・実施・評価・改善の取組は、カリキュラム・マネジメントを推進する上で、参考になる。

また、来年度に向けての改善点・課題に挙げられている「附属学校全体の『目指す子供』を受け、特に大切にしたい育ちについての検討」についても、組織的かつ計画的に各校・園の教育活動の質の向上を図る点で他園の参考になると考えられる。

○ 東京学芸大学附属幼稚園（小金井園舎）（24頁～25頁）

具体的な取組としては、「園内保育検討会」「保育記録」「掲示用ドキュメンテーション・ホームページの作成」「校内委員会の開催」「小学校との連携」「学生との連携」などがみられる。

その中でも、「園内保育検討会」は、教師が他の学級の保育参観をする際に、観察者としての記録及び考察であるA4で1枚程度の「Dシート」を作成する。この「Dシート」は検討会の際、全員に配布され、その日の保育について観察者が事柄を精選して伝えることで、効率的かつ深い保育内容の検討をすることを可能にしている。この実践を繰り返し行うことによって教師の資質・能力の向上と保育の改善につながっていくと考えられる。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえながらこのような検討会を重ねていくことで、どこに重点を置いて今後教育課程の改善を行っていくべきかという「改善のポイント」が明らかにされ、自園の実情に即した独自の教育課程の編成に有効な手段である。このような取組は、カリキュラム・マネジメントを推進する上で、参考になる。

また、来年度へ向けての改善点・課題に挙げられている「保護者や外部関係者などに説明可能な明文化の工夫」についても、今後は他園においても共通の改善点であると考えられる。

○ 上越教育大学附属幼稚園（26頁～27頁）

具体的な取組としては、「保育の振り返り」「小学校との連携」「週案の蓄積・改善、指導計画の修正」などがみられる。

その中でも、「保育の振り返り」は、日々の保育の振り返りを毎日実施したり、幼小連携や幼小接続の研究成果を生かした教育課程や年間指導計画の見直しをしたりしている。その際には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が反映されているかどうか、幼児の学びの姿を通して検証している。

さらに、「小学校との連携」においては、園独自の接続プログラムを作成して実践しており、カリキュラム・マネジメントを推進する上で、参考になる。

また、本園では預かり保育を行っているが、正規保育時間とのつながりを意識した預かり保育の指導計画の整備が課題としてあげられており、今後の成果が期待される。

○ 愛知教育大学附属幼稚園（28頁～29頁）

具体的な取組としては、「からだ遊びシートの作成」「大学教員との連携」などがみられる。

本園においては、「体と心を十分に動かして遊ぶ幼児の育成」を研究テーマに掲げ、様々な取組を行っているが、その中でも、「からだ遊びシートの作成」は、幼児が体と心を動かして遊んでいると思われる場面の事例を集め、体と心の育ちや発達の過程について明らかにし、どのような教師の援助や環境の工夫が必要であるか考えている。さらに、「大学教員との連携」では、休日に実施された「親子でからだ遊び」に専門の大学教員を講師として招き、小学校体育館を使ってのマ

ット遊びや親子の触れ合い遊びを実施している。幼稚園の運動会の種目を考える際にも、大学教員からのアドバイスをもらっている。

また、来年度に向けての改善点・課題にあげられている、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた教育課程の見直しでは、教師自身の感覚的な捉えに頼らず、育ちのプロセスの分析を行おうとしている点が他園の参考になる。

○ 奈良教育大学附属幼稚園(30頁～31頁)

具体的な取組としては、「各期に2回の教育課程・指導計画の改善」「保育わくワークシートへの記入」「保育ほっとホットトークの実施」などがみられる。

その中でも「保育わくワークシートへの記入」は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で、事例の中から「保育者が楽しいと感じた場面」について幼児の経験や育ちを分析し記録している。また、「保育ほっとホットトークの実施」では、園の教諭だけでなく幼児教育専門の大学教員と共に前述の「保育わくワークシート」をもとに保育カンファレンスを行っている。事例の中でも、「保育者が楽しいと感じた場面」を出発点として分析的に記録し、保育カンファレンスを通して環境の構成や援助のポイントなどを導き出し、指導の工夫改善につなげており、円滑で効果的なカリキュラム・マネジメントの推進がなされている。

また、来年度に向けての改善点・課題に挙げられている「保育参観後の教育課程の見直し」や「短時間で効果を上げる終礼の在り方」についても、他園の参考になると考えられる。

○ 鳥取大学附属幼稚園(32頁～33頁)

具体的な取組としては、「関係機関との連携」「ドキュメンテーションの作成と評価」「ドキュメンテーションを活用し、接続を意識した学びの展開」などがみられる。

その中でも、「関係機関との連携」は、園を研修の場として活用し、教職員の指導力向上を図っている。教育委員会と福祉保健部開催の研修事業を年2回受け入れ、設置者の異なる施設で行う保育体験研修を行うことで、参加者及び園職員双方の学びの機会となり、保育の質向上につながる。さらに、月2つずつ作成したドキュメンテーションを活用し、保育を客観的に捉えて指導計画の見直しに生かしたり、小学校教員と接続期の姿を共有したり指導方法の相違を相互理解することでよりよい教育課程の改善が図られるなど、カリキュラム・マネジメントを推進する上で、参考になる。

また、来年度に向けての改善点・課題に挙げられている「ドキュメンテーションを教師と幼児が一緒に作成すること」についても、効果的効率的な保育の評価につながる点から、他園の参考になると考えられる。

○ 熊本大学教育学部附属幼稚園(34頁～35頁)

具体的な取組としての大きな特徴は「評価指標」の作成にある。本園の具体的な幼児の姿について「10の姿」を視点として整理し、10の項目で「評価指標」を作成し、日々の保育だけでなく「保護者との連携」「園内保育研究会」など様々な場面に活用しようとしている。

その中でも「保護者との連携」では、保護者への通信文の記述において、幼児の育ちを「評価指標」の文言を参考にしながら記述している。これによって、視点としての「10の姿」の偏りや、記述が主観的になり過ぎることを防ぐとともに、表現力の差による影響を最小限に抑えることができると思われる。また、「園内保育研究会」では、全員で抽出した幼児の発達の様子を「評価指標」を使って見取ることで、評価者間のズレを切り口にして考察・検討することが可能となる。

「10の姿」ごとの「評価指標」の設定は賛否両論あるところであるが、「診断的評価」に使用しないことを厳守するならば、幼児の育ちを見取る手立てとして共通の視点を与え、評価にかかる議論を活性化することにつながるものであり、カリキュラム・マネジメントを推進する上で、極めて有効であると思われる。

また、「評価指標」を教育課程の編成にどう生かし位置付けていくかが来年度に向けての課題に挙げられており、今後の研究の成果が期待される。

(6) 特徴的な取組のグルーピングと整理、検討

「**2**カリキュラム・マネジメントの特徴的な取組」では、各園のカリキュラム・マネジメントにおける特徴的な取組を一つあげてもらい、詳細に記載することを依頼した。49の取組事例が集まり、本園で、似た取組に分けて分類した。また、40頁より全事例を掲載することにより、各園で実施するカリキュラム・マネジメントの参考になるようにしている。

園内での取組

○ 教育課程

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	写真を用いた幼児の育ちの理解と共有	40
2	上越教育大学附属幼稚園	教育課程及び年間指導計画の改善・修正	41
3	三重大学教育学部附属幼稚園	事例検討による教育課程の見直し	42
4	奈良女子大学附属幼稚園	育ちの履歴から編成するカリキュラム	43

○ 事例検討

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	宮城教育大学附属幼稚園	保育カンファレンス	44
2	福島大学附属幼稚園	共有フォルダの活用と園内研修	45
3	東京学芸大学附属幼稚園(小金井園舎)	保育検討会(保育者の資質向上)における記録の活用	46
4	静岡大学教育学部附属幼稚園	実践の語り合い(ラウンドテーブル形式の研修)	47
5	兵庫教育大学附属幼稚園	保育の質を高めるための記録に基づく話し合い	48
6	奈良教育大学附属幼稚園	「わくワークシート」(保育記録)と「ほっとホットワーク」(保育カンファレンス)	49
7	島根大学教育学部附属幼稚園	保育のメタ認知化	50
8	岡山大学教育学部附属幼稚園	幼児理解を深める取組～「こどもカフェ」～	51
9	広島大学附属幼稚園	園内研修の取組(保育カンファレンスを通して)	52
10	山口大学教育学部附属幼稚園	事例検討会(各年齢の期ごとに)	53
11	鳴門教育大学附属幼稚園	保育カンファレンス「幼児期の終わりまでにいかに育つか」	54
12	熊本大学教育学部附属幼稚園	園内保育研究会	55

○ 園環境の改善

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	茨城大学教育学部附属幼稚園	園内環境の整備・改善(多くの人の目で)	56
2	群馬大学教育学部附属幼稚園	園内研修における園庭での遊びの分析と園庭づくり	57
3	千葉大学教育学部附属幼稚園	園庭の遊具の見直しプロジェクト	58
4	山梨大学教育学部附属幼稚園	環境の改善(ヒヤリハット報告書から)	59

○ 保育の改善

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	岩手大学教育学部附属幼稚園	豊かな遊びを育む教材の工夫	60
2	山形大学附属幼稚園	自作教材を活用した体験型保健指導	61
3	宇都宮大学教育学部附属幼稚園	砂粘土の事例(アクティブラーニングの視点から教材研究)	62
4	滋賀大学教育学部附属幼稚園	食育の取り組み	63
5	京都教育大学附属幼稚園	保育形態の工夫	64
6	福岡教育大学附属幼稚園	プロジェクト型保育(年長～虫、種)(年中～土)	65

外部との関わり

○ 附属間・大学との連携（職員）

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	埼玉大学教育学部附属幼稚園	小学校の教員との研修	66
2	新潟大学教育学部附属幼稚園	幼小中全体研修・園内研修	67
3	信州大学教育学部附属幼稚園	幼・小・中一貫した12年間の教育課程の作成	68
4	神戸大学附属幼稚園	小学校との連携研究	69
5	大分大学教育学部附属幼稚園	チーム研究の成果をカリキュラム編成に生かす	70

○ 附属間・大学との連携（交流）

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	北海道教育大学附属旭川幼稚園	大学，附属小・中学校との連携	71
2	北海道教育大学附属函館幼稚園	4校園交流事業	72
3	富山大学人間発達科学部附属幼稚園	幼小連携の強化	73
4	愛知教育大学附属幼稚園	専門機関との連携（大学教員）	74
5	広島大学附属三原幼稚園	幼小接続・異校種交流の取組	75
6	高知大学教育学部附属幼稚園	餅つき	76
7	長崎大学教育学部附属幼稚園	幼小連携・幼中連携	77

○ 現職教員研修

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	弘前大学教育学部附属幼稚園	小学校教育研究会での保育提案	78
2	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	教員研修	79
3	大阪教育大学附属幼稚園	教員研修会	80
4	鳥取大学附属幼稚園	県教育委員会との連携・教職員の研修	81
5	香川大学教育学部附属幼稚園	保育について語ろうデー	82

保護者との連携

○ 子育ての支援

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	お茶の水女子大学附属幼稚園	保護者懇談会『ホットモタイム』の新規実施	83

○ 情報共有（個人）

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	佐賀大学教育学部附属幼稚園	ポートフォリオ（個人用）	84

○ 情報発信

番号	園名	特徴的な取組	掲載頁
1	福井大学教育学部附属幼稚園	SNSを活用した幼児教育の発信	85
2	愛媛大学教育学部附属幼稚園	ホームページにおける幼稚園の様子発信	86
3	宮崎大学教育学部附属幼稚園	掲示資料	87
4	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	掲示用ドキュメンテーション	88

○ 教育課程 1

実施時期・回数	年1回	主な対象	教師
---------	-----	------	----

写真を用いた幼児の育ちの理解と共有

【実施の方法・実施状況】

- ① エピソードメモやエピソード記録、週日案などから、具体的な幼児の姿を捉え、写真を用いながら、幼児たちが経験していることや育ちについて、年齢、期ごとにA4用紙1枚にまとめている。
- ② 本園の発達の姿に用いている4つの観点（生活への構え、興味・関心、友達とのかかわり、保育者とのかかわり）からそれぞれの写真にコメントをすることを通して、「発達の姿」と照らし合わせ、幼児の経験していることや育ち、「発達の姿」について職員間で検討、見直しを図っている。
- ③ 検討、見直しをした「発達の姿」については、4つの観点ごとに年齢進行で一覧にし、各年齢、各期それぞれで一貫性や整合性を図り、教育課程の編成を図っている。



年齢	生活への構え	興味・関心	友達とのかかわり	保育者とのかかわり
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

【実施後の効果】

- 「発達の姿」を写真を用いて具体的な幼児の遊びの姿から検討しているため、教師の中で実感ももちやすく、また「発達の姿」を共有しやすいため、「発達の姿」や教育課程を検討する際に役立っている。
- 複数の職員で検討することで、自分が担任している学級以外の発達の姿についても理解を深めることができている。

【今後の改善点】

- 教育課程の編成のために始めた取り組みではあるが、写真を用いたことで、教師が具体的に幼児の姿を捉えることができた。そのため、取り組み時期や回数等を見直すことで、教育課程の編成だけではなく、指導計画の改善や保育の質の向上につながるものと考えている。
- 小学校以降の学びと連続性ももてるような教育課程の編成に向けて、「幼児期の終わりまでにそだってほしい姿」や幼稚園教育要領のねらい及び内容と「発達の姿」の4つの観点等との関連について見直し・理解を深めていく。

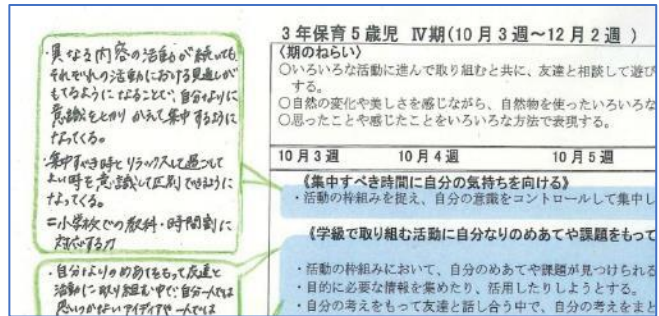
○ 教育課程 4

実施時期・回数	各期終了後	主な対象	教師
---------	-------	------	----

育ちの履歴から編成するカリキュラム

【実施の方法・実施状況】

①教育課程で設定している「期」の終了後、実際の保育活動の奥にある漠然とした「育てたい資質・能力」を言語化できるよう、各担任が保育記録に記した保育内容、活動及び子供の育ちの中から、「育てたい資質・能力」別に保育活動を分類し、マッピングする。



- ②昨年度までの「育ちの履歴」や幼小一貫した評価の観点、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などを参考にしながら、マッピングした中から「育てたい資質・能力」の要素を言語化していく。
- ③「育てたい資質・能力」を言語化した後、一般的な言葉では言い表せない内容やエピソードをふきだしにして書き加える。また、具体的な姿を表している写真を選び、別紙にマッピングされた「資質・能力」と同位置に配置し、実際の子供の姿を視覚的にわかりやすく表現する。
- ④学年ごとに検討した後、会議にて全学年の「育ちの履歴」を持ち寄り、
- ・「活動内容(コンテンツ)」ではなく「育てたい資質・能力(コンピテンシー)」で表現されているか
 - ・表現している言葉で表したい資質・能力が伝わるようになってきているか
 - ・キーワードとなる言葉が抽出されているか
 - ・学年ごとで育ちが積みあがっているか
- などについて検討し、修正し、次年度の指導計画となるよう改善を図る。

【実施後の効果】

- 「なぜこの活動を実施するのか」「なぜこの環境であるのか」という、幼児教育実践における根本的な問いを常にもち、子供に向き合い、保護者に説明し、PDCAサイクルを意識するようになった。
- 多様な子供たちの育ちを支える際、集団や活動の枠に子供をはめるのではなく、子供のみと育てたい資質・能力とを勘案して活動を組んでいく必要があるため、多様な視点から活動を精選していきえるようになった。また、保育内容を検討する際、ただ昨年度の活動を引き継ぐのではなく、現状の子供の育ちと育てたい資質・能力から活動を精選することで、教師のねらいがより明確になった。
- 会議において他学年とも「育てたい資質・能力」について話し合う中で、自分が自覚していなかった保育におけるねらいを自覚できるようになり、言語化できるようになった。
- 幼小一貫した「育てたい資質・能力」をもつことにより、教師が子供の育ちを見通せることで多様な個性的な子供の育ちを長期的に支えることができるようになった。また小学校就学時に評価観が一致していることで子供の育ちが保障されている。またその育ちについて保護者と共有することで保護者も安心して子供の育ちについて見守れるようになった。

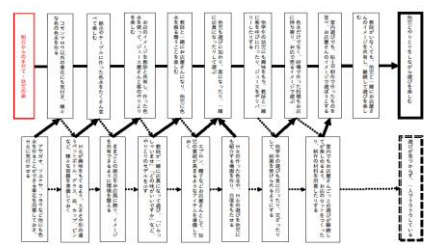
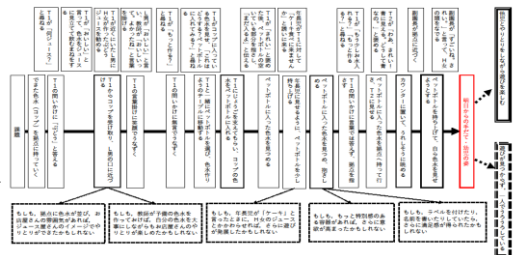
【今後の改善点】

- 社会の変化により、子供の姿も求められる「育てたい資質・能力」も変化すると考えられる。子供の育ちをみとる目をさらに向上させていくことが重要である。
- 視覚的に理解しやすいデザインとし、一般にも理解してもらいやすくなるよう改善していきたい。

(32. 奈良女子大学附属幼稚園)

○ 事例検討1

実施時期・回数	年間	主な対象	教師
保育カンファレンス			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① 園内研究・研修の一環として、年間を通して、1教諭少なくとも2回の保育カンファレンスを実施している。</p> <p>② 保育カンファレンスには、研究協力者となっている大学教員にも入って頂き、保育やカンファレンスの運営の仕方について、指導・助言を頂いている。場合によっては、幼稚園教育要領や現在の幼児教育の動向等について、園の教育課程と関連付けながら講話を頂いている。</p> <p>③ 今年度、園内研究で重点を置いている、「言葉による伝え合い」「協同性」「自立心」「思考力の芽生え」「豊かな感性と表現」について、TEM図を活用して対象児の言動や周囲の出来事からターニングポイントを語り合い、明日からの手立てを考え、「気付き」を共有している。このことから保育者の資質向上と保育内容の充実を図っている。</p> <p>④ 保育カンファレンスについては、公開研究会で取り組みについて地域に発信している。保護者には掲示用ドキュメンテーションやお便りで発信している。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○ 対象児についてTEM図を活用して語り合うことで、全職員で「幼児理解」「幼児の実態把握の方法」「環境構成を含めた幼児への援助の仕方」等についてより具体的な方策を考え、共有することができた。</p> <p>○ 対象児の課題となっていることと対応について全職員で共有して実際の保育にあたったことで、対象児が進んで言葉を使って友達と関わる等、対象児自身のより良い発達が見られた。</p> <p>○ 対象児について話し合うことで、全職員で「より良い保育」について共通理解し、教育目標具現化に向けた保育の在り方及び教育課程・教育計画の確認や見直しについて考えることができた。また、保育者の資質向上にもつながっている。</p> <p>○ 大学教員に専門的な立場から指導・助言や講話を頂くことで、新たな研究の視点が生まれ、理論と実践の往還を踏まえた研究を行うことができた。</p> <p>○ 地域や保護者に発信することで、園の保育について理解を得ると共に、地域の幼児教育の牽引役としての役割を果たすことができた。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○ 教育目標具現化のために、次年度の教育課程編成と園内研究・研修の在り方を再確認し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に見直しを図る必要がある。</p> <p>○ 園内研究・研修の成果と課題をまとめ、次年度更に幼児一人一人のより良い「心の育ちと言葉の育ち」を目指して研究・研修計画を立てる。</p> <p>○ 大学教員との連携の在り方を再度確認する。</p> <p>○ 地域や保護者への発信方法について、上記方法以外に効果的なものはないか見直し、実践していきたい。例えば、公開研究会紀要の保護者配布版の作成や研修会実施等を考えていきたい。</p>			



(5. 宮城教育大学附属幼稚園)

○ 事例検討2

実施時期・回数	毎日	主な対象	教師
共有フォルダの活用と園内研修			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① 本園ではLANの共有フォルダ内に行事，週日案や園内研修などのファイルを作成して保存している。</p> <p>② 今年度，園内研修では学級毎に個々の幼児について「学期毎の幼児の姿→幼児の課題→課題へのアプローチ→幼児の変容の姿」を担当が記述しているが，研修日までにそれぞれが共有フォルダのデータを事前に見ておくことで，研修での話し合いがスムーズに進んでいる。</p> <p>③ 園内研修時，担当がピックアップした幼児と担任外の職員がピックアップした幼児から，話し合いの対象となる幼児を決めて，2～3人について課題やアプローチの検討を進めてきた。</p> <p>④ 行事の際は，前年度の実施案と反省事項を基に，今年度の進め方を確認しながら実施に当たっている。</p> <p>⑤ 週日案の作成に当たっては，現在の幼児の姿から，どのような環境を構成したらよいか，どのような経験をさせることが幼児の成長・発達につながるのかを念頭に置きながら教師が取捨選択したり，或いは新しいことにチャレンジしたりする。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○ 共有フォルダの活用により，話し合いの時間の削減につながっている。また，話し合いの時間がとれない場合でも，コメントを挿入することにより，間接的なディスカッションが可能になった。また，文章化して記述することにより，話し合いでは流れてしまう言葉の意味や使い方などに注意が向けられるようになった。</p> <p>○ 個々がそれぞれの概念で使っていた言葉（「共有」「自信」「思いやり」「熱中」など）について，また具体的に出された幼児の姿について議論することにより，言葉の概念の違いに気づき，園としてのとらえ方を方向付ける結果となった。</p> <p>○ 一人一人の意識が向上すると，幼稚園全体の意識も向上し，ひいては園全体の保育力の向上，質の高まりにもつながっている。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○ 時間的な余裕はないが，日々の保育をしっかりと振り返る時間をとり，自分以外の視点から幼児の姿のとらえ方や活動の選択の仕方などにも目を向けられるよう，話し合いの時間を確保していきたいと考えている。</p> <p>○ 保育内容・幼児理解については，職員での話し合いを重ね，改善事項を把握し，それが次に生かせるような取組にしていくことが大切である。</p>			

(8. 福島大学附属幼稚園)

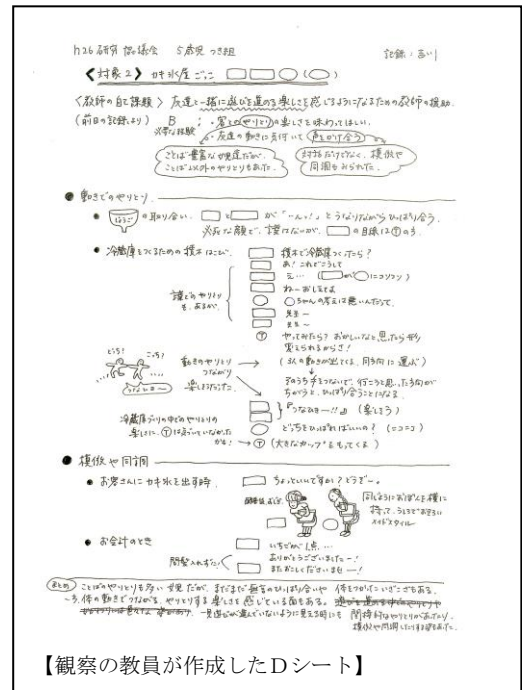
○ 事例検討3

実施時期・回数	年6回	主な対象	教師
---------	-----	------	----

保育検討会（保育者の資質向上）における記録の活用

【実施の方法・実施状況】

- ① 日々の当事者（担任）記録の形式や記載内容を、原則として全学年共通のものを検討し活用している。記載内容は、週のねらいを日々の記録に印刷し、遊びのエピソードと共に、教師（担任）の読み取りとして
A：（その日）幼児の経験している内容 B：（本日あるいは明日）必要な経験 C：具体的な援助としての環境の構成 の3項目を定めた。また、明文化には至りにくい、教師の直感や印象も花丸（よかった感じ）や困った顔マーク（あまりよくない感じ）で残す。
- ② 保育検討会（他の教師の保育参観）の際には、担任は前日の記録（①）を提出し、他の教師は観察者（第三者）として観察記録及び考察を作成する。観察者が作成するものを『Dシート』（①のA・B・Cの次）と命名した。各検討会時における課題を踏まえ、参加者全員が分かりやすいようにまとめ、検討の際には互いの『Dシート』を全員に配布して検討する。
- ③ 『Dシート』は、A4用紙1枚を制限とし、作成時間は1時間以内、イラストや写真を入れるなど各自で工夫する。



【実施後の効果】

- 日々の当事者記録の形式や内容を定めることで、必要な事項が意識しやすく、記述の偏りにも気付きやすくなる。また、記録を書く時間短縮にもつながることで継続可能となる。さらに、C：（明日）具体的な援助としての環境の構成を記載することにより、翌日の指導計画にもなっている。
- 日々の当事者記録をもとに話し合うことで、教師（担任）は、幼児理解や遊び理解が深まったり、指導の具体的な改善につながる実感を得ることができたりしている。また、他の教師も自身の記録と照らし合わせ、自身の幼児理解や遊び理解、指導の具体的な改善の手掛かりが得られる。
- 観察者として『Dシート』を作成することにより、自分が伝えたい内容を精選し、自身で考察を深めることができる。また、作成時間を制限する一方、形式は各自自由とすることで、伝えたい内容に合わせた作成がしやすくなる。さらに、作成の際に1度整理された内容なので、検討会の際の発言が的確になり、限られた時間の中で、より深い検討が可能となる。
- 互いの保育観・幼児観にもつながる検討が深められたり、日々の保育打ち合わせなどでも活用したりすることで、教員研修につながると同時に、保育内容の充実にもつながる。

【今後の改善点】

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて、日々の振り返りや検討会を実施し、教育課程編成の手掛かりとしているが、より、関連を意識し、育ちを見直したり語ったりできるような改善を図り、より保育者の資質向上につなげたい。
- 園内教師での活用に限らず、他園関係者などとの検討会や研修などでの活用を視野に入れたり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校教師と共通理解する手掛かりとして活用したりすることも視野に入れ、改善を図りたい。

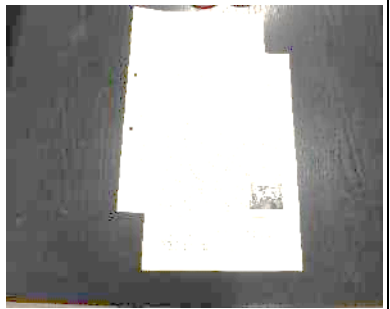
(14. 東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎)

○ 事例検討4

実施時期・回数	年3回	主な対象	教師
実践の語り合い（ラウンドテーブル形式の研修）			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① なぜ、実践について語り合うのか。平成27年度～29年度の取り組みの中で、お互いの実践について自由に発言ができ、肯定的に応答し合えることで、保育についての気付きが得られることが示唆された。本園では以前から研修の中で、子供の姿を教師同士で語り合ったり、子供の遊びや体験の意味を教師同士で話し合ったりすることに取り組んでいる。平成26年度の研究においても、「遊びこむ」姿のエピソードを読み合う研修に取り組み、教師同士が互いの書いた子供の姿を読み合い、質問や意見を述べ合った。このときにも、子供の行動の意味を深く考えたり、行動の裏にある思いを読み取ろうとしたりする経験が、別の保育の場面で生かされたという示唆があった。それと同時に、実践を語ったり聞いたりする経験を通して、実践の中で困ったり悩んだりしているのは自分だけではない、という安心感を得たという意見もあった。何を話しても聞いてくれる、受け止めてくれるという安心から、職員室内で子供の話や実践についておしゃべりする機会が増え、教師同士のコミュニケーションが広がっていったという実感もあった。このときのような関係性を、平成30年度の職員集団でも作りたいと願って、実践の語り合いを研修に取り入れることにした。</p> <p>② ラウンドテーブル形式の研修の計画と実施</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) ①今年度の研修の趣旨説明、②ラウンドテーブル形式での研修を始めるにあたって 2) 語り手の実践報告／グループ内での質問・意見交換と議論 <ol style="list-style-type: none"> ① グループ内での自己紹介、②実践報告、③グループ内での質問・意見交換と議論 3) グループを越えての交流と振り返り 4) 年間計画／第1回7／18、第2回12／19、第3回1／16 			
【実施後の効果】			
<ul style="list-style-type: none"> ○ 語る内容を書き起こした段階で、だいたい自分の中で、自分の大切にしていることが整理できた。 ○ 他者に語ることで、別の視点からの意見、捉え方を知っていくことで、多様な視点で子供、保育を考えていくことに繋がると学べた。 ○ 実践を振り返るために、以前の記録を読みあさっている時がおもしろく、当時の自分が何に関心を寄せていたのか、と思った。子供についての記述が少しずつ変わっていったのだ、と思えた。 ○ 語り手の人のライフストーリーを聴けたことで、現在の自分と照らし合わせながら聴くことができ、語ってくれたことで、自分自身を再度見つめなおす機会にもなれた。 			
【今後の改善点】			
<ul style="list-style-type: none"> ○ 実践を語り合う（ラウンドテーブル形式）研修は、研究主任以外が初めてという状況で実施した。参加者の感想からは、この語り合いの研修の場が居心地のよいものであり、安心して実践を語ったり、聞いたりできる場であるという共通認識ができた。特に次回の語り手は「この場で語ってみよう」という意欲が高まり、聴き手側は今回の反省を踏まえて、もっと語り手が語りやすい状況を作ろうという意識を持つことができた。今後の改善点としては、本園のように常に教師が入れ替わる場合や、経験年数の短い教師が多い場合に、どのような形で研修として取り入れられるか、研修を取り入れることにどのようなメリットがあるのか、その具体的な方向性を模索していきたい。 			

(23. 静岡大学教育学部附属幼稚園)

○ 事例検討5

実施時期・回数	毎週1回	主な対象	教師	
保育の質を高めるための記録に基づく話し合い				
【実施の方法・実施状況】				
<p>① 個々の教師が抱えている課題を全職員の課題として捉え、その課題を一つずつ全職員で乗り越えていくことを通して、個々の教師の専門性の向上を図るとともに、教師間で連携しながらPDCAサイクルを有効に機能させた保育の展開を図り、園全体の保育の質を高め、質の高い幼児教育の実現につなげていくことを目指して取り組んだ。</p> <p>② 個々の教師が日々の幼児の記録を取り、定期的に時間をとって、記録に基づく話し合いを全職員で行い、保育を検討していくことを継続して行った。</p> <p>③ 保育を検討する場では研究的な視点を持ち、「保育の質を高めるために」という研究テーマのもとに、「幼児のよさを共有する」「よさを学びにつなげる」「学びが充実する保育」といった目標に向かうための課題を年度ごとに確認し合って、全職員で課題を追究していった。</p>				
【実施後の効果】				
<p>○話し合いを継続して行っていくことで、個々の教師による幼児の理解が深まり、幼児の行動に込められた意味や幼児のよさを読み取っていくことが可能になってきたとともに、幼児のよさが生かされ学びにつながる教師の関わりや学びの充実に向けての時機を捉えた環境構成や援助について、より深く考えていけるようになってきており、このような効果は、個々の教師も実感することができた。</p> <p>○個々の教師が一人一人の幼児のよさや学びを捉え、学びが充実するための関わりを実践しつつ全職員の話し合いを継続して行ったことが、保育の振り返りや教師の関わりをより確かなものにするとともに、個々の教師の専門性を高めていくことにつながってきた。</p> <p>○個々の教師の捉えや関わりを確かなものにし、教師間で連携して保育を行うことで、園全体の保育の質を高めていくことができた。園全体の保育の質が高まることはまた、個々の教師の専門性をより高めていくことにもなるとも考えられた。</p>				
【今後の改善点】				
<p>○教師の専門性を高め、保育の質を高めていくためには、記録をとり、全職員で話し合い、保育を検討していく取り組みは必ず続けていかなければならないので、園業務の見直し等を行いながら、継続して続けていくための時間等をしっかりと確保していくことが必要である。</p> <p>○次年度に向けて一年の保育を振り返り、個々の保育の課題を出し合い、保育の質を高めていくために全職員で取り組むべき課題を明確化していくことが必要である。</p>				

(29. 兵庫教育大学附属幼稚園)

○ 事例検討6

実施時期・回数	通年	主な対象	教師
「わくワークシート」(保育記録) と「ほっとホットトーク」(保育カンファレンス)			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① 『保育者が“楽しい”と感じる保育』をするために考案した「保育わくワークシート」(保育記録)は「保育者が楽しいと感じた場面」から書き始める。そこに至った経緯を思い起こして、「子供たちの遊んでいる様子」と「保育者の援助」を書き、援助の根拠となる「保育者の思いや考え願い」などを付け加える。シートには罫線がないので、写真を貼ったりイラストを描いたりなど、自由に書き表すことができる。余力があれば「保育者が楽しいと感じた場面」に関連する「子供の姿」「ねらい」「環境」「子供の育ち」を記入する。「子供の育ち」については現在「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10の視点で読み取るようにしている。すべて書き記したとしても30分程度の短時間で仕上げることができる。</p> <p>② このシートをもとに「保育ほっとホットトーク」(保育カンファレンス)を行う。記録者が楽しいと感じた場面から話し、参加者はそれぞれに気づいたことや質問などを自由に発言したり、教師の悩みや迷いを解決したりする形式のカンファレンスである。</p> <p>③ ②の内容については「保育ほっとホットトーク」をしながら用紙に記入していくことが多い。記録は、教師が随時書き溜めていき、「保育ほっとホットトーク」は月に1回程度行っている。時にはカンファレンスに大学教員に加わってもらったり、保育を見合った後にカンファレンスを行ったりしている。</p> <p>④ 11月30日の公開保育研究会では保育参観後の保育を語る会で「保育わくワークシート」を用いて参観者、大学教員と共に「保育ほっとホットトーク」を行った。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○ 「保育わくワークシート」は「保育者が楽しいと感じた場面」から書き始め、それが集積されるので、保育へのモチベーションアップにつながり、記入しながら自分の保育の援助の根拠や、それが子供たちに及ぼした影響に気付くことができている。②を記入することで、「子供の姿」と「ねらい」の整合性、「ねらい」と「環境構成」や「援助」の適合性などの視点で保育を振り返ったり「子供の育ち」を多面的に捉えたりする力が養われている。</p> <p>○ 「保育ほっとホットトーク」は「保育者が楽しいと感じた場面」から話し始めるので、悩みや不安も気軽に話すことができ、参加者からの新たな視点やアドバイスによって、期待や自信、具体的な方策をもって次の日の保育に臨むことができている。また、自身の保育のよさはもちろん癖や欠点についても自ら気付き、受け入れることができ、教師の資質が向上している。</p> <p>参加者にとっては②の内容についてカンファレンスをしながら記入していくことで、子供理解が深まり、保育の力量形成につながっている。教師の頭の中が可視化される記録であるため、自分に置き換えて考えたり話し合ったりする中で、環境構成や援助の引き出しが増え、それぞれの保育への意欲が高まっている。終始ポジティブな雰囲気の中で、他の先生の保育観に触れ、互いを認め合いながら進められていくため、保育の喜びや奥深さを共有でき、同僚性の高まりに結び付いている。</p> <p>○ 大学教員にも参加してもらうことで、新たな視点や知識を得ることができ学びが深まっている。保育について、立場や専門の異なる人に理解してもらえるように語ることで力がついてきている。</p> <p>○ 公開保育研究会の保育を語る会において、参会者の方に「保育わくワークシート」「保育ほっとホットトーク」のよさが伝わり、自園でもやってみたいという感想もいただくことができた。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○ 「保育わくワークシート」をもとにした「保育ほっとホットトーク」においても多くの学びを得ることができるが、保育を参観した後に行う「保育ほっとホットトーク」では、さらに多くの学びがあることが分かった。今後はこの形式の「保育ほっとホットトーク」の回数を増やしていきたい。</p> <p>○ 「保育わくワークシート」と「保育ほっとホットトーク」を定着させ、教育課程の見直しに生かしていきたい。</p>			



(31. 奈良教育大学附属幼稚園)

○ 事例検討7

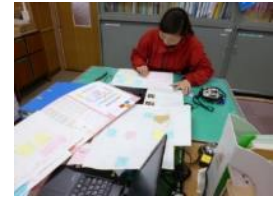
実施時期・回数	各期の節目	主な対象	教師
---------	-------	------	----

保育のメタ認知化

【実施の方法・実施状況】

① 学びの見取りと評価の工夫

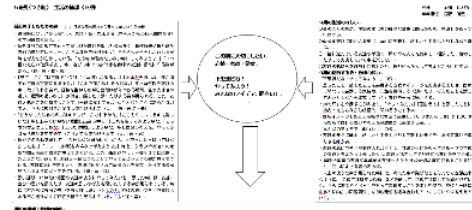
子供の学びを3つの資質・能力を視点に見取り、それを10の姿の視点で分類する形で保育記録をとり、分析する。また、教師の援助を4つのカテゴリーに細分化し、学びに即した援助を分析・評価する。



①分析シートを使用した記録

② 保育計画作成の工夫

保育計画を期を単位にして立案する。1枚目を『生活の構想』とし、見取った子供の姿・学びとそれに対応するねらい・内容、教師の援助を記載する。2枚目を『活動の構想』とし、1枚目の生活を5領域を基に具体的に活動化していく。領域は重なりを標記し、総合的な保育を前提としながらも、その期に中心的課題となる領域内に活動を置いていく。また、期に含まれる行事も構想の中に入れていく。同じ要素を含む活動の流れを大切に、前後の期を見通した活動となるよう構想する。1年を通して各領域のバランスを含めた内容の精査を行い、教育課程に反映させていく。



②保育を構造的に計画する

【実施後の効果】

- これまで個々の教師の主観や経験から行われがちであった保育全般を、構造的に捉え、保育計画作成の仕組みとして取り組むことにより、教師が自分の保育を客観的に自覚することに繋がった。また、10の姿を視点にした学びの見取り・分析および即した教師の援助の分析を重ねることにより、自分の保育の傾向や過不足、子供一人一人の特性理解及び教師の関わりなどを改善する具体策が見えてきた。それを実践に繋げることが、子供の育ちに直結することを実感している。
- 見取りの視点を共有し、教師の援助を分類し、同じ方法論で保育計画を立てることで、教職員間で子供の学びと教師の援助について具体的に協議することが可能となった。見取りや保育技術の向上だけでなく、教師間の保育における共通認識が具体化していった。
- これまで単発で行われがちであった大小の行事が、保育構想の中に位置付くかどうかで精選することができた。それに伴い、教員の意識が「行事という点と点を平素の保育で繋いで線にし、また広げて面にする」という見通しをもったものに変化した。

【今後の改善点】

- 記録の整理・見取りの分析、保育計画の作成など、個々の仕事にかなりの時間を要している。重要な要素を見極めながら簡素化できる工夫をし、過度の負担にならない形式へと再考していきたい。
- 教育課程へ反映させていくにあたり、記録分析の妥当性を十分検討する必要がある。客観的なキーワードの集計を重ね、年度による傾向を考慮していく工夫が必要である。

(34. 島根大学教育学部附属幼稚園)

○ 事例検討8

実施時期・回数	1週間～2週間に1回	主な対象	教師
---------	------------	------	----

幼児理解を深める取組～「こどもカフェ」～

【実施の方法・実施状況】

幼児理解を深める取組として「こどもカフェ」を1～2週間に1回実施する。

- ① 遊びの経過や幼児の実態を具体的に把握したり、展開を予測したりしやすいように写真を2～4枚提示する。
- ② 写真からだけでは読み取りにくい幼児の発言や状況などを並記した資料をA4用紙1枚にまとめる。
- ③ 幼児の細やかな心の動きや教師の援助、状況などについて気付いたことを語り合ったり、質問をしたりしながら、幼児の育ちを見取っていく。
- ④ 幼児の姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で分析したり、月案や教育課程と照らし合わせる。



【「こどもカフェ」実践事例】



【話しやすい雰囲気を大切にした研修】

幼児の姿や育ちの視点から見てほしい姿	見取った姿、つづき等
(1) 運動の心身	
(2) 育ち	見取った姿や幼児のつづきなど
(3) 学習性	
(4) 遊具・活動物との関わり	
(5) 社会性との関わり	
(6) 言葉の関わり	
(7) 自然との関わり・芸術性	
(8) 終身の学習・態度・心身の関わり・健康	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点
(9) 言葉による関わり	
(10) 異文化理解と表現	

【「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で実践事例を読み解く】

【実施後の効果】

- 「カフェ」と名付け、堅く構えることのないようにしたことにより、教師の年齢や経験年数にとらわれず、それぞれの考えや気づきを話しやすい雰囲気をつくることできている。
- 担任以外の教員の様々な視点からの見取りや考えに触れることができ、多面的で柔軟な幼児理解を深めることにつながっている。
- 他学級、他学年の幼児の実態を全教員が把握することにつながり、週・月案作成時に、幼児の姿を共有しながら修正、立案を行うことできている。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や教育課程などと照らし合わせることにより、今まで以上に幼児理解や援助方法を見通しをもって考えようとするようになっている。

【今後の改善点】

- 「こどもカフェ」を定期的に行うことにより、日頃の保育実践の場において適切に幼児の心の動きを読み取ったり、タイムリーな援助を行ったりできるなどの保育力の向上を図ることにつながる。
- 「こどもカフェ」の記録を蓄積し、根拠資料をもとにしたカリキュラム・マネジメントが行えるようにする。
- 「こどもカフェ」の資料を幼小接続部会（附属小学校1年担任と附属幼稚園年長組担任及び研究主任で構成している）での話し合い資料として提示し、接続期の幼児・児童理解を図り、接続期カリキュラムの見直しを行う。

(35. 岡山大学教育学部附属幼稚園)

○ 事例検討9

実施時期・回数	月1回または年2回	主な対象	教師
---------	-----------	------	----

園内研修の取組（保育カンファレンスを通して）

【実施の方法・実施状況】

①教育課程に即した保育を行う中で、教師各自でエピソード記録をとっている。その記録を実践事例として書き起こし、考察行ったものを持ち寄り月に1回程度カンファレンスを行っている。参加者は、主に園長、副園長、担任、養護教諭、研修教諭である。実践事例を読み合い、自身の保育観をもとに自由に意見を出し合えるようにしている。尚、本年度は、教師の顔ぶれ（担任、養護教諭）が大きく替わったため、保育の中で抱いた疑問についてもメンバー全員で考えて行けるように配慮している。

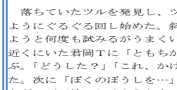
②各学年、年に2回程度園内研修を設けるようにしている。教育課程の内容や研究開発にかかわる保育を各学年の担任が行い、他クラスの担任、主担当、フリーで動く教師が集まり保育を参観する。参観後、参観した教師が参加して対象児のその日の様子をもとにカンファレンスを行い、環境構成や援助の在り方について検討したり、子供たちの様子を振り返ったりしている。



※友達とのかかわり、物とのかかわり



マキとリアカーによって、ハレルたちが引っ張って籠車ごっこをしていた。そらぐみケンギも交代して引っ張り始めた。シュンはご機嫌に乗っている。そのうち、大事な棒が手元になくことに気づき、近くの友達に「パンパン、さがしてください」という。近くにいたライノが「おさかな？のパンパン？」と問い返すがそれには応えない。しばらく、リアカーに乗ったり、何かを「ぼくだん！」といって投げたりしながら遊んでいる。



落ちていたツルを発見し、ツルをカウボーイのようにぐるぐる回し始めた。斜面の木の枝にかけようとして何度か試みるがうまくいかない。近くにはいた君岡君に「ともちせんせーい」と呼ぶ。「どうした？」「これ、かける」と頼んでいた。次に「ぼくのぼうしを…」とツルと帽子をつなぎ、再び枝にかけようとする。玉木T「おもしろいね」「よいしょ！がんばれ！」と応援、でも、うまくいかず「手伝って〜」と声をかける。三人の友達がぐるぐる手伝えない。友だち離れる。斜面に落ちていた棒を見つけ「ぼくの棒だ！」と手にする。次に、その棒と帽子とツルを結びしばらくチャレンジしていたが、成功しない。でも笑顔で繰り返している。

集いが始まりだし、10人ほど子どもが担任のそばによってくる。シュンは視野に入らないのか、あまり意識はないようだ。



そのうち、ネズの家あたりから小鳥の広場に移動し、いつの間にかそら組の中に入っている。玉木T呼びに来て、ぼくも集いの場所に戻る。しかし、反対向きに座っている。担任が読み聞かせをはじめようとする、前に行き、読み聞かせを正座して聴いていた。

<考察>

ツルを枝にかけようとかかなり長い時間、何度もチャレンジしていたり、ツル+帽子

カンファレンスでの資料例

【実施後の効果】

- 本年度から赴任した教師にとっては、カンファレンスや園内研修を行うことで、これまで本園で大事にしてきたこと、森の教育力を生かした保育の大切さ、自然との関わりの必要性等を理解することにつながっている。
- 本園は、幼小の滑らかな接続や連携を意識し公立小学校から研修教諭を受け入れている。カンファレンスを通して園の教育方針を理解していくことで、幼児理解を学ぶこと、幼児期の遊びを通しての学びを小学校でどのように生かしていくか考える機会になっている。
- カンファレンスや園内研修を行うことで自らの保育を省察することができ、独りよがりの保育にならなったり、自らの保育観を見つめ直したりするよい機会となっている。また、自らの保育を振り返り、省察を行うことで教師自身の自然観や人間観も変わってきたり、本園がこれまで大事にしてきた教育方針を意識した保育、子供の主体性を重視した活動を行うことができるようになってきている。

【今後の改善点】

- 今後のカンファレンスにおいて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連性も意識し協議を深め、教育課程の改善につなげて行く必要があるだろう。

○ 事例検討 1 1

実施時期・回数	月 2 回	主な対象	教師
---------	-------	------	----

保育カンファレンス「幼児期の終わりまでにいかに育つか」

【実施の方法・実施状況】

- ① 毎月行う全体打ち合わせと指導の評価の後、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の 10 項目についての研究会をもつようにする。

- ② 右図は「図やかたち」に関する一例であるが、そのテーマを 3, 4, 5 歳の生活の姿に照らして職員全員で考えている。写真やエピソードなどを持ち寄り、その発達のプロセスが把握できるようにドキュメンテーションしていく。

図やかたちの感覚や認識はどう育つか

①形を見つける。意味づける



「せんせい ほら、ハート型」これ見て。この石の形、タマゴみたいでしょ。石の中から特徴のある形を見つけ出す。様々なものを自分の既知のものに関連付けたりまとまりをもたせたりして意味付けする。

左右対称の模様や規則性のある模様なども、「わあ、きれい」と思わず感嘆の声が漏れることが多い。幼児たちに「パターンとしての美しさや形としての美しさ、正確である美しさなどの審美的な感性が備わっていることが推察される。

算数、数学の解のすっきり感、美しさに感動する心に通じる どのこと

②形を作り出す体験



自分の手で意味のある形を生み出していることを喜ぶ。

一つの形から他の形を作り出す「変貌の経験」にもつながっていく。リボンを回して輪を描いたり、コンパスのように棒の一方を固定して回転させて丸を描いたり様々な操作で異なった形や価値を生み出していく。

【実施後の効果】

- 幼児の育つ姿が見通せるようになってくる。
- 保育者の環境の構成についての工夫が生まれてくる。

⑥形の同一性を知る



幼児たちはものを集めることを好む。また、それらを自分たちなりのルールや秩序で並べたり、種類ごとに分けたりする。同じ種類のを並べる遊びの中では、それがどれも同じような形だと分かる。

片付けに関しても同様の感覚が発揮され、同じような形の皿や容器などを細かく分類整理することも「片付け上手」のプライドをくすぐっている。このような形の同一性や用途ごとの仲間分けは、遊具や用具の棚やかごの配置、その表示の仕方などで「分かりやすい環境」「使いよい環境」となるかどうかが決まってくる。

【今後の改善点】

- ベテラン保育者がアドバイザーとなり、実践の知見を呈して若い保育者の気付きを促していけるようにする等、協働の仕組みを構築する。
- 大学附属の強みを生かして、教科教育の専門家の協力を得るようにする。

(39. 鳴門教育大学附属幼稚園)

○ 事例検討12

実施時期・回数	年間6回	主な対象	教師
---------	------	------	----

園内保育研究会

【実施の方法・実施状況】

- ①平成30年度は、子供の幼児理解を深め一人一人の育ちを確かなものにする実践を行うために本園で作成した評価指標を活用し保育研究を進めた。具体的には、各クラス2名の抽出児を選び、下記の日程で年齢別の保育研を行った。

	5歳児	4歳児	3歳児
1学期	6月13日	6月18日	6月25日
2学期	10月16日	10月23日	10月30日



- ②全職員が観察する抽出児を決め、園内保育研究会前のその子供の1週間の姿を付箋に記入して模造紙に貼った。記入する付箋紙の色と内容は、以下のとおりである。

桃色：実際の子供の姿
青色：評価指標を活用して捉えた発達の姿
黄色：具体的な環境の構成や援助の方向性

職員全員で多面的に子供の発達を捉え、評価指標を活用して抽出児の発達に見通しをもち、指導の工夫改善について検討した。

実際の姿	評価指標を活用して捉えた発達の姿	具体的な環境の構成や援助の方向性
ボンボンを持って応接している友達に気付き、一緒にボンボンを振って応接する。	(評価指標 3協同性) 友達と同じようなイメージで遊ぶ	2人のイメージがつながるような言葉をかけ、イメージが共有できるようにする。

【付箋紙とその記入例 (5歳児 女児)】

※実際は抽出児一人あたり各色10~15枚の付箋紙に記入

【実施後の効果】

- 6月の園内保育研究会では、自分が記録した子供の姿を評価指標と照らし合わせながら読み取った発達を出し合うことが中心だったが、10月の園内保育研究会では、それぞれの読み取りが深くなった。例えば、評価指標の言葉の中で「気の合う友達」と「いろいろな友達」はどのように違うのか、「繰り返し」「根気強く」「諦めずに」の捉え方などについても検討するようになり、教師の資質の向上につながった。
- 評価指標を活用することで、それぞれが捉えた抽出児の姿を全職員が共通の言葉(評価指標の文言)で読み取ることができ、抽出児の内面をより深く理解することにつながった。
- 評価指標の次の項目を参考にして、抽出児の発達に見通しをもちたり、発達に必要な環境の構成や援助の方向性を見出したり確認したりすることができた。また、抽出児以外の個々の子供の幼児理解と指導の改善にも生かすことができるようになってきている。

【今後の改善点】

- 評価指標は到達度目標ではなく、一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにするためのものであることを十分に共通理解している。しかし、評価指標の次の項目を意識しすぎて指導を急ぎすぎてしまう面もあった。発達に見通しをもちつつも、子供が今興味があることに没頭して満足感が得られる経験も大事にする。

(46. 熊本大学教育学部附属幼稚園)

○ 園環境の改善1

実施時期・回数	随時	主な対象	教師・参観者・保護者・実習生
---------	----	------	----------------

園内環境の整備・改善（多くの人の目で）

【実施の方法・実施状況】

- ① 本年度は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿をどう捉えるか」について、健康な心と体を視点に研究を進めている。子供の健康な心と体を考えるとき、最も大切にしなければならないことは、言うまでもなく園生活が「安心・安全」に展開されるということである。子供の主体的な活動を大切にしつつ、園庭や園舎などの環境の配慮や指導の工夫を行うことが、幼稚園生活を「安心・安全」なものとするのが、研究の大前提であると職員全体で再認識した。
- ② 本園では、安全計画に従い月に一回教師がペアーで安全点検等を実施している。しかし、慣れによる捉えの甘さが見られるようになってきていることが反省としてあげられるようになった。多くの人の目で園環境を見直す必要性を求める声があがった。
- ③ そこで、本園の特性を生かし、来園者及び実習生に「危険発見！シート」を配付し、保育参観時に安心・安全な環境と言う視点から気付きや意見の提出を依頼した。
- ④ 来園者からの「危険発見！シート」の内容については、朝の打合せの時間に、共通理解を図り、改善策を検討し、早急に対応できるようにした。
- ⑤ 「危険発見！シート」の内容で、対応に苦慮した時には、大学の専門の先生や事務職員・施設課、保護者に相談し対応を行った。

【実施後の効果】

- 安全についての意識が高まり、いろいろな視点で、安全点検を行うことができるようになった。
- 職員の子供たちの安全への意識が高まり、保育において、環境構成等において丁寧な工夫が見られるようになった。子供の主体性をより拡大することにつながった。
- 園職員の安全点検は、慣れにより見落とししている場面が多いことに気付かされた。園の特性を生かし、環境の見直しを行ったことは、園内環境を整えることにもつながった。また、「安心・安全」に対する意識向上が図れたことで、教師全体が、ダイナミックな保育の実践につながっている。
- 参観者からの多くの意見を聞いていくことで、はじめは、抵抗感を感じる職員も少なくなかったが、継続していくことでその抵抗感が少なくなり、一人一人が真の安全について考えようとするようになるようになった。また、誤った（古い）認識を改めることにもつながり、スキルアップにつなげることができた。



ドアノブへ安全クッションを



消火器の位置を天井にも



ピアノ転倒防止



保護者による樹木伐採

【今後の改善点】

- 幼児期は環境に影響されながら成長する。幼稚園では、目的やねらいを環境に置きかえ、子供自らがその環境に主体的に関わることによって伸びていくよう見守っていくことが大切である。それを保障するためにも、教師が安全面の意識を常に磨いていけるよう工夫していくことが求められる。

(9. 茨城大学教育学部附属幼稚園)

○ 園環境の改善2

実施時期・回数	毎週	主な対象	教師
---------	----	------	----

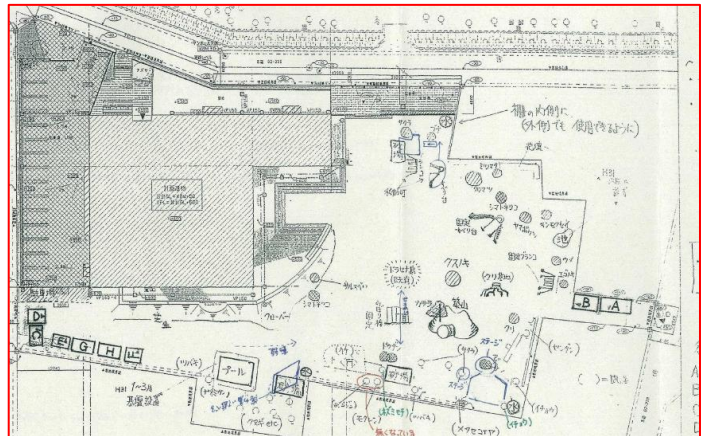
園内研修における園庭での遊びの分析と園庭づくり

【実施の方法・実施状況】

- ① 園舎改築に伴い、園庭も一から作り直すことになった。具体的には、新園舎建築にかかる園庭西側の樹木や遊具は、伐採や撤去を余儀なくされている。西側には、大きな栗の木を始めとして、四季折々に花を咲かせ果実を実らせてきた遊びを豊かにしてくれる魅力的な樹木がたくさんあった。そこで、これまでの園庭での遊びに着目して分析することで、樹木や遊具の種類や配置などを検討し、新しい園庭づくりにつなげることにした。
- ② 園内研修において、遊びを豊かにした要因となっている樹木や草花などに着目し、各担任からの園庭での事例を分析した。
 - ・平成29年度は、一年間を通して季節ごとの遊びの変化を考慮しながら園庭での事例を集めた。
 - ・過去の研究紀要から、園庭での事例で、とりわけ樹木や遊具が遊びを豊かにしている大きな要因となっているものをピックアップした。
- ③ 園内研修での分析を基に、新園庭の樹木を選定していった。また、それぞれの木々の特徴を踏まえ、遊具との関係も考慮しながら、各々の配置を検討し新園庭の設計につなげた。



緑豊かな旧園庭



新園庭のプラン（樹木や遊具の配置図）

【実施後の効果】

- 園庭の完成は、平成30年12月末の予定なので、子供たちの遊ぶ姿をまだ見ることはできていない。
- これまでの園庭での遊びを分析し、園庭づくりにつなげるなかで、教師の園庭環境そのものへの理解が深まった。具体的には、樹木や草花の特徴を理解したり、そこから展開される新たな遊びを知ったりすることで、自らが作った園庭での保育できることに意欲をもっている。

【今後の改善点】

- 平成31年1月以降に子供たちの遊びがどのように展開されるのかしっかりと見取り、その様子から検証していきたい。
- これで園庭が完成ではない。今後は、池や花壇など、保護者や子供たちと一緒に考えながらつくっていききたい。

(11. 群馬大学教育学部附属幼稚園)

○ 園環境の改善3

実施時期・回数	2月・7月	主な対象	園児・保護者
---------	-------	------	--------

園庭の遊具の見直しプロジェクト

【実施の方法・実施状況】

- ① 平成23年に教育目標を「うごく」「かんじる」「かんがえる」と見直したことや幼稚園教育要領の改訂があったことから、園環境の見直しの必要を感じていたため、以前から連携していた千葉大学工学部デザイン学科と「園庭の遊具見直しプロジェクト」を共同で行うことにした。
- ② 子供の遊び方を観察後、デザイン学科と事例を通しての話し合いを数回もち、滑り台・ボルダリング・丸太・タイヤを備えた「どんぐり山」を作る計画を立てた。保護者に説明会を開き、子供も参加することが大切と考え、平日であるH30.2.20に教師・園児（140名）・保護者（120名）・工学部准教授と学生と合同で作業を行った。（写真1）その後、遊び方の観察をし研修を行った。
- ③ 「どんぐり山」の遊び方の観察を基に、「夢の城」と呼んでいる総合遊具の改修計画を立てた。「自分の力を試し、何度も挑戦することを楽しめる遊具にする」「子供自身が自分の能力と向き合い、様々な工夫をして遊べるような遊具にする」「禁止事項を極力減らし、安全な行動かどうかを子供自ら判断できるような遊具にする」をコンセプトに保護者に説明会を開き、H30.7.14に教師・園児（55名）・保護者（111名）・工学部准教授・学生と合同で、「夢の城」の滑り台・階段部分を撤去し、アスレチックを作って取り付ける作業を行った。（写真2・3）その後遊び方を観察し研修を行った。



【実施後の効果】

- 「どんぐり山」では、遊具を工夫して使い友達同士で楽しんで遊ぶ姿が見られた。
- 「夢の城」では、遊具に登ろうと何度も根気よくチャレンジする様子が見られた。
- 保護者や園児が作成に関わったので、自分たちの遊具・自分たちの園という意識を強くもてた。
- 教育目標「うごく」の内容「体を動かす心地よさを感じ、挑戦や表現を通じた自己発揮により、充実感や達成感をもつ」「友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい、意欲的に関わりながら、めあてをもって共同してやり遂げる経験をする」姿、「かんじる」の内容「『できた』という達成感や『楽しかった』という満足感を持ち、自分に自信をもつ」姿、「かんがえる」の内容「試行錯誤しながら課題を乗り越え、『できた』『わかった』という喜びをもつ」姿がこの遊具の遊びを通して見られた。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から見ると、主に、作成段階では「社会生活との関わり」、遊びの中では「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」などの育ちにつながる体験ができる場になっている。

【今後の改善点】

- 改修部分は木製であり、常にメンテナンスが必要である。「これで完成」というのではなく、遊びの様子を観察・記録・検証しながら、子供にとってより良いものへと作り直して行く必要がある。

(13. 千葉大学教育学部附属幼稚園)

○ 園環境の改善4

実施時期・回数	随時・月1回	主な対象	教師
---------	--------	------	----

環境の改善（ヒヤリハット報告書から）

【実施の方法・実施状況】

- ①平成29年度の幼稚園教育要領改訂による新たな基本方針に基づき教育課程の見直しを行い、改めて「環境を通して行う」という幼稚園教育の基本に立ち戻ることが必要であると考えた。また、本園で大切にしている「子供の主体的な取り組み」を育むための環境を構成するには、全教師が「安全」の視点を再認識することが必要であり、それにより園生活が一層充実したものとなると考えた。
- ②安全に関するマニュアルの実効性について問い直しを行った。その結果、内容についての理解はされていても、現状に即した再検討がなされていないことが課題として明らかになった。
- ③学校安全に詳しい大学監事でもある弁護士にアドバイスを求めたところ、教師の日々の保育におけるヒヤリハットに対する自覚と組織的な共有が必要であるとの助言を受けた。「学校事故対応に関する指針（平成28年3月）」など提示された資料や文献を参考に、今後の取り組みについて検討した。
- ④より安全で豊かな環境を目指し、日々の保育において重大な災害や事故には至らないものの直結してもおかしくない『ヒヤリハット』を基に見直すことにした。「ヒヤリハット事例を出し合うことは、個人の責任追及ではなく園児の安心安全のためである」ということを確認した上で、互いに気付いた事例を報告し合うようにした。その際、全員で原因を探り、改善方法についての具体策を検討、環境の再構成を行い、再度職員会議で確認を行っている。

【事例ー右図より】「廊下を走っていて交差点で衝突」→原因「障害物がなく走りたくなる廊下」→改善策「走るのを禁止するのではなく、ケンパ、半丸太、缶ぽっくりなどを用意し、歩く速度で運動が出来る場として活用すること」により環境を再構成する



【実施後の効果】

- 「ヒヤリハット」はその場にいた教師は意外に気付かず、他の教師によって、客観的、分析的に見直すことが可能であることが分かった。また、安心安全の向上のためという目的を共有し、全員で協力して問題点を探り、より良い環境を創り出すことが、教師全体の安全への意識向上につながっている。
- 報告書の中に発生から改善までが記録され、そのデータが蓄積されることにより、同様の事例が起こることを防ぐことにつながり、環境を構成する際、安全に関する視点が意識化されてきている。
- 個々の事例に基づいた環境の改善が行われることにより、一人一人の育ちに即した環境構成がなされ、必要な体験が得られている。また、環境の改善を繰り返すことで、安心安全な園生活の中で一人一人が、主体的に伸び伸びと自分のやりたいことに取り組む姿が見られるようになった。そこでは、「健康な心と身体」「自立心」「協同性」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「豊かな感性と表現」が育まれていることが捉えられた。

【今後の改善点】

- 安全面による見直しを常に行うと同時に、子供自身が挑戦できる環境をどのように保障していくのかについての検討が必要だと考えている。

○ 保育の改善1

実施時期・回数	9月	主な対象	年中組
豊かな遊びを育む教材の工夫			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① この時期、一人一人がこうしたいという思いをもちじっくり遊びに取り組み、自分なりにできたという満足感や自信が得られるような育ちを促すために、みんなと一緒の活動の一つに、年中組ではテープ状の画用紙をホチキスで止めて作る季節の果物を製作していた。</p> <p>今年度は学年会において、この活動内容について話題となり、「運動会のテーマにかかわる活動にする」「保育参加の人材を生かし一人一人の技能の習得に応じる」「自分たちが作ったものを遊びに使う楽しさを体験する」ことにも広がっていくようお願い、教材を見直した。</p>			
<p>② 細長い画用紙を思い思いに切ってホチキスでつなげ、運動会の競技に使う木の葉っぱにした。太古の時代へタイムスリップするイメージを楽しみながら、繰り返し鉋やホチキスにかかわる姿が見られた。また、長くつなげようと協同して製作する姿も見られた。</p>		 	保育参加時の葉っぱの製作
<p>③ 出来た木は、保育室の環境に入れ、いつでも使えるようにした。自分たちで作った葉っぱがついている木は、愛着があり、運動会のイメージとも相まって、徐々に遊びの中で木を運び出し、自分たちなりに遊びの拠点づくりに生かしていた。</p>			屋根を付けて キャンプごっこ
【実施後の効果】			
<p>○ 活動の中では、思う以上に鉋やホチキスにかかわる姿が見られ、技能の習得につながる機会になった。また、子供たちの技能の実態について保護者とも共有する機会となった。</p> <p>○ 遊びの拠点作りに使う中では、自分たちで作ったものを遊びに生かす嬉しさ、その中で気の合う友達と遊びを進める面白さを体験する機会となり、この時期ねらう子供の育ちに近づく機会となった。</p> <p>○ 活動と遊びをつないでいくよさや効果（製作や表現につながる技能を支え、イメージをつなげたり広げる、活動と日々の遊びがつながりながら体験が豊かになっていく等）を考えるきっかけとなり、体験の多様性と関連性を踏まえた教材の工夫の一つとなった。</p> <p>○ 教材の工夫は、教材そのものの可能性を考えるばかりでなく、一人一人の自己の育ちが促されていくことにまで踏み込んだ読み取りが必要であることがわかった。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○ 日々の遊びと活動とのつながりを考えるに止まらず、その中での一人一人の実現したい思いに寄り添い、多様な体験を支えていこうとする教師の在り方を見直し、カリキュラムマネジメントを生かした幼児の体験や学びの適切な読み取りや理解から始まる教材の工夫について実践を重ねていく。</p> <p>○ 教育課程や指導計画に教材の工夫やそれによる体験の広がりやつながりをこまめに残し、保育の質の向上や自己形成にどのようにつながるか、その道筋を捉えていく。</p> <p>○ 保護者や地域に子供たちの体験や学びを発信し共有していく体制作りを進める。</p>			

(4. 岩手大学教育学部附属幼稚園)

○ 保育の改善2

実施時期・回数	年間	主な対象	幼児（保護者）
---------	----	------	---------

自作教材を活用した体験型保健指導

【実施の方法・実施状況】

- ① 健康に関わる内容について、子供の発達段階に合わせて養護教諭が自作で教材化し、遊戯室前に掲示・設置する。
- ② 登園後や遊びの中で、子供一人一人が掲示物を見る、触る、動かすなどの活動を行うことで、健康に関する内容を理解する。
- ③ 年4回の身体計測前に、各学年ごとに模型や紙芝居毎月の掲示物等を活用して、その月の保健目標や子供の実態に合わせて保健指導を行う。
- ④ 手洗い、歯磨き等、健康づくりに関する行動の習慣化が図られるように、担任と協力して学年に合わせて掲示し、一緒に継続して指導を行って、行動へとつなげていく。
- ⑤ 保護者にも見える場所に掲示するだけでなく、ねらいも含めて保健だよりに掲載し、家庭と連携して保健教育を進めていく。



【実施後の効果】

- 健康な身体づくりに関する内容を、子供が視覚や体験を通して理解することで、丁寧な手洗いや歯の形などを意識した歯磨きなど、ねらいを意識しながら行動することができるようになってきている。
- 転んで擦り傷ができた場合や鼻血が出た場合など、状況に応じて、子供達なりに必要な処置に取り組むことができるようになってきている。
- 食に関する内容も含め、子供についての情報を共有し、家庭と連携しながらその時に必要な健康教育をすすめることができている。任意のチェックカードも活用し、家庭においても習慣化につながっている。



【今後の改善点】

- 体験型教材は、保護者にとってもわかりやすく健康教育推進にとって非常に有効であるが、養護教諭の自作であるため、製作等、個人への負担が大きくなっている。保護者活動等とも関連づけ、全員で進められるようにしたい。
- 幼児期に理解した保健に関する知識や手洗いの仕方等の技能について、小学校や中学校とも共有し、継続さらには発展して取り組んでいくことができるようにしたい。

(7. 山形大学附属幼稚園)

○ 保育の改善3

実施時期・回数	5～6月	主な対象	4歳児
砂粘土の事例（アクティブラーニングの視点からの教材研究）			
【実施の方法・実施状況】			
<p>①新しい教材を探している時に「砂粘土」を既製の本から見つけ、教材化に取り組む。</p> <p>②砂・トイレットペーパー・でんぷんのり・水を用意し遊びに適当な量を見つかるまで、試行錯誤し教材研究（作ること）を続けた。</p> <p>③「固め」「普通」「柔らかめ」の3種類の砂粘土を作り、固さに応じてどのような遊び方ができるのか試し、遊び方に応じた教材として用意した。</p> <p>④それぞれの固さの砂粘土を各学年の保育で提案した。固さによって遊び方がどう違うのか、どんな遊び方をするのかの記録を取り、教師も一緒に遊ぶ中でそれぞれ何を楽しみ、どんな風に遊ぶのかを観察していった。</p> <p>⑤記録やつぶやきを元にさらに試しの保育を行った。違う固さの砂粘土を幼児と一緒に作り、その活動に応じ必要となったその他の道具（例えばへら、カップ、おろし器など）や素材（葉、花、枝）またドラム缶やビニールシート、机などの環境を用意し遊びを広げていった。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○幼児への提示からそれぞれの発達段階の違いによる遊び方の違いが見て取れた。その結果、砂粘土での遊びの適性は4歳児～5歳児前半ではないかという知見を得た。4歳児にとっての経験や使用する材料・素材を吟味し教材として用意することができ、教育課程や長期の指導計画の改善につながられた。</p> <p>○教育要領改訂に伴う大幅な教育課程の見直しに合わせて、それまで活用してきた「身近な素材活用一覧」の表の見直しも行った。そこには新たに砂粘土に関わる素材・材料が加わると共に学年間の素材の共通化や区別化など、別の素材と組み合わせ遊びが広がることを意識した一覧表の作成が図られた。</p> <p>○同じ「粘土」であっても質感・素材感の違う粘土（紙粘土、小麦粉粘土、砂粘土、土粘土、油粘土など）について保育として使用するのに際して、扱うのに適当な年齢・時期などについて事例を持ち寄り検討することでそれぞれの教師の素材への理解が深まった。またその他の素材などに関しても同様のやり方をする中で、幼児の成長発達に関して効果的な素材を出す時期となるのかなど研究を深められ教師の資質の向上の一助となっただけでなく、一覧表の見直しに効果があった。</p> <p>○砂粘土を保育に取り入れたことで研究会を訪れた他園の教員から作り方やレシピの問い合わせなどが有り、研究成果の他園への発信につながった。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○新しい教材の作成になったが今後も幼児の育ちと経験を考え、常に教材研究の視点を持ち保育や日々の実践また指導計画や教育課程を見つめ直していきたい。</p>			



(10. 宇都宮大学教育学部附属幼稚園)

○ 保育の改善4

実施時期・回数	随時	主な対象	幼児・保護者
---------	----	------	--------

食育の取り組み

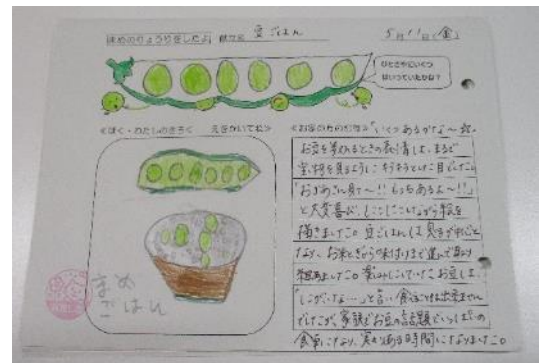
【実施の方法・実施状況】

- ①年中・年長児は親子栽培に取り組んでいる。親子で野菜を栽培し、収穫して食べることを通して、野菜の生長への関心や、食への関心を高め、親子の共通体験となるようにしている。
- ②食育の上で調理体験の意義は大きいですが、衛生安全面の観点から幼稚園では調理を頻繁に実施することが難しい。そこで、年長児では親子栽培の過程を記録したり、園で収穫した野菜などを持ち帰った時の調理の様子を記録したりする『もりもりファイル』を用い、家庭と連携して食育を行っている。『もりもりファイル』は、子供は自分の体験を絵で記録し、保護者の方が文章で記録するようにしている。
- ③年に2回、年長児が園で収穫した野菜を使って、調理会食を行っている。その際に、「お料理の名人」として地域指導員の方に来ていただき、作り方を教えていただき、地域との関わりの機会にしている。



【実施後の効果】

- 親子栽培では、毎日野菜の生長に関心をもって世話をし、親子での会話をしたり、収穫を喜んだりしている姿が見られる。
- 『もりもりファイル』の取り組みでは、「子供と一緒にメニューを考えて調理する体験をできてよかった」「自分が育てた野菜だと食べられるようになった」という感想を書いてくださっている保護者が多い。子供と一緒に調理することで改めて食について考えたり、食を介して子供と関わる良い機会になっていたようだ。



<まめのりょうりをしたよ>

- また、「幼稚園で聞いてきたことを伝えてくれたので、その通りに調理しました」との感想もあり、園での経験と家庭での経験が繋がっている様子も見られる。
- 園での調理体験時には、地域指導員の方を「お料理の名人」と紹介したことにより、子供たちは親しみをもって関わり、「教えてもらった通りに作ったらおいしいものができるはず」と期待感をもって調理に取り組んでいた。

【今後の改善点】

- 家庭で調理をして、『もりもりファイル』に記録するという取り組みを負担に感じ、難しい家庭も出てくるかもしれない。『もりもりファイル』の取り組み方や回数なども、実態を踏まえて考えていかななくてはならない。
- 食育の取り組みでは、アレルギーなど配慮の必要な幼児への対応を適切に行うことがさらに求められる。
- 調理会食や野菜の栽培で、地域の人材を有効に活用し、連携しながら取り組んでいけるとよいと考えている。関係が途切れないように、普段から地域との関わりをもっていきたいと考えている。

(26. 滋賀大学教育学部附属幼稚園)

○ 保育の改善5

実施時期・回数	随時	主な対象	園児，教師
---------	----	------	-------

保育形態の工夫

【実施の方法・実施状況】

①3歳児 一人一人のペースで生活が送れるように、自分の好きなこと、興味をもったことに好きな場所で心ゆくまで取り組む中で、自立を図る。そのため、自分の持ち物ロッカーは一人で使う。また、自分の思うように扱える軽量の個人椅子を3歳児用に用意している。その一方で、同じ年齢の幼児の顔が見える正方形のテーブル、肌が触れ合い人がそばにいることが自ずと感じられる2, 3人掛けのベンチを意図的に保育室の環境として用意している。



②4歳児 平成8年度より2クラス60名を20名3グループに編成している。それによって、さまざまな保育施設や家庭からの2年保育入園児、本園での進級児と、多様な育ちの背景をもった幼児に、3人の教師がチームとなり連携しながら対応することができる。幼児にとっても、自分のグループの一員であることを意識しつつ、顔や名前を覚えやすい人数で、グループの仲間がいることを感じることができる。つまり、幼児にとっても、教師にとっても、一人一人が自己発揮しつつ、仲間との関係性を作り、主体性と協同性を育てている。

③5歳児 5歳児は2クラス制になるが、そのクラスの中に二人のペア活動、5人の生活グループ活動、4歳児の3グループに戻っての活動、2クラスを新たな3チームに分けたチーム活動など、多層の保育形態を編成して保育を行っている。4歳児の3グループの生活から進級に伴うクラス替えを行うので、新しい学級集団に馴染みにくい幼児もいるが、小さな生活集団や昔のグループの仲間関係を足場にして、次第にその関係を広げて学級集団での生活に入っていくことができる。特に、現在は生活グループでの保育形態を大事にしている。5人分が一つのユニットになった木製ロッカーは、仕切りがないので5人で折り合いをつけながら使う必要があり、みんなが気持ちよく生活するために自律も求められる。また、毎日の牛乳給食では、準備する、500ccのパック入り牛乳を分けて飲む、片付ける、を、相談して行う。他に野菜の袋栽培、鯉のぼり作り、砂場での山作り、大積木で遊ぶなど、多層のグループ活動を取り入れ、少人数でのコミュニケーションの機会を作っている。



④4, 5歳児の異年齢活動 核家族化、少子化の傾向があり、子供同士の関わりも家族内で閉じてしまうことが多く、一人っ子家庭も多くなってきた。4, 5歳児で1年間同じ相手と関わる機会をあえて作っている。“幼稚園の兄・姉・弟・妹”として、擬似兄弟・姉妹の関係を意図的に作って、一緒に遠足に出かけたり、運動会に参加したり、遊んだりしている。

【実施後の効果】

- 年齢に応じた保育形態を考慮することで、自立、自律、協同性を意識した保育につながっている。
- 教材研究と共に保育形態を深く考えていくことで、自立、自律、協同性を育むための環境や活動をいかに自然に生活の中に作っていくか、具体的に生活をイメージできるようになってきた。
- 多様な保育形態を取り入れることで、全教員が一つのチームとして保育に携わるようになり、保護者へ一人一人の園での生活を語る際に、担任だけの情報だけでなく、たくさんの教員からの多角的な情報が得られるようになった。

【今後の改善点】

- 4歳児の3グループ制については、編成をいかにすべきか、その時々幼児や保護者の実態に合わせて考慮してきた。年度途中でグループを再編した年もあれば、そのまま1年間同じグループで過した方がよいと判断した年もあった。グループ編成ではできるだけ多くの情報をもとに行うことや、年度途中であっても育ちの実態に合わせた柔軟なグループの再編成をすることなどの課題がある。
- 異年齢活動のペアは4月終わりごろから編成するが、4歳児では入園・進級からあまり期間を経っていない中、どんな5歳児とペアを組ませるか、また5歳児では後々の3チームでの活動に関連すること、一旦決まったペアは原則として、1年間変えることがないことなどで、ペアの編成は非常に複雑である。

○ 保育の改善6

実施時期・回数	通年	主な対象	年長児 年中児
---------	----	------	---------

プロジェクト型保育（年長～虫，種）（年中～土）

【実施の方法・実施状況】

①プロジェクトの選択

幼児の興味関心から，教師がプロジェクトになりそうな遊びを選択する。
（平成30年度は年長が虫，種プロジェクト 年中が土プロジェクト）

②エピソード記録・年間計画の作成

プロジェクトに関わるエピソード記録をとり，その場面から育まれると思われる資質・能力を分析した。年間計画には，今年度のプロジェクトの遊びの内容，写真，育まれると思われる資質・能力を記し，作成した。

③事例の作成

期（Ⅰ期からⅤ期）ごとに，プロジェクトの遊びの経過，幼児の姿，教師の援助，プロジェクトを通して育まれると思われる資質・能力を分析し，作成した。教師の手立てや環境の構成の仕方などを振り返る評価として今後活用していく。

【実施後の効果】

○幼児の姿から

土プロジェクトでは，長い期間土と遊ぶ中で，繰り返したり，試したり，発見したりする姿が見られた。土の色の違いや土の性質によって固まりやすいものと固まりにくいものがあること，水の量の違いによって土の性質が変化すること。土は混ぜるともちもちの感触になることなど沢山の気づきや発見があった。

虫・種プロジェクトについては，長い期間関わることで，興味・関心から探究心へと高まり，経験を生かし，予測して関わる姿が見られるようになった。

○教師の姿から

プロジェクトの遊びについて，教師自身も知識のないこともあったが，幼児と共に試し，繰り返す中で多くの学びがあった。エピソード記録や事例の作成から，その子への資質・能力の育ちを振り返ることや環境の構成や教師の関わりについて振り返ることができた。



【土プロジェクトでさらさらの土を使ってケーキや団子などを試しながらつくる年中児】



【虫プロジェクトで生き物の説明をする年長児】

【今後の改善点】

○エピソード記録と事例については，現在Ⅰ期（4月～5月）Ⅱ期（6月から7月）について作成している。今後もさらに保育実践を重ね，記録をとりながらⅢ期（9月～10月）からⅤ期（1月～3月）についても作成・考察し，幼児の育ちや教師の援助，環境の構成を振り返る評価の手立てとして活用し，検証・改善を重ねていく。

（43. 福岡教育大学附属幼稚園）

○ 附属間・大学との連携（職員）1

実施時期・回数	入学当初	主な対象	教師
---------	------	------	----

小学校の教員との研修

【実施の方法・実施状況】

- ① 幼稚園から入学した子供たちが、新しい環境の中でどのように過ごしているのか、入学1週目～2週目の1年生の様子を観察した。子供たちが自分の力を発揮していると思われる場面や、授業中に見られた教師の指導の工夫について記録し、場面につながる幼稚園での先行経験を考察した。観察の場面は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の、「健康な心と体」「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力の芽生え」につながる姿を中心に記録することで、協議がしやすくなるようにした。
- ② 観察した中で気付いたことや、事例の内容について、小学校教員と意見交換した。入学当初に必要な配慮や、授業の組み立ての工夫について情報共有した。
- ③ 収集した事例について、幼稚園でどのような経験の積み重ねが必要なのか、5歳児だけでなく、幼稚園入園当初の体験から考察していくことにした。また、幼稚園での経験がどのように小学校生活へつながっていくのか再整理した。

【実施後の効果】

〈小学校側〉

- ・子供たちの様子を幼稚園側の視点から聞くことで、小学校教員とすると「できて当たり前」と捉えがちな姿であっても、そこに至るまでの体験の積み重ねがあることがよく分かった。小学校での生活は、幼稚園での学びが活かされているからこそ成り立つことに気付かされた。
- ・入学当初の生活の組立や授業の流れなどは、各担任に任せられている部分が多いが、意見交換することで、大切にしたいポイントが明確になり、工夫のヒントを得た。

〈幼稚園側〉

- ・小学校入学当初の様子を再整理することで、それぞれの力が5歳児後半だけで身に付いたのではなく、幼稚園入園時からの体験が全てつながっていることが視覚的に捉えられた。経験の積み重ねの重要性について、園内でも再確認する機会となった。

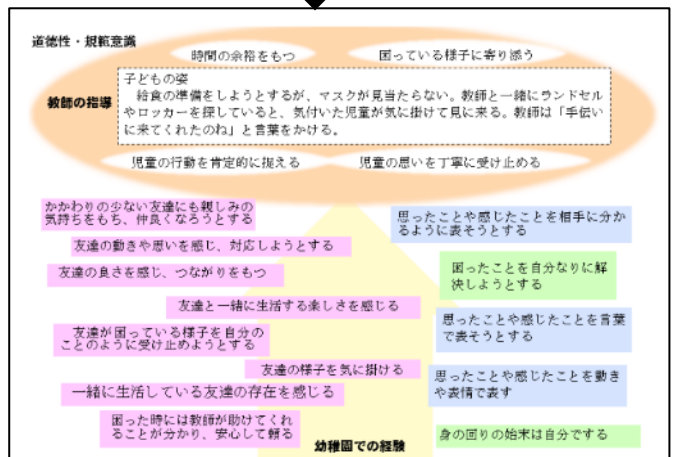
【今後の改善点】

- 現段階の連携の取組は、1年生担任教員や、生活科担当の教員とのやりとりが中心となっている。合同研修会等の機会を活用し、小学校全体に連携の必要性を広げていく必要がある。
- 今年度は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10の項目のうち、3項目に絞って記録をとったが、今後は、他の視点からも子供たちの姿を捉え、小学校教員と情報交換することで、子供の育ちをより細やかに捉え、共有していく。
- これらの取組を、来年度以降も継続し深めることで、よりよい連携へつなげていく。

記録した事例（道徳性・規範意識の芽生え）

<p>小学校での場面（4/16 給食の準備時） 道徳性・規範意識の芽生え</p> <p>・給食の準備をしていると、「マスクがない」「歯ブラシがない」と袋の中やランドセルの中を探す姿がある。ある児童は「歯ブラシがない」とロッカーに行き、探している。その様子に気付いた教師はその児童の近くに行く。「どうしたの？」と声を掛け、一緒に探している。そこへ、数人の児童が様子を見に来る。教師はどの児童らに「手伝いに来てくれたのね」と言い、一緒に席に戻るよう促す。</p>	<p>幼稚園での姿や経験</p> <p>・思ったことや感じたことを言葉に表したり、それを相手に分かるように伝えたりしていた。</p> <p>・友達の様子に気付き、気に掛けた時、心配に思ったりしていた。</p>	<p>教師のかかわり</p> <p>・教師が児童の思いを丁寧に受け止めていたことで、児童が納得して次にすることに気持ちを切り替え、取り組むことができた。</p> <p>・教師が困っている児童の様子に気付き、そこに来た児童に対して肯定的に共感していたことで、教師に受け止めてもらった安心感を得ることができた。</p>
---	--	---

再整理した物



○ 附属間・大学との連携（職員）2

実施時期・回数	毎週	主な対象	教師
幼小中全体研修・園内研修			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① 幼小中全体研修</p> <p>平成29年度から附属長岡校園として文部科学省研究開発指定を受け、「新領域『いのち』を中心とした各教科・領域横断型の幼小中一貫カリキュラム」の研究を進めている。求める子供を「意味や本質を問い、納得解や最適解を求め続ける子供」とし、「認知的側面」「社会的側面」「実践的側面」それぞれの側面から目指す資質・能力を設定することとした。本研究の推進に向けて、毎月1回のペースで、幼小中全体研修を行っている。育みたい資質・能力、育む方法等について検討し、共通理解をする場としている。</p> <p>② 園内研修</p> <p>幼小中全体研修で話し合われた研究の方向を踏まえ、幼稚園としての育みたい資質・能力、保育方法等を検討する。資質・能力については、小学校との接続を見据えて3歳児、4歳児、5歳児のそれぞれを段階的に設定する。</p> <p>その上で、年6回（各学級連続した2週にわたり2回）の保育研究会を行う。その際、大学の幼児教育にかかわる先生を共同研究者として招聘し、ビデオ（CAVScene）を用いて抽出児の遊びの様子を全職員で共有して保育カンファレンスを行う。また、普段から各学級・各担任・副担任の課題を見だし、改善に向けた継続的な実践を行っている。これら園内研修での知見をもとに、日々の保育や指導計画、教育課程を見直している。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○ 各教科、各学年において「認知的側面」「社会的側面」「実践的側面」から育みたい資質・能力が段階性をもって描かれ、共通理解して教育活動に当たるため、12年間を見通した今の計画を立て、実践することができてきている。</p> <p>○ 保育カンファレンスを通して、子供の遊びの中でどのような願いや問いをもちどう深めていったのか、教師はどのようにかかわるとよかったのか等を検討した。一人一人の子供の理解を深めながら環境づくりや援助の方策を見いだしていくという職員の専門性を高めることにつながった。また、指導計画に反映させることができた。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○ 園内研修の成果と課題を、幼稚園教育の指導計画、教育課程の見直し・改善につなげるとともに幼小中一貫カリキュラム、特に幼小接続期カリキュラムの見直し・改善を図ることができるようにする。</p> <p>○ 幼小中全体研修の内容の向上とそれを通じた各段階の子供の成長に寄与できるように、研修組織・方法を見直し、園内研の質を上げる。</p>			

(17. 新潟大学教育学部附属幼稚園)

○ 附属間・大学との連携（職員）3

実施時期・回数	毎月	主な対象	小学校・中学校教師
---------	----	------	-----------

幼・小・中一貫した12年間の教育課程の作成

【実施の方法・実施状況】

① 幼小中一貫教育運営委員会の実施

・幼小中一貫教育推進委員会において基本的な方向や推進状況を定期的に検討や確認をしながら、幼稚園における教育課程について、これまでの保育実践で得られた成果をカリキュラム・マネジメントの視点に基づいて編成した教育課程を試行実施し、実践研究を進めてきた。



② 幼小中合同職員研究会の実施

・幼小中の学校種を越えて保育や授業実践の参観と意見交換を重ね、幼稚園における子供たちの遊びの姿から見える学びをどのように援助するのかという視点から教育課程の改善の検討を行った。さらには、幼稚園の学びの姿を小学校低学年の「学びの領域」にどのようにつないでいくのかについて、幼稚園と小学校の教員合同で授業研究を積み重ね教育課程の改善を進めてきた。



③ 幼小接続部会の実施

・幼小接続部会が設置され、幼稚園の遊びを基にしたゆるやかな学び方のフレームを基に小学校の授業も転換していくこととなり、お互いの保育や授業の子供たちの学び方や資質能力の視点から子供を語り、学びを支える支援や援助を考え抜いていくことにつながっている。

【実施後の効果】

○ 小学校の理解向上

・「幼稚園は、ただ遊んでいる」と、園児の学びについて理解されないことがあったが、幼稚園の保育を「資質能力」と「遊びの中の学び」という視点で子供の遊びを参観することを通して、子どもの学びを共有することで、幼稚園での「遊びを通して何を学んでいるのか」「子供の思いや願いを支える援助」などを理解し、授業の中で遊びを大切にしたり、幼稚園の学びを引き継ごうとする実践が見られるようになってきた。

○ 中学校の理解の向上

・中学校職員の評価アンケートには、「幼稚園の子供たちの学びを自分の教科の学びにつなげる等、視点を広げることができた」「12年間のスパンで子供の成長を考えるようになった」等、子供の学びを捉える視点の変化を示す声が見受けられるようになった。

○ 保護者の理解の向上

・アンケート調査では、「子供発の創造的な遊びを引き出すのに、こんなに成功している園はなかなか無いと思います。年長になってじわじわと良さを実感しています」「全校をあげて、様々な取組をされていることに感心します」等、多くの保護者に教育課程への理解をいただいている。

【今後の改善点】

○幼稚園の子供の姿をさらに伸ばすために小・中学校の領域や教科の改定を行っているが、幼稚園も遊びの中の学びのプロセスや資質・能力の育成を意識し、質の高い保育の実現に努めていくこと。

○本三校園で大切にしたい資質能力「自己表現力、課題解決力、社会参画力」の三つの窓口を意識しながら、さらに子供たちの願いや思いに寄り添う保育を実践しながら、さらなる教育課程の改善を図っていききたい。

(21. 信州大学教育学部附属幼稚園)

○ 附属間・大学との連携（職員）4

実施時期・回数	随時	主な対象	教師，子供，保護者
---------	----	------	-----------

小学校との連携研究

【実施の方法・実施状況】

- ① 学びを捉える「10視点カリキュラム」を資質・能力のフィルターを通して再整理し、「資質・能力カリキュラム」を編成した。
- ② 幼稚園と小学校の教師と一緒に子供の事実を基に協議し、54の資質・能力全てに定義をおいた。
- ③ 満3歳と幼稚園修了後の資質・能力の育ちの姿を明らかにする取組を進めている。

神戸大学附属幼稚園・小学校 資質・能力の定義（平成30年9月現在）

【資質・能力のまとまり】 定義	資質・能力	資質・能力の定義		
【自分の生き方】 様々なかかわり合いの中で、自分を見つめ、したいことやすべきことを自分で決め、よりよい生き方を目標とすること	自ら決める・選ぶ	興味・関心をもったり、目的や目標を定めたりして、その実現に向けて見直しをもち、やり遂げようとする		
	自分に満足する	自分の成長を自覚し、自らの価値に気付く		
	気持ちをコントロールする	よりよい方向に向けて、自分の気持ちに折り合いをつけようとする		
	よりよい自分に向かう	よりよい方向に向けて、した方がよいと思うことをしようとする		
	【人とのつながり】 人とかかわることを通して、他者の思いや考えに気づき、よりよい関係をつくろうとする	他者という喜びを感じる	他者とかわる心地よさや嬉しさ、よさを感じてつながりを大切にしようとする	
		他者のことを知る	他者に関心をもち、思いや考え、個性を認めようとする	
		自分のことを伝える	相手にわかるように、自分の思いや考えを行動や言葉で伝えようとする	
		他者のことを考えて行動する	他者に寄り添い、相手にとってよいと思うことをしようとする	
		他者を賞賛する	他者のよさや頑張りや付いき、ほめ讃えようとする	
		人と協力・共同する	人と共通の目的や目標に向かって、自分のできることをしようとする	
人とものごとをすすめる	人と共通の目的や目標に向かって、見直しをもち、必要なことを決めたり、互いの役割を認識しながら責任を果たそうとしたりする			
【心身の健康を保つ】 心身の成長や変化、周囲の状況に気づき、安心して健康な生活をつくる	心の健康を保つ	自分の心の居場所を探り、安心しようとする		
	体の健康を保つ	健康の保持・増進に関心を持ち、必要なことを考え、自分ができることをしようとする		
	身を守る	自分の状態や周囲の状況に気づき、安全について考え行動しようとする		
	身体を操作する	運動の特性に応じた身体の使い方をしようとする		
	【人と自然とのあり方みつめる】 豊かな自然体験を通して、その美しさや不思議さに触れる中で、自然や生命に対する理解を深め、望ましい自然観・生命観を養う	自然環境をみつめる	空や雲、土、天体など、自然環境の美しさや不思議さに触れる中で、自然に対する理解を深める	
		生き物・いのちをみつめる	生き物の美しさや不思議さに触れる中で、生命に対する理解を深める	
	【事象を科学的にとらえる】 ものがもつ性質やものやこと同士の関係のなかで起こる現象に対して、科学的に分析・思考しながら法則を見いだす	事物を科学的にとらえる	科学的に分析・思考しながら、性質や特徴を見いだす	
		現象を科学的にとらえる	科学的に分析・思考しながら、ものやこと同士の関係性をとらえる	
		【感動を表現する】 思いや世界観が表現されているもののよさを感じたり、イメージをふくらませ自分らしく表現することを楽しんだりしながら、豊かな感性を養う	造形に表す	色や形、素材の生かされ方のよさを感じたり、それらを使って表現しようとしたりする
			音楽に表す	音の響き、リズム、テンポやメロディーのよさを感じたり、それらを使って表現しようとしたりする
文芸に表す			話の展開や内容、言葉のよさを感じたり、それらを使って表現しようとしたりする	
身体の動きに表す			動作や表情、声の調子などのよさを感じたり、それらを使って表現しようとしたりする	
演出に表す	配役や場のとり方、プログラムの順序などのよさを感じたり、それらを使って表現しようとしたりする			
【言語を適切に活用する】 文字言語や音声言語を獲得し、思いや考えを適切に伝えようとする	言葉・語句を適切に活用する	言葉・語句を豊富に獲得し、活用しようとする		
	文章の構成を整える	文章の構成を考えて、整えようとする		
	言葉を適切に書く	文字を正しくとらえ、書こうとする		
【事象を数理的にとらえる】 数・量や図形、場を対象とした思考を通して、身の回りの事象を分析的に判断しようとする	形を数理的にとらえる	図形を対象とした思考を通して、身の回りの事象を分析的に判断しようとする		
	数・量を数理的にとらえる	数・量を対象とした思考を通して、身の回りの事象を分析的に判断しようとする		
	空間を数理的にとらえる	場を対象とした思考を通して、身の回りの事象を分析的に判断しようとする		
【くらしをつくる】 くらしを豊かにするための要素や方法について考え、取り組もうとする	食をみつめる	食べることの楽しさや有難さを感じたり、様々な食文化について知り、取り入れたりする		
	衣類を整える	衣類の役割や衣文化について知り、心地よく整えたり、場や状況に合った着用をししたりする		
	道具をあやつる	目的に合った物を選び、適切に使うこととする		
	住空間を整える	快適で心地よい生活空間を知り、整える		
	財を活用する	売買の仕組みやサービスについて知り、お金を適切に扱う		
	多様な文化を尊重する	自国の文化や他国の文化のよさや互いの文化の違いを知り、認めようとする		
	公共施設とつながりをもつ	公共施設の役割を知り、自分のかかわり方を考える		
	資源の活用をみつめる	限りあるものの適切な使い方や使う量を考え、大切に扱おうとする		
	過去とのつながりをとらえる	社会や文化の発展を歴史の流れとのかかわりで見たりする		
	土地の特色をとらえる	日本や世界の地域の諸事象を位置や空間的な広がりとかかわりで見たりする		
【論理的思考力】 ものごとを整理し、順序よく考える力	平和を求める	争いや差別の原因を探り、人とかかわり方を考える		
	メディアを活用する	情報媒体を用いて、思考・判断に必要な情報を収集し、記録・発信するために使おうとする		
	【問題解決力】 問題を見出し、解決方法を導き出し、実行する力	比較する	対象と視点を明確にしながら、差異点や共通点を見つけ出す	
		関連付ける	対象と視点を明確にしながら、その間にあるつながりを見つけ出す	
		総合する	比較したり関連付けたりしたことをもとに、考えをまとめる	
		再構成する	自分の知識や考えを、より妥当性の高いものに更新する	
		推論する	比較・関連付けして得られた明確な根拠をもとに、何らかの考えにいたる	
		論点を抽出する	話の中心になるところを探り、目的に応じて絞り込み、確定する	
	批判的に考える	思考・判断に必要な情報の確かさを疑う		
	自分を客観的に把握する	自分のことについて自分自身が気づく		
問題を認識する	ある目的を達成するための問いを生む			
豊かに発想し、追求の手立てを構想する	ある目的を達成するための方法を直感的・論理的に考え、最適な考えを選ぶ			
実行をもち、その結果をもとに判断をくだす	実行をもち、目的が達成されたかどうかその過程が適切であったかどうかを評価する			

【実施後の効果】

- 幼稚園と小学校のカリキュラムの接続が実現し、幼稚園の教師と保護者に加えて、小学校の教師と保護者も、同じ資質・能力の「ものさし」で子供の育ちの姿を捉えるようになり、本校園における学校教育において育みたい資質・能力が明確になった。
- 幼稚園と小学校の教師間で資質・能力の捉えの共有が進み、資質・能力の観点からの育ちの姿がより明確になってきた。

【今後の改善点】

- 研究開発学校として次期学習指導要領等の改訂に資するため、幼稚園教育要領が満3歳の子供も対象であることを踏まえ、本校園の54の資質・能力の観点から満3歳の育ちの姿も把握していく。

○ 附属間・大学との連携（職員）5

実施時期・回数	年間	主な対象	教師
チーム研究の成果をカリキュラム編成に生かす			
【実施の方法・実施状況】			
<p>①「個別の支援を要する幼児に対する保育のあり方」をテーマに、昨年度、実践・研究してきた「年中（学年）チーム」の成果を、園内で共有するとともに、プレゼンテーションソフトにまとめ、本園主催の公開講座や九附連の幼稚園部会場で発表。これを、「パイロット研究」に位置付けた。</p> <p>②「年中（学年）チーム」には、専門性の高い大学教員をメインアドバイザーとして迎えるとともに、附属特別支援学校からも指導者を招き、特別支援教育の園内研修とチームの保育実践に活用した。この成果は、支援を要する幼児の指導計画だけでなく、保育のユニバーサルデザイン化を図り、環境構成と援助のあり方を見直す「カリキュラムマネジメント」の大きな視点となった。</p> <p>③今年度、園内研究は、学年毎に3つの学年チームを編成し、大テーマのもと、担任の課題や子供の実態に応じた研究テーマを設定させ研究を進めている。1月の公開研でその成果を報告する。更に、論文または書籍による報告を目指す。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○教師の切実な課題は、日々の保育の中に存在している。そして教師は、その課題に向き合い克服への努力を惜しまない。この当たり前の教師の姿勢とエネルギーをそのまま「研究」として昇華させ、結実させ、汎化させようとするのが「チーム研究」である。実践や研究の成果が日々の保育に直接生かせることから、教師の研究へのモチベーションは極めて高く、全員が主体的に研究に取り組んでいる。</p> <p>○チーム研究のテーマは、教材研究、保育記録の取り方、環境の構成と援助と多様であるが、全てがカリキュラムの編成や見直し、保育力の向上に反映できるものである。</p> <p>○大学教員を「共同研究者」として迎えることで、「研究」としてのまとめ方の指導を仰ぐことができ、現場教師が「研究論文」を書く力量を身に付けることができる。それが目に見える実績として保育教師のキャリア形成に寄与することになる。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○大学教員とのマッチングが最大のポイントである。幼児教育の専門家でなければならないというわけではない。広く教育に関わる専門分野から人材を募り、幼児教育に興味を持ち、現場に深く関わる「チーム研究」に面白さを感じていただける人材を配置できるかどうかにかかっている。幼児教育の重要性を広く訴えるためには、外部に共同研究者や協力者を求めることも可能だと考える。</p> <p>○「働き方改革」の推進と園内研究の両立を図り、本園の公益性と保育力の向上を担保できる「研究のあり方」として試行した。教師の力量がカリキュラムの実行性を左右する。又、カリキュラム・マネジメントは人材育成と両輪を成すため、研究主任の強力なマネジメント力が必要である。</p>			



(47. 大分大学教育学部附属幼稚園)

○ 附属間・大学との連携（交流）1

実施時期・回数	年間	主な対象	幼児，保護者，教師
---------	----	------	-----------

大学，附属小・中学校との連携

【実施の方法・実施状況】

本園の附属学校園としての特色を生かし，大学，附属小・中学校と連携した取組の推進により，保育内容の充実を図るとともに，多様な方法により地域の教育財としての附属学校園の連携深化を図った。

① 5歳児が附属小学校1年生・生活科の学習で，合同でジャガイモを植え，育て，収穫し，いももちを一緒に作って食べるという取組を年間を通じて実施した。



【幼小合同いももち作り】

② 附属中学校の2年生が，幼児と一緒に遊んだり花を植えたりして交流する機会を設けた。中学生は家庭科「幼児の生活（と家族）」の実践場面という位置づけで実施した。



【学生・音楽読み聞かせ】



【中学生との花植え】

③ 教育大学音楽分野の学生がボランティアで幼児のための音楽読み聞かせ会を企画し，保育の時間に幼児が楽しめる演奏や読み聞かせの会を実施した。

④ 本園で特別な教育ニーズをもつ複数の幼児について，大学の特別支援教育分野の先生方と連携して定期的に幼児や所属学級の保育観察や幼児・保護者との面談や相談，アセスメントを行ってきた。

【実施後の効果】

- 地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつという内容に関して，この取組は継続することによって人間関係が深まり，共に楽しみ共感し合う体験をさせることができた。
- この取組について昨年度の保護者アンケートの結果，89%の保護者が「効果的である」と回答している。継続した取組で幼児が人と関わる楽しさを味わうなどの効果があったと推測する。
- 特別な教育ニーズをもつ幼児に関する大学の支援によって，幼児の対応に関する選択肢の広がりのもとより，保護者のもつ困り感を和らげたり共感したりする貴重な機会になっている。

【今後の改善点】

- 現状において，どの取組も教育課程に位置付けているが，取組による学びの成果がやや不明瞭と感ずる部分があった。一層教育効果を上げるため「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で取組を捉え直し，学びの成果の小学校への接続を記載するなど，教育課程の更なる改善を図る。
- 特別な教育ニーズをもつ幼児への対応は，他の幼児教育施設においても喫緊の課題であると考えられる。そこで，こうした取組を発信していくため，プライバシーに配慮しつつ他施設が参考にできる情報発信の方法・在り方を打ち出していく。
- 保護者アンケートの項目に，附属学校園連携による効果の具体を問うものを加えて検証する。

(1. 北海道教育大学附属旭川幼稚園)

○ 附属間・大学との連携（交流）2

実施時期・回数	年間	主な対象	教諭・保護者
4 校園交流事業			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① 今年度4月より4校園の研究部長が中心となり4校園研究協議会を組織し、その中で研究大会などの交流日常授業の交流、授業力向上セミナーの共催などが話し合った。</p> <p>② 授業力向上セミナーの共催では、「21世紀型学力」の育成をテーマに、今年度11月2日(金)に幼稚園と中学校が中心となって行い小学校と特別支援学校が共同研究者としてコメンテーターとして参加し、2月11日(土)には小学校と特別支援学校が中心となり、幼稚園と中学校が共同研究者としてコメンテーターとして参加し実施する。特に、幼稚園教育要領や新学習指導要領で触れられている幼小接続だけではなく今回の共催にあるように幼と中、小と特支とのつながりが今後重要となってくると考え附属4校園の特徴を生かし、このような組み合わせにしている。</p> <p>③ 北海道教育委員会との共催事業ということで、道南の公立小中学校などに案内をするとともに、幼稚園の保護者にも参観の声かけを行っている。当日の保育は情報端末を使った遊びの様子を公開した。年長の全ての保護者と附属小中学校・特別支援学校の先生方の他、多くの公立学校の先生に来ていただく良い機会となった。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○ 小中学校・大学の教員の方には、「幼稚園の保育を初めて見る事ができた」「幼稚園の『遊び』がわかった」などの意見をいただき、幼稚園教育についての理解を深める事ができた。</p> <p>○ 通年で行っている「21世紀型学力の育成」の一環として実施しており、それにより12年間を見通した情報活用能力育成カリキュラムの作成が行われた。</p> <p>○ ipadやOZBOTなど、情報端末の使用に抵抗感がなく、失敗してもリセットできるといった安心感から何事にもチャレンジしようとする場面が多く見られてきている。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○ 幼小中特別支援学校連携の連携をさらに綿密にしつつ、函館独自のカリキュラム開発を進めて育必要がある。</p> <p>○ 4校園の副校園長会も巻き込みながら、特別支援的要素を盛り込んだ12年間を見通したカリキュラム改善をしていく必要がある。</p>			



(2. 北海道教育大学附属函館幼稚園)

○ 附属間・大学との連携（交流）3

実施時期・回数	年間・不定期	主な対象	教師・幼児・児童
幼小連携の強化			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① 年長組担任（2名）と1年生担任(2名)が中心となり、幼小の連携の在り方や接続期カリキュラムの作成を目標に、互いの理解を深めていくことを確認し合った。夏休みまでに4回の協議を重ねた。その中で、小学校が入学までに必要な考える能力と「修了までに育ててほしい姿」にギャップがないかを確認したり、互いの理解を深める試みとして授業者交換授業を実施してみることを決めたりした。また、他県の事例を参考にしながら、富山大学附属幼稚園・小学校の接続期カリキュラム作成に迫った。</p> <p>② （子供同士の交流）幼稚園の子供たちが行事のポスター掲示の依頼に1年生の教室を訪ねたり、1年生のフェスティバルの遊びに招かれて一緒に遊んだりした。また、幼稚園の生活発表会での劇を観てもらったり、1年生の音楽発表会の合唱を聴いたりした。新しい試みとして給食交流も行った。幼稚園の子供たちにとって、小学校が身近な場所となり、1年生は憧れの対象となった。特に12月以降の交流は進学への楽しみが実感できた様子であった。</p> <p>③ （教師同士の交流）新しい試みとして、小学校教師が幼稚園で保育を、幼稚園教師が小学校で算数の授業を実践した。互いの保育や授業の中での配慮点を協議し合うことで、互いの子供の育ちに着目し、理解を進めていくきっかけとなった。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○ 子供たちは、回を重ねることで互い同士を少しずつ認識できるようになり、安心して関わり合えるようになっていった。会話が生まれたり、思いやりの姿が見られるようになっていき、心の成長が見られた。また、幼稚園の子供たちは小学校の教師に安心感をもてるようになっていき、徐々に表情が和らぎ、進学への期待感を高めていった。</p> <p>○ 教師は保育や授業を通して、互いの校種の子供の育ちに気付き、理解しようとする姿勢が生まれた。指導案の検討に年少組・年中組担任も関わることで、新しい気付きやカリキュラム編成に必要な内容検討にもつなげていくことができた。</p> <p>○ 保護者に対して、連携の状況を学年便りや学年懇談会を通して伝えることで、幼小連携の理解と協力をさらに得ることができた。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○ これから実際に幼小連携に関わるカリキュラムの実践・評価から改善を進めていく。</p> <p>○ 今年度できた接続カリキュラム試案を基に、今後も幼小の連携活動が持続していくように、互いに努力していく必要がある。互いの理解を深めていくための試みを、いろいろな視点から進め、内容を深めていくことが大切である。</p>			



(18. 富山大学人間発達科学部附属幼稚園)

○ 附属間・大学との連携（交流）4

実施時期・回数	5月・1回	主な対象	幼児，教師，大学教諭
---------	-------	------	------------

専門機関との連携（大学教員）

【実施の方法・実施状況】

5月の保育参加の機会に愛知教育大学保健体育講座の先生を講師として招き、隣接する小学校の体育館で学年ごとに親子で体を動かして遊ぶ機会をつくった。

- ・ 大学教員の指導のもと回転運動につながる準備運動を親子でした後、マットが敷き詰められた体育館全体を使ってマット遊びのサーキットをした。
- ・ リズミカルなBGMが流れ、自由感あふれる雰囲気の中、親子でマットで回転、舞台へのかけ上がり、高いところからの回転、ロープぶら下がり、鉄棒などを親子で繰り返し楽しんだ。
- ・ マットでの回転では前転、鉛筆転がり、後ろ回りなど自分のやってみたい回り方でそれぞれに遊び、全てのコーナーで動きを限定せずに自分のしたい動きにチャレンジした。
- ・ 幼児には難しいだろうと思われる体の動きも喜んで取り組み、繰り返し遊ぶうちに動きがダイナミックになり、短時間で目に見えてできるようになっていった。幼児自身もできるようになるうれしさを感じ「次はこうしてみたい」と目を輝かせて挑戦する姿が見られた。



【実施後の効果】

- “やってみたらできた”といううれしさから、幼稚園でも進んで体を動かして遊ぶようになるようになった。サーキットのコースを取り入れ、多様な動きを楽しめるような環境を意識してつくるようにした。
- 保護者アンケートからは「運動ができないという苦手意識は、運動経験が少ないだけである」という大学の先生の話が印象に残った。経験をすることとほめることを大事にしていきたい。」などの意見があり、家庭への体遊びに対する意識変化につながった。
- 体育教員の指導から、教師自身もたくさんの気づきや学びがあった。“繰り返し取り組むことの大切さ”“一つの動きに限定せずに子供自身がいろいろな動きを試していくこと”“ちょっと難しいことへの挑戦”“思わずやってみたくなるような環境”などの要素をその後の保育に取り入れた。
- 体を動かして遊ぶ幼児の姿から心の成長を見取り、教育課程を見直し改善した。(教育課程網掛部)
- 実施後、大学教員が幼稚園の様子を時々見に来てくれるようになり、幼児や幼稚園教諭との交流の機会が増えた。運動遊びの指導のポイントや環境の作り方について助言を求めやすくなった。



【今後の改善点】

- 幼児が遊びの中でどのように体を動かしているのか、捉える目をもつことが、適切な援助や環境づくりに生きると思われるので、大学教員から体の動きや運動についての専門知識を学び、幼児が多様な動きを経験できるようにする。

(24. 愛知教育大学附属幼稚園)

○ 附属間・大学との連携（交流）5

実施時期・回数	年間を通して	主な対象	教師
---------	--------	------	----

幼小接続・異校種交流の取組

【実施の方法・実施状況】

① 「幼小接続部会」による研究推進

研究組織に「幼小接続部会」を位置づけ、幼稚園教諭全員と小学校1・2年生の担任教諭で組織し、互いの授業・保育の参観やカンファレンス、協議等を通して、幼児理解を深めている。

例えば、小学校入学後まもなくの時期に幼稚園教諭が1年生の授業の様子や給食の様子を参観し、気づきを伝えたり、その



<幼稚園教諭による1年生の参観>

後、1年生担任が幼稚園での保育の様子を参観したりするなど、時間を見つけて子供の様子を参観し、互いの立場から気づきを交流して実践に生かしている。部会を開いて協議することに加えて、幼小接続部会内でのグループメールを利用して、気づきや感想・考えなどを即時に発信し、交流・共有する方法も取り入れている。

② 交流活動の実施

1年生と幼稚園年長組、4年生と年長組、8年生（中1）と年中組の交流や、幼小中合同運動会での幼稚園児と中学生が手をつないでの入場行進、8年生が考えた4年生・8年生・幼稚園児(年中・年長)によるダンス『おにいさん おねえさんといっしょ』などを幼・小・中のカリキュラムに位置づけ、計画的に実践している。



<おにいさんおねえさんといっしょ>

③ 三原版 幼小接続カリキュラムの充実

幼小接続部会を中心に幼小接続カリキュラムを作成し、実践しながら改善し、充実を図っている。研究開発指定に伴い、研究開発[光輝(かがやき)]の視点を生かした接続カリキュラムを構想し、作成に取りかかっているところである。

【実施後の効果】

○ 幼稚園教諭と小学校担任とが、子供の姿をもとに話し合い、発達段階に応じた働きかけや環境構成の大切さなどについて、具体的に学び合うことができている。また、幼稚園・小学校の状況を知ることにより相互理解が深まるとともに、子供の発達の連続性を再認識し、日々の実践に生かすことができている。気づきのやり取りの一部を以下に示す。

幼⇒小へ：A児が自分の思いを伝えきれず戸惑っている様子を伝え、幼稚園時の状況を話した。

幼稚園で服をたたむ時の様子を伝え、給食のエプロンを無造作に丸めて袋に入れている様子は、たたむ場所がないためではないかと伝え、改善策をともに検討した。

小⇒幼へ：園児が片づける様子を見て、自分たちでどんどん動く姿に驚いた。やれる力を持っていることを実感し、この力を小学校に繋げてどう生かすかを考える必要性を感じた。

○ 様々な交流活動により、幼・小・中のそれぞれの子供たちに、やさしさや憧れの気持ちが育ち、親密な関係ができ、学校園で共に育つという心情が育っている。

【今後の改善点】

○ 幼小接続や交流活動の意義を踏まえ、子供の実態に沿って柔軟に計画・実践を進めていく。

(37. 広島大学附属三原幼稚園)

○ 附属間・大学との連携（交流）6

実施時期・回数	12月 年1回	主な対象	園児・附属特別支援学校高等部
---------	---------	------	----------------

餅つき

【実施の方法・実施状況】

12月に行う餅つきに、園から車で20分ほど離れたところにある附属特別支援学校の高等部1年生に来てもらい、一緒に餅つきをし、餅を一緒に食べた後、サッカーや鬼ごっこなどをし、交流している。

餅つきでは、2臼のうちの1臼を附属特別支援学校の高等部1年生にほぼ仕上げまで搗いてもらい（もう1臼は保護者）、その続きを附属幼稚園の園児が搗いている。特別支援学校の生徒が餅を搗くときには、園児も一緒に掛け声をかけたり、力強い搗き方に見入ったりし、搗きあがると「ありがとう」とお礼を言うようにしている。一昨年度までは親子行事だったが、昨年度から園児のみとの交流とし、園児が心ゆくまで何度でも搗くことができるようにした。その後、できあがった餅を園児と特別支援学校の生徒と一緒に園庭で、あんこや黄粉、のり、醤油等と一緒に食べている。



【実施後の効果】

○附属特別支援学校は、大学の敷地内にあり、附属幼稚園とは離れている（車で20分程度）。そのため、日頃は交流する機会がほとんどなく、隣接する附属小中学校との交流が多くなる。年に1回、附属特別支援学校・小学校・中学校・幼稚園の園児児童生徒と保護者、教員で行っている「附属まつり」でも交流をしているが、ステージ発表を見るのが中心で、身近に接しての交流はできていなかった。餅つきに特別支援学校の生徒に来てもらい、手伝ってもらうことで、特別支援学校の生徒の得意とする餅つきの様子を見たり、一緒に食べたり、サッカーや鬼ごっこをすることで、特別支援学校の生徒への親しみや理解、交流が深まったと思われる。

【今後の改善点】

○餅つきを一緒にしたり、餅を一緒に食べたり、遊んだりすることを通して、特別な支援を要する子供への親しみは少しずつ感じるようになってきているが、そういう子供の特性を理解したり、ふさわしい接し方を知ったりすることが、まだ充分ではないと思われる。附属小学校・中学校には特別支援学級がなく、日頃、特別な支援を要する子供とかかわることがないため、このような機会を増やしたり、子供たちにわかるように話をしたりして、理解がより進むようにしたい。

(42. 高知大学教育学部附属幼稚園)

○ 附属間・大学との連携（交流）7

実施時期・回数	年間	主な対象	幼児・児童・生徒
幼小連携・幼中連携			

【実施の方法・実施状況】

①教師間の交流

- ・第1回幼小引継ぎ(4月) ・第2回幼小引継ぎ(6月)
- ・第3回幼小連絡会(8月)
- ・附小職員の幼稚園教育研究協議会への参加(10月)
- ・それぞれの教育活動の参観(11月)
- ・附幼職員の小学校研究発表会への参加(2月)
- ・第4回幼小連絡会(2月) ・引継ぎ(3月)



②子供間の交流

- ・小学校生活科授業への参加①(7月)
- ・小学校夏休み作品展見学(9月) ・給食試食会(10月) **【小学生との交流】**
- ・小学校生活科授業への参加②(10月) ・中学3年生との遊びの交流(11月)
- ・小学校縄跳び大会の見学(2月) ・小学校生活科授業への参加③(2月) ・小学校参観(2月)

③保護者の交流

- ・小学校栄養教諭による講話(10月) ・小学校教諭による入学前の準備についての講話(1月)



【給食試食会】



【中学生との交流】

【実施後の効果】

- 園児が小学校への抵抗感を失くすとともに、小学校への憧れを抱き、入学を楽しみにするようになる(小1プロブレムの解消)。保護者が、小学校入学に関しての不安がやわらいだ。
- 園児が初対面の様々な人々(小中学生)と関わることで「(5)社会生活とのかかわり」や「(9)言葉による伝え合い」「(10)豊かな感性」が育っていった。
- 教師がお互いの教育目標や教育方法の違いを理解することができた。

【今後の改善点】

- 本園のある地域の人々や、近隣の幼稚園や公立の小学校との連携には至っていない。
- 異校種間交流による園児への効果を科学的に検証する必要がある。

(45. 長崎大学教育学部附属幼稚園)

○ 現職教員研修1

実施時期・回数	1回	主な対象	小学校教師, 幼児教育関係者
---------	----	------	-------------------

小学校教育研究会での保育提案

【実施の方法・実施状況】

- ① 「幼小接続」を考えるに当たり小学校の先生方に幼稚園の保育について広く知ってもらい、本園の保育をより良い内容に改善できる機会を作ろうと、弘前市小学校生活科・総合的な学習教育研究会の一日研修会と共催で本園の研究保育を行った。
- ② 弘前市内の小学校教員32名、県内幼稚園教員7名、県教育委員会弘前市教育委員会3名、幼児教育に携わる大学関係者10名の参加があり、活発な意見交換が行われた。
- ③ 提案した保育での子供の様子を共有するために、写真を基に参観シートを作成してもらい、具体的な子供の姿や遊びを通した話し合いになるように配慮した。
- ④ 本園の研究や事例についての発表や講師の指導助言の中に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を提示し、話し合いの視点を明確にして、より深まった協議になるよう工夫した。



【実施後の効果】

- 小学校の先生方に実際の保育を見てもらい、「好きな遊びの時間」の中での環境構成や教師の援助について膝を交えて話し合うことができたことが良かった。
- 同じ遊びを見ても、小学校教員の捉え方と幼稚園教員の捉え方があり、意見交流する中で本園の教職員の視野がより広がった。
- 当日の感想から
 - ・講師の助言で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」があることを知り、年長児の育ちについての理解が深まった。
 - ・幼児教育の一人一人に対するきめ細やかな援助に対する考え方が大変参考になった。
 - ・まずは幼稚園での育ちを知ることが大事だと思った。など



【今後の改善点】

- 小学校の先生方からの感想を精査し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもう一度学び直し、教育課程の編成に生かしていきたい。
- 今後も「幼小接続」について小学校へ提案し続けるために、本園を含め幼稚園の保育実践を広く情報公開し、また継続的に一緒に学び合う機会を作り続けていくことが大切であるとする。

(3. 弘前大学教育学部附属幼稚園)

○ 現職教員研修2

実施時期・回数	5月, 6月, 11月, 2月	主な対象	教師, 学生, 公開研究会参加者
---------	-----------------	------	------------------

教員研修

【実施の方法・実施状況】

- ① 公開研究会や園内研究保育で行う保育の振り返りが, 保育を行った教員にとっても参観した教員にとっても学びが得られるようにするために, 保育を参観する際に使用するワークシート及び振り返りの仕方を工夫した。具体的には, 保育参観後の振り返りで協議する視点を示し, 参加者が保育参観後の協議の流れに沿って視点をもち, 思考しながら保育を参観できるようにワークシートを工夫した。
- ② 協議する視点は, 保育した教員や本園のカリキュラムマネジメントにも生かせるように, 指導案に記載されているねらいに応じて良かった環境の構成・教師の援助, 明日の保育に向けてさらにこうした方が良くと思う環境の構成・教師の援助とした。
- ③ 保育後の協議においては, 参観者が各々ワークシートに書いたものを付箋に書き, 模造紙にワークシートと同じ構成で貼り付けていく。同じ内容のものを集め, キーワードでまとめるようにした。【写真1】
- ④ 上記のやり方を公開研究会においても取り入れた。その際午後の年齢別分科会で4~5人のグループを作り, 話し合いながら自分の考えを述べながら付箋を貼り, グループでその日の保育参観で考えたことをまとめ, その後, 他のグループのまとめも見たり, 話を聞いたりして学びを深めた。



【写真1】

良かった 環境の構成	明日の 環境の構成
良かった 教師の援助	明日の 教師の援助

【ワークシート】



【実施後の効果】

- 保育を計画する際に, 幼児の姿, ねらい, 内容, 環境構成の関連性や教育課程, 指導計画, 週案, 日案という流れを意識し, 目の前の幼児の育ちや経験内容をどう捉え, 何をどのように学ぶことを目指すのか, また, そのためにはどのような環境の構成や教師の援助が有効であるかを総合的に考えて指導案を作成するという意識が強くなった。
- 公開研究会におけるアンケートで「年齢別分科会は参考になったか」の問いに「参考になった」との答えが100パーセントであり, 80パーセントの参加者が参考になった点について「幼児理解」と「環境の構成・教師の援助」という項目をあげていた。
- その後, 資質・能力を視点にして研究保育をし, 同じようにワークシートから付箋, そして模造紙でまとめるなど, 教師一人一人の考え方を見える化し, まとめることで新たな学びを得ることができた。

【今後の改善点】

- この方法を日々の保育の記録に取り入れ, 明日の保育計画に生かしていき, その記録を蓄積して, 指導計画などへの見直し・改善につなげる。その際, 意識的に10の姿の視点も入れていきたい。



(19. 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園)

○ 現職教員研修3

実施時期・回数	随時	主な対象	教師
教員研修会			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① 園内研修会 1学期には各クラスごとに行い、他クラス教員は自分の課題だと思いう時間（遊びの時間、給食の時間、降園時など）に参観し、保育後、幼児が主体的に生活するための環境構成や教師の援助について話し合う。2学期は全クラス同時に行い、大学教員から指導助言してもらう。園内研修会前には、幼児の姿や保育案について話し合い、保育後には実際の幼児の姿から、教育課程の見直しを行う。この園内研修会の事前事後の話し合いを大切にしている。</p> <p>② 研究協力員会議 本園の研究に大学教員、公私立幼稚園、こども園、保育所、小学校の教員に協力いただいている。年間3回程度、本園の研究について一緒に学び合ったり、意見を交換したりする機会を設けている。</p> <p>③ 保育カステップアップ研修会 年間2～3回、各教員が学びたい課題を設定し、地域の幼児教育関係者と一緒に学び合う。1回で終わるのではなく、話し合った内容を各園に持ち帰り実践し、その結果を2回目に持ち寄り、再度研修を行う。</p> <p>④ 共同研究集会 近隣の学校（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校）と一緒に、主体性について研究を進めた。また、互いの教育内容をポスターにまとめ、ポスターセッションを行った。本園は研究や行事の取組についてドキュメンテーションにまとめ発表した。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○園内研修会では新しい教員が着任したり、新しいクラスを担当する中で、悩んだり課題だと感じている場面を見合うことで、各教員が自分の保育を見直す機会となった。また、話し合いの中で、幼児の姿の読み取り方や幼児理解について研鑽を積むことができた。1学期にこのような機会を多くもつことは、園の目指す子供像を共通理解することにもつながったと感じる。</p> <p>○研究協力員会議ではいろいろな校種や施設の教員と一緒に研究を進めることで、違った立場からの意見をもらえ、保育をする上での視野が広がったり、教育課程が社会に開かれていくことにつながったと感じる。</p> <p>○「保育カステップアップ研修会」では他の幼児教育関係者と一緒に学ぶことで、他園の取り組みを知る機会となったり、保育を見直すきっかけとなったりした。1回で終わる研修ではなく継続することにより、研修内容を実践し、評価、改善することにつながった。また、この研修会を各担任がファシリテーターとして進めることにより、教員の意識が高まり、ミドルリーダーが育つことにつながったと感じる。</p> <p>○他校種と一緒にいった研修会では、本園の研究内容や行事の取組を発表したが、ポスターをつくる過程が保育を見直す機会となった。また、他校種の発表を見ることにより、先を見通した教育課程についても考える機会となった。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○園内研修会は他の行事との関係上、互いの保育を見合うのが各クラス1回ずつとなってしまった。2学期、3学期にもこのような機会を設けられるよう、年間計画を見直したい。</p> <p>○自園だけでなく他園、他校種の教員とも一緒に研修をすることは、教員の視野を広げ、保育の質を向上していくためにも有効であると考え。幼児教育施設が多様化する中、さらに他施設の教員や小学校以降の教員とも一緒に学び合う必要を感じる。</p> <p>○教員研修については学校教育関係者で行うことが多くなってしまったが、次年度は地域の方や異業種の方とも一緒に研修を模索していきたい。</p>			



○ 現職教員研修4

実施時期・回数	年数回	主な対象	教師
県教育委員会との連携・教職員の研修			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① 年度当初に県教育委員会及び福祉保健部が募集する「幼保一体化に向けた幼児教育・保育相互理解研修事業」で研修生の受け入れを希望し、受入の条件として受入可能日と受入可能時間、受入可能人数を申出る。</p>			
<p>② 県の受入決定通知書に基づき、研修計画を立てる。</p>			
<p>③ 教職員で当日の保育のねらいや環境について話し合う。</p>			
<p>④ 研修を実施する。(オリエンテーション・保育参加・説明・協議)</p>			
<p>⑤ 教職員で研修の様子、参加者の感想等を共有する。</p>			
<p>⑥ 研修受入施設として、研修実施結果報告を県へ提出する。</p>			
<p>⑦ 年度末に、参加者から研修実施結果が届く。</p>			
<p>⑧ その結果を共有し、振り返りと次年度の受入について協議をする。</p>			
【実施後の効果】			
<p>○ 保育参観ではなく保育参加型の研修のため、担任は、その場で参加者からの質問に答えたり、環境の構成の工夫などについても説明することもあり、保育のねらいや援助の方向をきちんと持っていないと対応できない。そのため、保育の振り返りや環境の構成にいつも以上に向き合うことになり、結果的に保育の充実、指導力の向上につながっている。</p>			
<p>○ 研究主任を中心に、園の教育方針やカリキュラムの特色、研究実践について、参加者に分かりやすく説明するため、プレゼンテーションとしてまとめたり資料を作成したりすることが、これまでの保育や研究の振り返りをするにもつながっている。</p>			
<p>○ 協議の中で、既存の研究紀要やリーフレット、パワーポイントなども活用した。県内の他園の幼稚園や保育所には継続した研究成果物がないことが多い現状から、いかに本園の教育を可視化するか、今後の情報発信、成果発信の充実に向けて振り返る機会となっている。</p>			
<p>○ 参加者からの感想や質問は評価でもあるととらえ、教師の保育改善につながる意識が高まる。</p>			
【今後の改善点】			
<p>○ 現在は、研究主任と副園長が説明や協議に参加している。研究主任だけでなく、他の教員も説明する役を順番に担当すると、自園の実践や研究についてより深く理解することができるとともに、プレゼンテーション能力も高まると思われる。</p>			
<p>○ 研修を受け入れることが、保育実践の振り返りや環境の構成、教師の援助の見直しなどに、さらには指導計画や教育課程の改善につながるよう、研修の進め方・内容を工夫していきたい。</p>			
<p>○ 本園では、事例の研修以外にも、新規採用幼稚園等教員研修など県教育委員会が主催する研修を積極的に受け入れ、取組や研究実践を発表する場としている。今後は、小学校教員や管理職等の研修の場として本園を活用してもらえよう、県教育委員会に働きかけたい。</p>			

(33. 鳥取大学附属幼稚園)

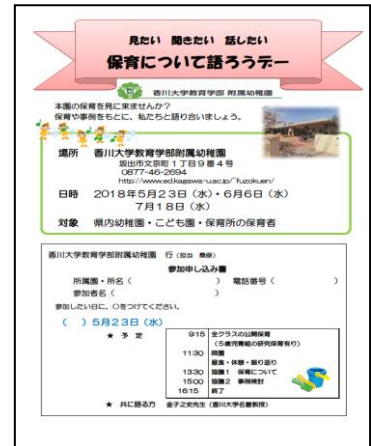
○ 現職教員研修5

実施時期・回数	年3回	主な対象	保育者・地域の保育者
---------	-----	------	------------

保育について語ろうデー

【実施の方法・実施状況】

- ① 普段通りの子供の姿や遊びの様子が公開できるように、20名程度の参観者へ、保育（午前）を公開する。
- ② 保育終了後、参観者に、心に残った場面や疑問に残った場面、自園と異なっていると感じる場面や話したい場面と、その理由を付箋に記入してもらい、ホワイトボードに示す。本園の職員は、焦点を絞って保育説明を行ったり、ニーズに合った討議の柱を決めたりできるように付箋の内容を把握しておく。
- ③ 互いの子供観や園の保育観を交流し合いながら、幼児期にふさわしい生活づくりへの考えを深める討議をする。
- ④ 参観者には、振り返りアンケートとともに、半年後、自分の保育で変容したこと等の追跡調査を行う。
- ⑤ 園内では、討議ののった場面や姿について、再度議論し、自分たちの保育によって子供たちに何が育っているのかを捉え直したり、私たちにできるさらなる関わりを追求したりする。



【実施後の効果】

- 参観者アンケートより
 - ・ 附属幼稚園の先生方は禁止をしたことがあるのかなと思った。保育のねらいや意図がきちんとあるので、自信をもってかかわっていると思った。
 - ・ 附属幼稚園の先生方はそれぞれ少しずつ考えは違っているけれど、同じ方向に向いている感じがした。そして、何より子供のたちの姿や思い、ありのままの表現を、保育者全員が楽しんでいた。
- 本園の保育者の振り返りより
 - ・ 本園の保育や子供たちの姿の面白さを改めて感じ、大切に保育をしたいと思った。
 - ・ 他園の保育者の評価から、保育に自信や意欲が生まれ、本気で遊ぶことや今を大切にすることにつながっている。
 - ・ 他園の現状と比較することで、本園の特徴が分かった。討議や討議後の園内での振り返りの中で、何を大切にしているか、全職員が自分の言葉で説明し共通理解する機会があったことがよかった。

【今後の改善点】

- 子供が、今楽しみたいと思っていることや楽しんでいることを制限することなく、よりよい方向へ広げていく保育の具現化。
- そのような保育への転換の重要性を地域に発信していくこと。

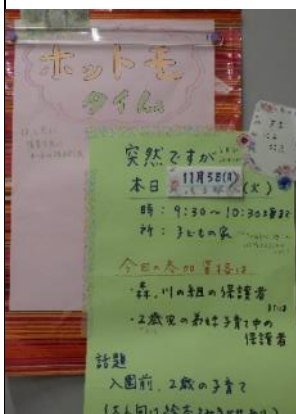
○ 子育て支援1

実施時期・回数	不定期・2回実施	主な対象	保護者
---------	----------	------	-----

保護者懇談会『ホットモタイム』の新規実施

【実施の方法・実施状況】

① 副園長と有志保護者が「子どもの家」という園庭内の建物内、和室に集い約1時間の懇話会を新たに実施した。『ホットモタイム』の名称は、“保育を共に” “ホットに語り合う友”等の思いを込めて命名したものである。



② 実施日当日朝に登園口に掲示案内し、不定期で開催。話題は「入園前、2歳の子育て」とし、参加対象は「3歳児学級の保護者」または「2歳児の弟妹の子育て中の保護者」の中で、先着10名程度とした。弟妹の同伴は自由。3歳児保護者が7・8人、2歳児子育て中の保護者が2・3人、同伴の弟妹は5・6名が参加した。

③ 大人向け絵本読み聞かせから始め、2歳の子育てはどんなだったか、2歳の頃の好きなモノ・ヒト・コトは何、どんな悩みがあり、誰に相談していたか、の3つの視点で話してもらった。

【実施後の効果】

○研究開発学校の取組で、入園前の子供の育ちの実態を踏まえた教育課程改善に取り組むことを伝え、協力をお願いした。幼稚園の研究に貢献できるという保護者自身の自己有用観と、幼稚園が保護者の話を聞く時間を設ける子育てサポートと、園と保護者が互恵的に連携する時間となった。

○導入に大人向け絵本の読み聞かせをしたことで、心が動き、自分から話しをしやすい雰囲気が出た。また、入園以前の子育てについて語るというテーマ設定だったことで、現在の悩みを語るよりも率直に話しやすく、話しているうちに現在の子供の育ちに気がつくという効果があったようだった。

○10人程度の人数は輪になって話がしやすく、1時間でも十分に話しができた。また懇話会を終わってからも、話しが自然に続く雰囲気になっていた。園庭の片隅にある「子どもの家」は子供たちが遊ぶ声が聞こえつつ、参加した弟妹も一緒に落ち着いていられる空間で、設定する環境も重要だと確認できた。

【今後の改善点】

○研究開発学校の取組の一つとして、2歳児の子育てについてのアンケート実施を予定している。記録をしっかりと残し、懇話会の内容を踏まえてアンケート作成を進めていく。

○教育課程や保育計画の柔軟な運営方針に則り、懇話会も当日勧誘で実施してみた。「参加しなくちゃいけない?」「参加した方がいい?」から、「今日は可能だから参加してみよう」「この次は行ってみようか」というように、保護者の主体性を尊重した緩やかな参加を継続し、新たな家庭との連携体制を築いていきたい。

(15. お茶の水女子大学附属幼稚園)

○ 情報共有（個人）1

実施時期・回数	年3回（学期毎）	主な対象	教師，保護者
---------	----------	------	--------

「ポートフォリオ」（個人用）

【実施の方法・実施状況】

本園では、個の「遊び」を見つめ、その多様な育ちのあり方を実際の記録で説明するために、右図のものを作成している。本園では、これを「ポートフォリオ」と呼んでいる。



- ① 子供たちの園での様子を分かりやすく伝えるため、学期毎に写真と文章で構成した個の遊びの記録をA4 1枚にフルカラーで発行している。
- ② 保護者に伝わりやすいように、写真にどんな遊びをしているところかを明記したり、その時の様子や子供の発言などを簡単に説明したりして、保護者が楽しく見ることができるよう工夫している。
- ③ 遊びの様子は月毎に時系列で掲載し、子供の遊びがどのように繋がっていったか、また、どのように広がっていったかが捉えやすくしている。さらに、年間を通して見比べることによって子供の遊びの変化が分かるように写真の説明などの文章も工夫を行っている。

【実施後の効果】

- 配布した時の保護者からの反響は大きく、我が子の園での様子がよく分かったと担任へ連絡があり、楽しみにされている。
- 子供から聞くだけでは分からなかった遊びや園生活の様子が、写真をみることで分かるので、その後の担任との話題や親子での話題に繋がっている。
- 同じ遊びでも発展していることが写真や文章を通してわかり、子供たちの成長の様子を捉えやすくなった。
- 学期毎の「ポートフォリオ」を見比べることによって、遊びの発展や友人関係の広がりなど、多様な育ちの様子が捉えやすい。
- 教師側も、「ポートフォリオ」を作成することで子供の様子を振り返り、子供の遊びや育ちを整理して捉え、その後のかかわり方に生かすやすくなった。
- 年長児は、進学先の小学校との引き継ぎの資料としての活用もできる。

【今後の改善点】

- 現段階では、子供のありのままの姿を伝えることにしているが、今後は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をより意識して、「ポートフォリオ」を作成していきたい。
- これまでは、担任が保護者に伝えるという意図で作成していたが、今後はそれぞれの学年で見せ合うなどして、教師間で子供の様子を共有できるようにしたい。

○ 情報発信 1

実施時期・回数	通年・毎日	主な対象	保護者・地域・保育者・教育関係者
SNSを活用した幼児教育の発信			
【実施の方法・実施状況】			
<p>① ねらい：共働き世帯の増加等，本園及び地域の実態に即応するため，「見える化」を核に，SNS（facebook）を活用する取組を行う。業務改善も視野に入れ，ねらいを構造化し，園組織マネジメントとカリキュラム・マネジメントを絡め，組織的・計画的に教育活動の質向上を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 保護者への発信 子供の成長の共有，教育内容の理解推進，園の努力等のアピール ○ 地域への発信 幼児教育の理解推進，情報提供 ○ 教員の発信力向上 子供の姿の意味付け・マネジメントの方向性共有 ○ 大学・附属学校への発信 幼児期の学びの捉え共有，発達段階への理解推進 ○ 教育関係者への発信 全国の幼児教育関係者と情報共有，成果の発信，意見交換 <p>② 具体的な方法：誰が（主に副園長及び担任），いつ（可能な限り毎日），どのように（日々の保育の中で，子供の心の揺れ動きや教育の意図がわかるような写真を撮影。個人情報への配慮を吟味し，投稿写真を選定。タイトル，子供のつぶやきや反応，教員の意図や支援，エピソードへの意味付け等を短い文で記載。）</p> <p>② 実施状況：投稿数は，3か月で165。1日平均1.8投稿（週休日も含む）。写真，動画，スライドショー等，視覚的な効果を生かし，子供の姿で教育活動の意味を分かりやすく発信している。</p>			
【実施後の効果】			
<ul style="list-style-type: none"> ○ 3ヶ月でリーチ数約4万，エンゲージメント率は徐々に高くなり，11月平均38%となっている。 ○ facebookの投稿は，ホームページにも同時に掲載され，全ての保護者及び家族が園の教育活動の様子を知ることができる。即日発信ができるため，今日の活動の様子を全ての保護者に提供でき，継続が「信頼と理解の蓄積」となる効果を実感している。 ○ 子育て広場の開放等，地域への貢献・家庭教育支援をねらいとした取組を地域に広く紹介できる。様々な地域の方々も園の情報を得て，来園することが増加している。 ○ 経験値の異なる教員の集団が力を合わせるには，マネジメントの方向性を共有することが重要である。他者の投稿を見たり自分が作成したりしながら，子供の姿の意味付けを習慣化し，実践記録を手軽に，継続して行うことができる。学年便りの子供の姿紹介をSNSに移行する予定である。 			
【今後の改善点】			
<ul style="list-style-type: none"> ○ SNSを活用することで，全国の教育・保育関係者とのつながりもできてきている。県内外の園経営者，保育教諭養成の指導者等，幼児教育に携わる様々な立場の方からの反応が増えた。広く幼児教育に貢献する方策として，今後の展開の可能性を検討したい。 ○ 教育活動の質向上には，大学・附属学校との連携，研究の深まりが重要である。附属学校間で一貫した教育を展開するために，教員同士・大学が子供の姿を核とした相互理解と新たな展開を図り続けることが重要である。「手軽さ・分かりやすさの広がりから，学びの深まり・高まりへ」とつなぐ方策を考え，実行していきたい。 ○ 3ヶ月実践し，一般的に危惧されるような個人情報上の問題はなく，保護者の反応も大変良好である。見る側の反応が即時にフィードバックされ，内容や発信方法の改善も行いやすい。配慮と創意工夫のバランスを図りながら，カリキュラム・マネジメントの活性化に生かしたい。 			

(20. 福井大学教育学部附属幼稚園)

○ 情報発信2

実施時期・回数	週4回	主な対象	保護者・教職員
---------	-----	------	---------

ホームページにおける幼稚園の様子の発信

【実施の方法・実施状況】

- ① 子供たちの日々の様子を写真と文で発信し、園での育ちや活動の意義、遊びの見方等について保護者に伝え、共通理解を図る。
 - ・週に3回～4回のペースでの更新に努める。
 - ・新着情報が一目で分かるようにトップページに見出しを示すようにする。
 - ・記事は学年が偏らないよう、また写真も同じ幼児に偏らないようにする。
 - ・肖像権や個人情報の観点からも掲載内容を検討する。
- ② 幼児教育への理解が深まるよう心掛ける。

【記述する際に気を付けている視点】

- ・遊びから見取った子供たちの育ち
- ・要領に示されている10の姿の具体的な姿
- ・これまでの遊びからの変容や成長の様子
- ・園としての思いや成長への願い
- ・発達段階に即した育ち



《トップページ：新着情報の欄の新設》

【実施後の効果】

- 園評価の記述欄に、「行事の意義が子供の姿を通してよく分かった、タイムリーな発信で親子の会話の糸口にもなっている、日常の姿の中に子供の成長があるということが分かった」など、園の様子がよく分かり子供の成長の理解につながるという保護者からの声が多く聞かれるようになった。
- 県外に住んでいる祖父母なども、ホームページにより子供たちの園での成長や様子を知ることにつながっている。
- 就園の際の園選択において、手がかりの一つとなっている。
- 発信することで、教師自身の保育の振り返りにもつながっている。
 - ・子供の姿の見取りや活動への意味づけのより一層の意識化
 - ・幼児期の終わりまでに育てたい10の姿につながる子供の様態への意識化

【今後の改善点】

- 一つ一つの活動が点で終わらないよう、点から線へ、そして面へと子供たちの活動や成長が続いていることを意識するとともに、表し方についても工夫していく必要がある。
- ホームページへのアクセス数は確実に増えているが、すべての保護者に説明責任を果たしているとはいえない。より多様な情報発信の方法を考えていく必要がある。
- より質の高い保育につながっていくよう、子供の見取りや活動の意味付けについて教職員間で協議し、見取りの力を高めていけるよう研修と連動させていく取組について考えていきたい。
- 年度当初に教職員間でホームページの位置付けについて共通理解を図るとともにどの教職員も情報発信ができるよう、スキルの向上に向けた研修の時間も設定していきたい

(41. 愛媛大学教育学部附属幼稚園)

○ 情報発信3

実施時期・回数	11月・2月 2回	主な対象	教師，保育士等，保護者
---------	-----------	------	-------------

掲示資料

【実施の方法・実施状況】

- ① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」の視点にしぼった遊びの取り出しを行い、写真で掲示した。1枚の写真から捉えたものも時間を追って子供の姿や人との関わりの変容を複数枚の写真で捉えたものもある。



- ② 公開研究会参観者や保護者に遊びや遊びの中で子供たちの気付いたことや考えたことを分かりやすく伝えるため、遊びの名前や子供のつぶやき、子供同士の会話などを吹き出しで挿入した。

【実施後の効果】

- 公開研究会参観者や保護者にも資料を提示したことは、視点に基づいた子供の姿や学びについての理解を進めることにつながっている。遊びの中の子供の学びの捉えを公開研究会参観者や保護者に提案できたと思われる。
- 公開研究会参観者や保護者に、子供の育ちを点で見るのではなく、様々な遊びや人との関わりを通してつながりをもって見る視点を与えた。
- 教師は、視点にしぼって子供の姿を取り出すことで子供の遊びや人との関わり、遊びの中の学びを捉える視点をもつことができた。視点もち子供の様子や教師の援助を振り返ることで、今後の援助や環境の構成を考えることができた。



【今後の改善点】

- 今回は、2つの視点にしぼって掲示資料を作成した。今後、別の視点でも同じような掲示資料を作成することで、子供の学びを10の姿から捉えていきたい。視点をもって子供の学びを見取ることで、保育の振り返りを行い、評価を通して保育の改善、教育課程の再編に生かしていきたい。
- 子供の姿からの学びの見取りを共通したものにするために、保育研修会等において写真をもとに、子供の学びや育ちを全職員で検討にしていく。そのことで、子供への理解を深め、教師の援助の在り方についても共通した考えをもつことができると考える。

(48. 宮崎大学教育学部附属幼稚園)

○ 情報発信4

実施時期・回数	週1回	主な対象	教師，保護者
---------	-----	------	--------

掲示用ドキュメンテーション

【実施の方法・実施状況】

- ①子供たちの園での様子をわかりやすく伝えるため，学年ごとに写真と文章を遊びの様子や流れが伝わるように色画用紙に貼り，週1回更新で掲示するようにした。
- ②保護者に伝わりやすいように，写真に題名をつけ，その下に文章で説明を書き，子供の遊びから見られた学びをどのように教師が見取ったのかを伝えるようにした。
- ③色画用紙2～4枚分をクラスの掲示スペースとし，無理のない程度で1～2枚ずつ更新することにした。1週間の遊びを週末にまとめ，月曜日に順次掲示することにして，前の週の遊び，他のクラスとのつながりを見やすくした。



【実施後の効果】

- 保護者は，送迎の際に玄関先に立ち寄り，クラスの様子や他の学年とのつながりをみている。更新される日を楽しみにしており，保護者同士での子供の遊びを通じた会話が広がっている。
- 子供から聞くだけでは，分からなかった遊びが，写真を見ることで分かり，子供との会話が広がっている。
- 同じ遊びでも発展していることが写真を通してわかり，子供たちの成長の様子を捉えやすくなった。
- 教師側も，ドキュメンテーションを作成することで週の子供の様子を振り返り，子供の遊びや学びを整理して捉え，次週の援助や環境構成に生かしやすくなった。



【今後の改善点】

- 現段階では，作成する教師の表現に任せるところが大きいので，子供の学びを見取るという意図から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にして，ドキュメンテーションの作成をし，教育課程の編成に生かしたい。
- 教師の見取りを職員間で共有するために，表現の方法に統一感をもたせたり，掲示したものを研修に生かしたりしていく必要がある。そのことが，教師の援助を豊かにし，保育の質の向上へつながっていくものと考える。

(49. 鹿児島大学教育学部附属幼稚園)

【まとめ】

全国の国立大学附属幼稚園から集めたカリキュラム・マネジメントの具体的な取組を「園内での取組」「外部との関わり」「保護者との連携」の3つに分けて整理した。

まず一つ目は、園内での取組である。職員で、事例等を基に幼児の育ちを共有する場を設けることで、教師による幼児の育ちの見取りを高めることができ、園内での共通理解が深まり、園全体で見通しをもって保育を行うことができる。また、そうして幼児の姿を基に教育課程についても話し合うことで、幼児の実態に即した教育課程・指導内容の改善へとつながっていく。

幼稚園教育要領に「幼稚園教育は環境を通して行う教育である」と示されているように、園内の環境を見直すこともカリキュラム・マネジメントの一つである。その際も、職員全体で話し合い、様々な視点から意見を出し合うことで、より幼児の実態に合った保育を充実させることができる環境の構成を生み出すことができる。

また、実際に保育に当たる際、どのような教材を取り扱うのがよいか、それらをどのような形態・方法で進めていくのがよいか等、様々な視点で活動を捉えることで、幼児の学びは深まっていく。

二つ目は、外部との関わりである。附属学校間の教員研修では、一貫したカリキュラム作成を研究したり、幼児の姿を共有したりすることで、資質・能力について共通理解を図っている。また、子供同士の交流では、附属学校や大学と連携を図りながら、交流活動を進めている。こうして外部との関わりをもつ際には、教育課程・指導計画を共有し、それぞれの教員が互いのねらいや内容を正しく把握しておくことが充実した交流活動へとつながる。そうしてカリキュラムを共有して活動を進めていくことが「社会に開かれた教育課程」の一側面であるといえる。外部との関わりには、現職教員研修等もある。附属幼稚園という特性もあり、外部に対して研究の成果を発信したり、教員を受け入れて研修を行ったりする園が多くある。そうした研修を行う際にも、幼児の姿や教育課程を基に話を行うため、社会に開かれた教育課程であることが求められる。こうした研修を重ねていくことは、地域全体の保育の質の向上へと貢献しているといえる。

三つ目は、保護者との連携である。インターネットや掲示板を使って幼児の姿の発信を行ったり、個人のポートフォリオを作成して渡したりすることで、幼児の育ちを保護者と共有することができる。そうして幼児の姿を園と保護者とで共有することが、保護者の園に対する理解・協力へとつながっている。

(7) 効果的なカリキュラム・マネジメントについて

前記の(2)から(6)の方法で、カリキュラム・マネジメントの効果的な在り方について整理、検討をしてきた。現在、国立大学附属幼稚園では、このような取組の中でカリキュラム・マネジメントを行い、機能している。そこで、カリキュラム・マネジメントのポイントとして、下記にまとめた。

【カリキュラム・マネジメントのポイント】

- 毎日、保育を振り返り、情報を共有し明日への見通しをもつことで、翌日の保育へのつながりが見られ、保育の質の向上を図る。
- 記録の積み重ねを幼児理解や園内環境の見直し、保育案の改善、園内研修に生かす。
- 日々の記録や職員間の情報交換、事例検討等の際に、「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」の視点を生かす。
- 週を単位として保育案を作成し、実施後に振り返ることで、教育課程・指導計画の改善へとつなげる。
- 書き溜めた記録を事例に起こし、職員や大学(専門家)や小学校の教員と検討し、カリキュラムの改善を図る。
- 遊びの振り返りや教材研究を行い、見通しをもった保育につなげる。
- 教育課程や指導計画の改善につながる取組を図る。
- 幼小接続を意識した連携を図る。
- 地域の素材や人材を洗い出し、教育課程の実施にあたり、「何ができるか」「どのように生かしていくことのできるのか」を考え、交流等を通して教育課程の共有を図る。
- 保護者への情報発信を行い、幼児の育ちを共有し、連携・協力する取組を図る。
- 保護者や地域の思いや願いをアンケート等で受け止め、教育課程に反映させる。
- カリキュラム・マネジメントの中で効率的な取組を考える。

カリキュラム・マネジメントと言っても、様々な取組があり、普段、当たり前に行っている取組もカリキュラム・マネジメントの取組の一部だと考えることができる。まずは、自園のカリキュラム・マネジメントの取組を組織的かつ体系的に整理し、目的やつながりを明確にしていくことが必要である。その上で、このような視点から自園のカリキュラム・マネジメントの取組を見直し、できるものから改善を図ることで、効果的なカリキュラム・マネジメントの実現が図られるのではないだろうか。

3 本園の教育課程編成の実際

前述で整理されたカリキュラム・マネジメントのポイントをもとに、本園での教育課程を見直していくことにした。さらに、幼稚園教育要領で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことの3つのカリキュラム・マネジメントの視点を通して、本園の教育課程を見直し、具体的に改善を図ることとした。

(1) 昨年度の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を取り入れた教育課程の編成

新幼稚園教育要領の実施に伴い、昨年度、本園では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から各学年のⅠ期からⅤ期までに見られた姿を洗い出し、「幼稚園教育要領改訂のポイント」を踏まえた指導計画作成のための資料」として整理し、教育課程編成に役立てた。また、指導計画内容の項目を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から見て、どの項目と関連するのかを整理し、10の姿全てが、内容の項目のいずれかに入るように整理した。

【 資料のポイント 】

学びの姿

本園の幼児の遊びの姿や発達の様子から各年齢期の学びの姿を系統的に示した。

援助のポイント

ねらい及び内容を指導するための援助のポイントを示した。本園では、目指す「学び」の姿を意識して保育を行いたいと考えた。そのために、**振り返り**と**見通し**を大切にしようと話し合い、重点的に援助することにした。(**振り返り**と**見通し**は、**斜体**で示すことにした。)

5歳児 Ⅰ期

月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

幼児の姿

- 年長児になった喜びと期待をもち、生き生きと生活する。
- 今までしてきた遊びや昨年の年長児がしていたことを思い出しながら、園内をいっしょに広がって思い思いの遊びを楽しむ。
- 年長児としての自覚が高まり、年下の友達に優しく教えたり手伝ったり、一緒に遊んだりするようになる。
- 友達と遊ぶ中で、自分の気持ちをうまく伝えられず、いじこが起ることもある。
- これまでの経験を生かして、身が自然に興味をもって楽しむ。

ねらい

- 年長児になった喜びと自覚をもち、新入園児を迎えるとともに、新しい生活に喜んで取り組む。
- 気の合う友達と一緒に好きな遊びを楽しむ。工夫しようとする。

内容

- 年長児になったことを自覚し、好きな遊びを十分楽しむ。【A・B】
- これまでの経験を生かし、自分のことは自分でしようとする。【B・D】
- 新しい環境に積極的に関わつながら正しい使い方を確かめたり、工夫したりして遊ぶ。【B・H】
- 言葉や動作、製作などでイメージを自分なりに表現しようとする。【J】
- 諸体験などを通して、自分の体や健康に興味をもち、食の大切さに気付いたりする。【A・E】
- 新入園児を迎えて、年下の友達に親しみの気持ちをもって優しく接する。【D・E】
- 自分の思いを出したり、友達の思いを察したりしながら、気の合う友達と好きな遊びを楽しむ。【C・H】
- 様々な遊具に関わつたり、気の合う友達と園庭を駆け回つたりしながら、自分なりの目的をもって取り組もうとする。【C・H・A】
- 春の自然に親しみ、興味をもって関わる。【G・H】
- 初夏の自然に親しみながら、自然物を遊びに取り入れていく中で、季節の変化に気付く。【G・F】

A 健康な心と体

- 友達とジャンプパタンを使って、パトンの受け渡しをして、ルール遊びを楽しむ。

B 自立心

- 当番の仕事を自覚し、友達と声を掛け合いながら台ふきやあいさつなどに意欲的に取り組んだ。

F 思考力の芽生え

- ミニマートや駄賃の種を植えた経験から、言葉で食べたメロンの種も芽がでるのではないかと考え、友達と種まきをした。

G 自然との関わり・生命尊重

- 園庭の花や木の実をすり鉢ですり潰し、どんな色ができるのかを試した。また、息を吐いて、カプエも聞いて楽しんだ。

援助のポイント

- 年長児になった自覚と喜びを味わえるように、当番活動に取り組んでいくことを知らせ、どのようなことができるかを一緒に話した。
- 友達の話を内容を注視して聞いて分かったり、自分の思いや考えを相手に分かるように話したりして、友達と心を通わせようとする姿を見守るようになる。
- 昨年度の年長児の姿やこれまでの経験を生かして、年長児としての役割や当番の仕事に挑戦する姿を励ましてきた喜びに共感する。
- 身近な自然に自分から積極的に関わる喜びが味わえるように、疑問に感じることや興味があることを調べられる図鑑などを準備しておく。
- 年下の友達と一緒に遊ぶ中で、優しく接する姿を見守ったり、必要に応じて言葉かけたりする。
- 家族への日頃の感謝の気持ちを手作りのプレゼントで表せるように励ます。
- 当番活動の1つとして、**庭園活動**に楽しかった遊びを再演し、次の日の遊びへとつなげるようにする。

C 協同性

- 一人の「海をつくりたい」という思いから始まった遊びが、互いに意見を言い合い形や場所を変えながら広がっていった。

D 道徳性・規範意識の芽生え

- 新しいうみ組の部屋の遊具の場所を知り、トランプなどの新しい遊具を使いルールを確認してトランプ遊びを楽しんだ。

H 数量や図形、図鑑や文字などへの関心・感性

- メロンの種をまいた鉢に、看板を立て、誰も何の種をまいたのか分かるようにした。

I 言葉による伝え合い

- 友達とラメンソーを開き、友達さんとして来た友達との言葉のやりとりをしながら、ラメンソーを振る舞った。

E 社会生活との関わり

- 園外保育で交通館に行き、路面電車について知ると共に、公共交通機関の乗り方を実際に体験しながら知るこができた。

J 豊かな感性と表現

- 友達と話し合いながら、カラーボール袋で衣装をつくり、ネコのついでに付けた、音楽に合わせてダンスで、ネコダンスを年下の友達に披露した。

内容

P.5で示したように、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を「自己の深まり」と「他者との広がり」に整理し、示している。また、1つの項目には、10の姿の要素が総合的に含まれているため、特に重要と考える2～3項目を右図のアルファベットで記載している。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

3歳～5歳までの各期の遊びを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点に整理し掲載した。10の姿は3歳児、4歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要がある。これにより具体的な子ども姿を示し、自由保育における見取りを指導計画や教育課程に生かしていきたいと考えている。

友達と遊びの経験を深めていく時期

ねらい

- 気の合う友達と協力しているような遊びを工夫する。
- 自分の思いを伝え合いながら楽しく遊びを進めていく。

内容 【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

- 戸外で友達と、全身を思い切り動かすことを楽しみながら遊ぶ。【A・C】
- これまでの経験を生かし、自分のことは自分です。【B・D】
- 友達から刺激を受けながら、自分なりの目的をもって固定道具や水遊びなどに取り組み、自分なりに工夫して遊ぶ。【B・F・C】
- 遊びの中で、自分の思いを友達に話したり、友達の思いを聞いて話したりして、自分の気持ちを調整して楽しく遊ぶ。【J・D・I】
- 気の合う友達や同じ遊びに興味をもった友達と一緒に好きな遊びに取り組む。【C・B】
- 役割分担や遊びの進め方を話し合いながら、ごっこ遊びを楽しむ。【C・H】
- 梅雨時期の様子を感じ、興味をもって関わったり、感じたことを友達や先生と伝え合ったりする。【F・G・I】
- 身近な自然に親しみながら動植物を探したり、育てたり、触れたりすることを楽しみ、その変化に気付いたり、成長を楽しみにしたりする。【G・F・D】
- 育てた野菜を友達と一緒に収穫し、旬の食べ物を味わいながら自然の恵みに感謝する。【G・E】

【健康な心と体】

- ◇ 水の心地よさを味わいながら、水に遊んだり、水鉄砲で水を飛ばしたりして、全身を使って遊んだ。【関連項目：D・G】

【自立心】

- ◇ 年下の友達をレストランごっこに誘い、席に案内したり、注文を聞いて、料理を振る舞ったりした。【関連項目：D・E】

【協同性】

- ◇ 大勢の子どもたちが仲間となり、「水の王国」というイメージを共有し、数日に渡って、山を築いたり、水を流したりして遊んだ。【関連項目：D・I】

【道徳性・規範意識の芽生え】

- ◇ 「水の王国」に必要な水を協力しながら運んだり、自分の水を汲む順番を並んで待たせたりして、ルールを確認し合いながら遊んだ。【関連項目：B・I】

【社会生活との関わり】

- ◇ 「お泊まり保育」で近くの温泉に行き、他のお客さんと一緒にお風呂に入った。地域の方のよさを認め、公共浴場でのきまりを知ったり、温泉の方にお礼を言ったりすることができた。【関連項目：D・I】

幼児の姿

- 気の合う友達と、互いに誘い合って遊びの計画を立てたり、遊びに使うものを準備したり、役割を分担したりして遊ぶようになる。
- 自分なりに遊びのイメージをもち、友達と言葉や動作などで伝え合って、遊びをより楽しくしていくとする。
- 自分の思いを伝えたり、友達の思いを受け止めたりしながら、自分の気持ちを少しずつ調整し、自分たちで遊びを進めていくとする。
- 身近な自然に興味をもち、進んで関わろうとする。

F 思考力の芽生え

- ◇ 二階建てハウスから、「水の王国」までどのようにしたかスムーズに水が流れるようになるか、旅行積鉄を繰り返した。【関連項目：C・I】

G 自然との関わり・生命尊重

- ◇ 葉っぱや草を使って「かわいもんの屋さん」を開いた。指輪や葉っぱの飾りをつけた。【関連項目：H・I】

振動のポイント

- 自分なりの目標に近付けるように励ましたり、援助したりして、できるようになったときをみつけて、認め、自信につなげていく。
- 子どもの楽しい発想や、気付いた方法を周りの友達に知らせたり、子どもの思いに共感したりする。
- 子どもの気付きや思いを受け止めながら、時には教師も遊びに加わって、一緒に考えたり遊びのきっかけを示したりしていく。
- 育てた野菜を収穫し、食べる活動の中で、育ててきた過程を振り返り、協力して育てた喜びや自然の恵みへの感謝を感じられるようにする。
- 子ども同士が、グループで話し合いながら自分たちで遊びを進めていくこととする姿を見守り、必要に応じて話し合いに参加していく。
- 「お泊まり保育」に向けて、見聞しをもって取り組めるように、環境構成等を工夫する。
- 日々の遊びを子どもたちの発表や写真等を用いて全員で振り返り、朝日の遊びへとつなげていくようにする。

H 数量や図形・構図や文字などへの関心・興味

- ◇ お祭りを開くために必要なお金を準備したり、看板に「かきおどりやさん」などかき、どんな屋台かを知らせたりして、つみ組お祭りを開いた。【関連項目：E・J】

I 言葉による伝え合い

- ◇ お祭りのごっこで屋台を開き、お客さん役の年下の友達と会話しながら、商品を売ったり、ゲームのやり方を年下の友達に教えた。【関連項目：H・I】

J 豊かな感性と表現

- ◇ みんなで「お祭り」のイメージを話し合い、おみこしをつつたり、うちわに絵を描いたり、ねじりはちまきをつけた。思いの表現でお祭りを楽しんだ。【関連項目：C・I】

【幼稚園教育要領改訂のポイントを踏まえた指導計画作成のための資料】

友達と遊びの経験を深めていく時期

ねらい

- 気の合う友達と協力しているような遊びを工夫する。
- 自分の思いを伝え合いながら楽しく遊びを進めていく。

内容 【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

- 戸外で友達と、全身を思い切り動かすことを楽しみながら遊ぶ。【A・C】
- これまでの経験を生かし、自分のことは自分です。【B・D】
- 友達から刺激を受けながら、自分なりの目的をもって固定道具や水遊びなどに取り組み、自分なりに工夫して遊ぶ。【B・F・C】
- 遊びの中で、自分の思いを友達に話したり、友達の思いを聞いて話したりして、自分の気持ちを調整して楽しく遊ぶ。【J・D・I】
- 気の合う友達や同じ遊びに興味をもった友達と一緒に好きな遊びに取り組む。【C・B】
- 役割分担や遊びの進め方を話し合いながら、ごっこ遊びを楽しむ。【C・H】
- 梅雨時期の様子を感じ、興味をもって関わったり、感じたことを友達や先生と伝え合ったりする。【F・G・I】
- 身近な自然に親しみながら動植物を探したり、育てたり、触れたりすることを楽しみ、その変化に気付いたり、成長を楽しみにしたりする。【G・F・D】
- 育てた野菜を友達と一緒に収穫し、旬の食べ物を味わいながら自然の恵みに感謝する。【G・E】

予想される遊び【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

- 体動かす遊び
 - 水の掛け合い【A・C】
 - リレー遊び【C・D】
 - 的あて【C・F】
 - 固定道具【A・B】
 - 輪くぐり【A・B】
 - マット・紙飛行機【A・B】
- 自然をいかした遊び
 - 花遊び【G・B】
 - 虫の飼育【G・D】
 - 華やかな色遊び【G・F】
 - 砂遊び【G・C】
 - 虫捕り・観察【G・F】
 - 野菜や花を育てる・収穫【G・D】(ミニトマト、枝豆、キャウリなど)
 - 泡遊び【G・C】
- 生活面
 - 生き物の飼いや命の大切さを話し合う。
 - 素材
 - ・ヤマトモ【園】
 - ・さくらんぼ【園】
 - ・イチゴ【園】
 - ・アゲハ蝶
 - ・梅のみ
 - ・石けん など
 - 屋敷のルールを知り、守ろうとしながら楽しく食事をする。【A・B】
 - 保育園の整理整頓をしたり、道具をきれいにしたりする。【B・D】
 - 4月からの生活を振り返ったり、夏休みの生活の仕方考えたりする。【A・B】

幼児の姿

- 気の合う友達と、互いに誘い合って遊びの計画を立てたり、遊びに使うものを準備したり、役割を分担したりして遊ぶようになる。
- 自分なりに遊びのイメージをもち、友達と言葉や動作などで伝え合って、遊びをより楽しくしていくとする。
- 自分の思いを伝えたり、友達の思いを受け止めたりしながら、自分の気持ちを少しずつ調整し、自分たちで遊びを進めていくとする。
- 身近な自然に興味をもち、進んで関わろうとする。

ごっこ遊び

- 家族ごっこ【I・E】
- レストランごっこ【I・E】
- おばけ屋敷ごっこ【B・C】
- お祭りごっこ【C・E】
- 電車ごっこ【C・E】
- 魚釣りごっこ【I・J】

制作遊び

- 的づくり【J・C】
- 船づくり【B・C】
- お土産さんごっこの商品づくり【B・H】
- ポディペインティング【B・J】
- おばけ屋敷づくり【C・J】
- 空き箱製作【B・J】

行事に関わる遊び

- 親子で交通安全教室に参加し、交通安全の意識を高める。【A・B】
- お父さんにプレゼントを送ったり、一緒に遊んだりしながら感謝の気持ちを表す。【I・E】
- モチの飾り付けをしたり、短冊に願いごとをかいたり（のびてもらったり）する。【I・B】
- お泊まり保育に参加し、友達や先生と一緒に帰郷で過ごし、自分のことは自分でしたり、さまざまなことを楽しんだりする。【A・B・C】

振動のポイント

- 自分なりの目標に近付けるように励ましたり、援助したりして、できるようになったときをみつけて、認め、自信につなげていく。
- 子どもの楽しい発想や、気付いた方法を周りの友達に知らせたり、子どもの思いに共感したりする。
- 子どもの気付きや思いを受け止めながら、時には教師も遊びに加わって、一緒に考えたり遊びのきっかけを示したりしていく。
- 育てた野菜を収穫し、食べる活動の中で、育ててきた過程を振り返り、協力して育てた喜びや自然の恵みへの感謝を感じられるようにする。
- 子ども同士が、グループで話し合いながら自分たちで遊びを進めていくこととする姿を見守り、必要に応じて話し合いに参加していく。
- 「お泊まり保育」に向けて、見聞しをもって取り組めるように、環境構成等を工夫する。
- 日々の遊びを子どもたちの発表や写真等を用いて全員で振り返り、朝日の遊びへとつなげていくようにする。

【指導計画】

(2) 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

鹿児島大学教育学部附属幼稚園

1 園の概要（平成30年度）〔園・教育課程の特色〕

本園は、各学年1学級の小規模幼稚園である。各学級に担任、副担任は配置されているものの、小規模のよさを生かした「自由感あふれる保育」を目指し、全員体制で保育を行っている。また、一人一人の学びの姿を共有するための掲示や通信等の工夫を行い、保護者等へ開かれた幼稚園経営を行っている。



【シンボルツリーの桶でセミの抜け殻探し】

○ 園の教育課程の特色

本園の教育目標「いっぱい遊び いっぱい創り 豊かな感性と心情を育む」に基づき、豊かな環境の中で幼児がのびのびと遊び、試行錯誤を繰り返しながら課題を乗り越え、主体的に学ぶ子供の育成を目指して、教育課程を編成している。また、緑豊かな園庭を中心に季節の移り変わりに目を向け、身近な自然を生かした教育活動を行っている。

昨年度の研究において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にして各学年の後半で見られる姿を捉え、教育課程において方向目標として示し、どの学年においても5歳児後半の姿を意識しながら、保育を行うこととした。

○ 新幼稚園教育要領の実施に向けた改善点【平成29年度の取組】

本園では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から各学年のⅠ期からⅤ期までに見られた姿を洗い出し、「幼稚園教育要領改訂のポイントを踏まえた指導計画作成のための資料」として整理し、教育課程編成に役立てた。

また、指導計画の内容項目を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から見て、どの項目と関連するのかを整理し、10の姿全てが、内容の項目のいずれかに入るように整理した。

2 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

(1) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること。

- ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、幼児自らが遊びを通じて、多様な体験をし、様々なことに興味や関心を広げ、それらに自ら関わろうとする気持ちをもつことを大切にしながら、教育課程を編成している。
- ・ 園内においては、職員会議や職員朝会等で、情報を共有するとともに、園内研修において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にし、事例を基に幼児の学びや教師の援助について検討し、保育に生かしている。
- ・ 家庭に向けては、園の教育目標及び方針を学級会や園便り等で園長や副園長から保護者に説明するとともに、地域に向けては、年2回の学校評議委員会等で説明や意見交換を行い、教育課程の改善に生かしている。

(2) 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

- ・ 日々の保育のねらいや援助の方向性について、全職員で共通理解を図り、個人で記録をとっている。その記録を全員で共有したり、動画を活用したりすることで、より共通理解が図られ、保育の改善につながると考える。
- ・ 園内研修においては、担任・副担任とともに記録をもとに事例を持ち寄り、幼児の学びを見取り、環境の構成や援助の在り方の改善を図っている。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にドキュメンテーション作成につなげ、幼児の遊びの見取りを教育課程の改善に生かしていく。
- ・ 前期終了時(10月)に保護者アンケートを実施し、園への評価を教育課程編成に生かしている。
- ・ 小学校の教員との連携においては、附属小学校が隣接しているため、小学校へ授業参観に行ったり、小学校から保育参観に来たりして、生活科の教員を中心に交流を図っている。

(3) 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

- ・ 幼児の主体的な行動を重視しているため、幼児は好きな場所で好きな遊びを展開し、さまざま

な学年の幼児との関わりも生まれる。そのため、教師は、学級の担当はあるものの、全員体制で情報交換を行い、日々の保育を振り返り、次の日の保育につなげている。養護教諭も配置されているため、怪我の手当て等だけでなく、安全面の確保のため幼児の遊んでいる姿を見守っている。

- ・ 本園は園区が広く、地域と密着したつながりは少ないものの、大学の実習地が隣接しており、実習に訪れる学生や職員との交流を図っている。また、専門家である大学教員に虫のことや藍染めなどについて聞くなど連携を図っている。
- ・ 家庭においては、ドキュメンテーションや学級通信等で幼児の様子を伝え、連携を図っている。また、運動会や餅つきなどの行事において職員だけでは運営が難しいときには、家庭の協力をいただき、一緒に行事をつくりあげている。

(具体的な取組内容)

○ 保育の振り返り【毎日】・・・②, ③

毎日の保育後に保育を振り返る時間を15分程度確保し、幼児の一日の遊びや教師の援助を振り返っている。本園では、教職員が他の学年の幼児と関わることも多く、職員が少ないことをよさとして生かし、各担任の一日の遊びの見取りと今後の援助を共通理解し、一日の保育の反省をすることで、次の日や次週への遊びや環境の構成に役立て、全職員の協力体制の下で保育を行っている。

○ 保育中の振り返りの時間の確保【毎日】・・・②

片付けのときや降園活動の中で各学年、共通して「振り返りの時間」をもつようにした。幼児が主体となって行ったり、教師が中心となって行うなど各学年で形式は異なるが、自分たちの一日の遊びを振り返り、学級で共通の認識をもつことで、次の日の遊びにつながったり、見通しをもつきっかけとなるようにしている。

○ 掲示用のドキュメンテーション・学級通信の作成【週1回】【別添参照】・・・②, ③

本園での遊びの様子を伝えるために、週1回、写真と文章を組み合わせた「ドキュメンテーション」を各学級で作成し、掲示している。遊びの姿から、教師がどのような学びを見取ったか、どのように遊びが継続し、変化したかを文章で記載するようにしている。また、遊びの様子を学級通信等でも知らせるようにしている。

○ 幼児一人一人の育ちを共有するドキュメンテーション(個人用)の配付【年3回】・・・②, ③

7月・12月・3月の計3回、A4用紙に個人の育ちの姿を写真と文章で3事例ずつ載せ、保護者に配付している。幼児一人一人の育ちを保護者と共有することに役立てている。

○ 地域(外部)との協働体制【年間】・・・③

本園は、大学(教育学部)と隣接しているため、実習地の先生を始め、大学の先生方との連携を深めている。実習地での野菜の栽培を通じて、実習地の先生方と知り合い、料理の仕方を教えてもらったり、藍染めなどの活動に広がったりしている。また、お泊まり保育で利用する温泉へ使用のお願いに行き、当日を楽しみに待つなど地域との連携も図ろうとしている。

○ 小学校との連携【年間】・・・②, ③

互いの授業や保育を参観し合ったり、公開研究会に参加したりして連携を図っている。また、授業の一環として、幼児と小学生との交流を図ったり、年長児は小学校へ見学に行ったりし、施設の見学や小学生と一緒に遊ぶ活動を行っている。また、本年度は、同日の公開研究会において小学校と同じ「砂場遊び」を題材にして公開授業・公開保育を行い、研究を深めることができた。

○ 教育課程・指導計画の改善【8月～2月】・・・①②

日々の保育の振り返りや行事の反省を指導計画に朱書きし、次年度の教育課程編成の際、幼児の姿やねらい及び内容に照合し、改善を図っている。また、学校評議委員会や保護者アンケートでの意見を参考にし、預かり保育(月1回程度)を行うなど、保護者のニーズに応え、改善を図ってきた。

3 来年度に向けての改善点・課題

- ◇ 教育課程の中に「5領域」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」があまり意識されていないため、「5領域」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で見直し、関連を図ることができるように整理する。
- ◇ 記録(ドキュメンテーション)から幼児の各期の姿を洗い出し、教育課程の「幼児の姿」に反映させるようにする。

(3) 本園の教育課程の課題

本園での教育課程の課題は下記の通りである。

- 教育課程の中に「5領域」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」があまり意識されていない。
- 毎年、見直しは行うものの十分な改善がされないまま実施しているので、今の幼児の姿と教育課程に記載されている幼児の姿が離れているのではないだろうか。
- 実際の保育と教育課程とのつながりが、明確になっていない。

そこで、上記の課題を解決するために、本年度は、下記のことを実施することにした。

- 教育課程の中に「5領域」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が見えるように整理する。
- 記録（ドキュメンテーション）から幼児の各期の姿を洗い出し、教育課程の幼児の姿に反映させるようにする。

(4) 本年度のカリキュラム・マネジメントの取組

① グランドデザインを話し合う。

本園では、期限付き教諭や後援会雇用の職員、育休代替の職員など、様々な雇用形態の職員がおり、それぞれの思いや願いを共有する場が少ない。そこで、全職員で、目指す子供像や教師像を話し合い、それぞれの思いや願いを共有し、共通の方向に向かって組織的に園経営が行えるようにした。



この場で出た思いや願いを教育課程の編成に生かして、効果的なカリキュラム・マネジメントにつなげていきたいと考えた。

② 教育課程・指導計画の見直しをする。

上述の通り、教育課程の見直しをし、記録（ドキュメンテーション）から、幼児の各期の姿を洗い出し、教育課程の幼児の姿に反映させることにした。また、幼稚園教育のねらいとなる「5領域」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても本園の幼児の姿やねらいと併せて考えていくことにした。

実際の教育課程は、次頁の通りである。本誌では、5歳児の指導計画のみ掲載することとした。

教育課程のアルファベット（本園での表記）

- | | | | |
|------------------------|-------------|----------------|----------------|
| A：健康な心と体 | B：自立心 | C：協同性 | D：道徳性・規範意識の芽生え |
| E：社会生活との関わり | F：思考力の芽生え | G：自然との関わり・生命尊重 | |
| H：数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 | I：言葉による伝え合い | | |
| J：豊かな感性と表現 | | | |

教育課程【5歳児】

発達時期	I		II		III		IV		V		
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> 年長児になった喜びと期待をもち、年下の友達に優しく教えたり、手伝ったり、一緒に遊んだりするようになる。【D・A】 今までしてきた遊びや昨年度の年長児がしていたことを思い出しなが、園内をいっぱい広げて友達と一緒に遊びを楽しむ。【A・B】 友達と遊ぶ中で、自分の気持ちうまく伝えられずに、いざこざが起こることもある。【C・I】 これまでの経験を生かして、身近な自然に関心をもち、進んで関わろうとする。【G・E】 遊びの中で感じたことや考えたことをいろいろな方法で表現しようとする。【H・J】 前日の遊びを思い出し、遊びを続けていこうとする。【C・F】 	<ul style="list-style-type: none"> 気の合う友達と、互いに誘い合って遊びの計画を立てたり、遊びに使うものを準備したり、役割を分担したりして遊ぶようになる。【A・H】 自分なりに遊びのイメージをもち、友達と言葉や動作などで伝え合って、遊びをより楽しそうにしていこうとする。【J・C】 自分の思いを伝えたり、友達の思いを受け止めたりしながら、自分の気持ちを少しずつ調整し、自分たちで遊びを進めていこうとする。【I・D】 身近な自然に興味をもち、不思議に思ったことに進んで関わろうとする。【G・F】 経験したことや知っていることを基に、友達と同じ目的に向かって、思いや考えを伝え合いながらつくりあげようとする。【B・E】 	<ul style="list-style-type: none"> 戸外での遊びが更に盛んになり、運動的な遊びやルールのある遊びに積極的に取り組むようになる。【D・A】 友達同士のつながりが深まり、互いのよいところを認め合いながら遊ぶ姿が見られる。【C】 友達との会話が増え、周りの状況や友達の意見、自分の思いなどを調整しながら、話し合おうとするようになる。【I・D】 年長児としての自覚が高まり、一つの目的に向かって友達と協力し合ったり、学級全体でまとまって取り組んだりすることができるようになる。【B・E】 身近な自然への興味が高まり、友達と一緒にじっくり関わる姿が見られる。【G・F】 様々な自然物や道具を使い、遊びをより楽しくする方法を考える。【H・J】 	<ul style="list-style-type: none"> 友達との遊びが充実し、さらにいろいろな友達と一緒に遊ぶ姿が見られるようになる。【C・D】 一人一人が自分の考えや力を出し合って主体的に生活を進めていこうとする姿が見られる。【A・B】 友達のアイデアを認め、自分への刺激にして、試したり、工夫したりする。【I・J・H】 友達との関わりが深まり、役割分担しながら遊びを進めるなど、友達とのやりとりを楽しむ。【D・I】 知的好奇心や探求心が高まり、環境へのはたらきかけが多くなる。【F・G】 季節の変化に気付き、感じたことを積極的に表現したり、表現方法を工夫したりする。【J・G・E】 	<ul style="list-style-type: none"> 互いの力や得意なことなどが分かり、友達と力を合わせて、競い合ったりして遊びを楽しもうとしている。また、一つの遊びをみんなでもう楽しくしようと工夫する姿が見られる。【C・I】 友達と一緒に自分のイメージを工夫して表現し、舞台などで演じて見せることを楽しむようになる。【J・C】 学級のみんなで遊んだり、力を合わせて1つこのことに取り組んだりするようになり、学級全体としてのまとまりが感じられるようになる。【D・B】 小学生とふれあったり、小学校生活について聞いたりしながら、進学を楽しみにする姿が見られる。【E・A】 自然に対する知的好奇心や探求心が高まり、関わったりつながりを考えたりするようになる。【G・F・H】 						
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 年長児になった喜びと自覚をもち、新入園児を迎えとともに、新しい生活に進んで取り組む。 気の合う友達と一緒に好きな遊びを楽しんだり、工夫しようとしたりする。 春の自然に関心をもち、遊びの中に取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを友達と伝え合いながら楽しく遊びを進めていく。 気の合う友達と協力して、いろいろな遊びの見通しを持ちながら進め、工夫する。 園内の自然に自ら関わり、その性質や特徴に気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 体を十分に動かして、遊ぶ心地よさや楽しさを友達と一緒に味わう。 友達とのつながりを深めながら、いろいろな遊びを工夫する。 身近な動植物に親しみの気持ちをもち、大切に関わったり遊びに取り入れたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と話し合い、協力し合いながら目的をもって楽しく遊ぶ。 いろいろな遊びを工夫して進める中で、最後までやり遂げる喜びを味わう。 深まりゆく秋や初冬の自然を積極的に自分たちの遊びに取り入れて楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちで工夫し合い、友達とのつながりを一層深めながらいろいろな遊びに意欲的に取り組む。 自分の成長を振り返り、小学生になる喜びと自覚をもって園生活を送る。 冬から春の季節の変化に気づき、友達と伝え合いながら、さまざまな関わりで気づきを深める。 						
内容	<ul style="list-style-type: none"> 年長児になったことを自覚し、好きな遊びを十分楽しむ。 諸検診などを通して、自分の体や健康に興味をもちたり、食べることの大切さに気付いたりする。 これまでの経験を生かし、自分のことは自分でする。 新入園児を喜んで迎え、年下の友達に親しみの気持ちをもって、優しく接する。 友達よきに気づき、一緒に遊ぶ楽しさを感じる。 新しい環境に積極的に関わりながら正しい使い方を確かめ、試したり、工夫したりして遊ぶ。 様々な道具に関わったり、気の合う友達と園庭を駆け回ったりしながら、自分なりの目的をもって取り組もうとする。 春の自然に親しみ、興味をもって関わる。 初夏の自然に親しみながら、自然物を遊びに取り入れていく中で、季節の変化に気付く。 自分の思いを出したり、友達の思いを聞いたりしながら、気の合う友達と好きな遊びを楽しむ。 自分の思いや願い、疑問などを言葉で伝えようとする。 言葉や動作、製作などでイメージを自分なりに表現しようとし、ふさわしい表現方法を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 戸外で友達と、全身を思い切り動かすことを楽しみながら遊ぶ。 これまでの経験を生かし、自分で考え自分のことは自分で進める。 育てた野菜を友達と一緒に収穫し、旬の食べ物を味わいながら自然の恵みに感謝する。 気の合う友達と同じ遊びに興味をもった友達と一緒に、好きな遊びに取り組む。 友達から刺激を受けながら、自分なりの目的をもって固定道具や水遊びなどに取り組み、自分なりに工夫して遊ぶ。 梅雨時期の様子を感じ、興味をもって関わったり、感じたことを友達や先生と伝え合ったりする。 身近な自然に親しみながら動植物を探したり、育てたり、触れたりすることを楽しみ、その変化に気付いたり、成長を楽しみにしたりする。 遊びの中で、自分の思いを友達に話したり、友達の思いを聞いたりして、自分の気持ちを調整して楽しく遊ぶ。 役割分担や遊びの進め方について考えを出し合いながら、役になりきったり道具を準備したりして遊びを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 戸外で体を思い切り動かしながら、運動的な遊びの楽しさを存分に味わう。 自分たちで工夫して園生活を楽しもうとする。 自分たちの体と食べ物の関係について関心をもち、 自分の気持ちを相手に伝え、相手の思いも聞きながらごっこ遊びやゲームを楽しむ。 チームに分かれたり、ルールを意識したりしながら、運動的な遊びを楽しむ。 友達と役割を分担したり、協力し合ったりして遊びを進める楽しさを味わう。 季節の移り変わりや生き物、草花に関心をもち、身近な自然を遊びの中に取り入れて楽しむ。 自然に興味をもち、成長を楽しみにしたり、自然の恵みに感謝したりする。 友達と遊び方や遊びに必要な物などについて互いの考えを出し合い、遊びを工夫する。 いろいろな体験を通じ、イメージを友達と伝え合いながら言葉を豊かにする。 休み中の出来事や園生活で感じたことなどを言葉や絵で表現したり、遊びの中に取り入れたりしながら、友達と伝え合う喜びを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> ルールのある遊びを進める中で、ルールを守ったり新しくつくったりして、全身を使っているような運動的な遊びを楽しむ。 自分のイメージに合った材料や用具を選んで、工夫して描いたりつくったりする。 今の時期に合った健康的な過ごし方に関心をもち、衣服の調整や手洗い、うがいを進んで行う。 友達と一緒に協力したり相談したりしながら遊びを進め、やり遂げる充実感や喜びや悲しみを共感し合う。 友達と体を動かして遊ぶ中で、役割を分担しながら、共通の目的をみつけて遊びを楽しむ。 自分たちの身の回りにある自然に興味をもって関わり、自然物を使っていろいろな遊びを楽しむ。 食べ物の一連の成長について知り、その不思議さを感じたり、自然の恵みに感謝したりする。 遊びの進め方やきまりなどを自分たちで話し合い、進めようとする。 遊びに必要なものを用意したり、場を工夫したりしながら互いのイメージを出し合い、表現し合うことを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの目標をもち、繰り返し挑戦したり、友達と競い合ったり、教え合ったりしながら体を動かして遊ぶ。 自分たちで生活の場を整えながら、見通しを持って協力して遊びをつくりあげていく。 卒園することへの喜びや進学への期待を感じながら、自分の成長を振り返る。 お世話になった人たちが年下の友達に、親しみや感謝の気持ちをもって関わったり、お礼の言葉を伝えたりする。 身近な自然に触れ、発見したことや感じたことを友達と伝え合い、調べたり、探求したりする。 これまでの経験を生かし、学級の友達と話し合い協力して園生活を楽しむ。 友達と一緒に話し合ったり、役割を分担したりして、目的に向かって活動する。 これまでの園生活を振り返り、楽しかったことなどを思い出し話し合いながら、様々な活動に意欲的に取り組む。 いろいろな表現の工夫を楽しみながら自分の表現に生かしたり、友達よきに気付いたりする。 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを感じる。 						
就学に向けて	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りのことは自分でする。 友達や教師に対して、自分の思いや考えを自分なりの言葉で伝えようとし、自分から挨拶したりする。 身近な出来事について、感じたことや不思議に思ったことをいろいろな方法で表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りのことは、自分で考え自分で進める。 経験したこと、感じたこと、考えたことなどを友達に分かるように言葉で伝えようとする。 目的をもって遊びに取り組み、様々な表現方法を知る。 動植物に触れて、興味をもち、不思議に思ったことを調べようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを話したり、友達の話を聞いたりして遊びを進める。 友達と役割分担したり、協力し合ったりして、友達と協力して遊びを進める。 汗を拭いたり水分補給をしたりして体調管理に気をつけようとする。 遊びを通して、季節の移り変わりに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを話したり、友達の話を聞いたりして話し合いながら遊びを進める。 友達の表現したことに関心をもち、互いに工夫し合いながら遊びを進める。 手洗いうがいや気温に合わせた衣服の着脱などを意識し、健康に過ごそうとする。 遊びを通して季節の移り変わりに気付く、遊びに取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> クラスの友達と見通しをもって、互いに助け合いながら園生活を送ることの良さを感じる。 友達と話し合いを重ねながら、自分たちの遊びをよりよいものにしようとする。 就学への期待をもち、自分や友達の成長を喜ぶ。 友達や教師の話を関心のある態度で聞く。 						

(5) カリキュラム・マネジメントのポイントからの見直しの実際

上記に示したカリキュラム・マネジメントのポイントから本園の取組を見直し、改善し、以下の点について実施した。小さな改善ではあるが、常に改善策はないかを考えながら効果的な方法を見出していくことが、効果的なカリキュラム・マネジメントへつながるのではないかと考えている。

○ 実習地とのつながりを年間計画の中に入れる

本園は教育学部に隣接しており、教育学部の敷地内に実習地が置かれている。そこで、実習地の畑で野菜を育てたり、収穫体験をしたりしているが、年間を通した計画が定まっていない。そこで、実習地の職員と連携を図りながら、指導計画の中に実習地での栽培計画を入れ、年間を通して計画的に活動を行うことにした。



○ 保育を振り返る時間を生かして、次の週の計画、環境の構成を話し合う

本園では、毎日保育後に保育の振り返りとして、その日の保育や幼児の姿について、情報交換を行い、次の日の保育につなげる援助や環境の構成等を15分程度の時間を使って、話し合っている。

週案作成は、各学級において話し合っただけで計画を立てていたため、形式を見直し、週末の保育を振り返る時間にはその日の保育を振り返ると共に、次週の計画を話し合うことにした。そうすることで、週案作成の時間が短縮され、さらに、職員全員での共通理解が図られると考えている。



○ 行事等の反省のアンケート記入から、口頭での話し合いに切り替える

各行事後には、担当職員が簡単なアンケートを全職員から回収し、まとめ、それを教育課程・指導計画に生かしていた。しかし、時間も労力もかかってしまうため、行事後に全職員集まって、気付いたことや改善点を出し合う話し合いに切り替えることとした。

そうすることで、即時に係の方で意見を集約し、教育課程・指導計画の改善に生かすことができるようになった。また、職員間の共通理解もしやすくなった。

○ ドキュメンテーション作成における共通理解

本園では、週1回保護者向けにドキュメンテーションを作成し掲示している。しかし、作成者の裁量に任されている部分が多いため、幼児の学びを見取ることでできる場面を切り取ることで、学びの見取りは、桃色の文字で書くこと、遊びと遊びのつながりは、赤の矢印で示すことなど担任同士で共通理解を図り、作成に生かすことにした。見取り方や記入の仕方を共有することで、掲示に統一性が生まれ、研修や教育課程・指導計画の改善に生かされやすくなると考えている。



○ 事例の持ち寄り

月1回の全体園内研修の場において全職員で事例を持ち寄り、互いに援助の方法や幼児の遊びの見取りを高める研修を行うことにした。これまでは、担任主導での研修だったものが、副担任とも幼児の育ちの見取りを共有することができ、研修や教育課程・指導計画に反映させることができるのではないかと考えている。



○ 教育課程・指導計画の改善に向けて

幼児の実態を基に教育課程・指導計画の改善を行うために本年度掲示板に掲示している、幼児の育ちを写真と文字であらわしたドキュメンテーションを基に、教育課程・指導計画の加筆修正を行った。また、幼児の姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から捉え、記載することにした。見直していく上で、幼稚園教育要領に示されている5領域や資質・能力についても考慮した。また、全職員で目指す幼児の姿や教師の姿などを話し合い、共通理解を図り教育課程・指導計画の改善を進めていくことができた。

このように、園の課題を見付け出し、日々の実践の中から小さな改善を常に図り、積み重ねていくことで効果的なカリキュラム・マネジメントは実現できるのではないだろうか。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 研究の成果

○ カリキュラム・マネジメントの具体的な取組の整理

本園のみならず、全国の国立大学附属幼稚園からカリキュラム・マネジメントに関する取組の具体的な内容について実践収集を行った。今回は、各園の取組内容をA4用紙2枚の様式とし、幼稚園教育要領に示されているカリキュラム・マネジメントの3つの視点「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえた教育課程編成」「教育課程の実施状況の評価とその改善」「教育課程の実施に必要な人的または物的な体制の確保」からまとめることとした。各園の具体的な取組内容も挙げてもらい、それらの具体的な内容を、3つの視点から整理したり、内容ごとにグループごとにまとめて整理したりすることができた。

○ 取組と取組とのつながりの整理

カリキュラム・マネジメントの具体的な取組を整理していくと、いくつかのグループに分けることができた。そうしたグループは、それぞれの取組が単独で実施されているわけではなく、つながりがあることが分かった。保育を行う前には、週案等の保育案の作成を行い、実践後は振り返りを行い全職員で幼児の姿を共有し、幼児の姿を記録して次の教育課程の改善に生かすなど、それぞれ行っている取組は、実はつながっていることを明確にして図示することができた。また、保護者と地域とのつながりなどについても示すことができ、全ての取組内容が関わり合ってカリキュラム・マネジメントが進められていることが分かった。

○ 教育課程・指導計画とのつながりの再確認

カリキュラム・マネジメントの具体的な取組をグループ化して整理することで、それぞれのグループ同士のつながりが見えてきた。記録や振り返り、保護者や地域との連携など、一つ一つの取組にはつながりがあり、全て教育課程・指導計画の改善へとつながっている。記録や振り返りを積み重ねていくことが、教育課程・指導計画を見直す根拠となり、また、地域の人材や施設等を活用していくことが、新たな人材開発につながる。こうした取組を行っていくことが、教育課程・指導計画の改善へとつながっていくことを再確認することができた。

○ カリキュラム・マネジメントのポイントの整理

国立大学附属幼稚園におけるカリキュラム・マネジメントの取組を考察することにより、カリキュラム・マネジメントのポイントを整理することができた。自園のカリキュラム・マネジメントの取組を組織的かつ体系的に整理し、目的やつながりを明確にした上で、カリキュラム・マネジメントのポイントから自園のカリキュラム・マネジメントの取組を見直し、できるものから改善を図ることで、効果的なカリキュラム・マネジメントの実現を図ることが期待できる。

2 今後の課題

○ PDCAサイクルの明確化

今回の研究では、各園が実施している取組内容を集め、記録や保育案、保護者や地域との連携などにグループ化して整理した。また、それぞれどのような取組が行われているか具体的な取組内容についても掲載した。今後は、それぞれの取組とPDCAサイクルとのつながりを明らかにしていくことが課題である。そのためには、各園の取組について更に詳しくまとめ、カリキュラム・マネジメントがどのような手順で進んでいくのか分析していく必要がある。

○ 教育課程と評価

カリキュラム・マネジメントの研究を進めていく中で、振り返りや事例検討など、幼児の姿を共有し保育を見直すことや、そうして明らかになった幼児の姿を教育課程・指導計画の改善に生かすことなどが見えてきた。今後は、幼児の育ちを見取る方法と教育課程・指導計画とのつながりを明らかにすることで、保護者や小学校との共通理解も深まり、連携の強化へとつなげていきたい。

○ 外部資源の活用

今回、各園から具体的な取組を集めると、地域の人材や施設を活用した保育を行っている園も多く見られた。附属幼稚園のため、地域よりも大学とのつながりの方が多いため、地域とのつながりを生かしている園もあった。本園では、地域との関わりは少ないため、外部資源を更に生かし、どのように教育課程・指導計画の改善に反映させるかが今後の課題である。本園が活用できる資源の洗い出しを行うことや指導計画のたて方等の流れを明らかにすることで、より地域とのつながりを深めながら、「社会に開かれた教育課程」を実現していきたい。

〈参考文献〉

- 文部科学省（平成30年）「幼稚園教育要領解説」フレーベル館
- 文部科学省（平成30年）「初等教育資料」（4月号～1月号） 東洋館出版社
- 国立大学法人 千葉大学（平成27年）
「多様性と関連性のある体験を通して幼児期の学びを深める実践研究」
- 国立大学法人 お茶の水女子大学（平成28年）
「幼児期の非認知的能力の発達をとらえる研究—感性・表現の観点から—」
- 国立大学法人 神戸大学（平成29年）
「幼児期に育みたい資質・能力を支える指導方法と評価に関する研究
—幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の観点から—」
- 国立大学法人 鳥取大学（平成30年）
「幼稚園における指導の評価の在り方に関する研究」
- 津金美智子 編著（平成29年）
「平成29年度版 新幼稚園教育要領ポイント整理 幼稚園」東洋館出版社
- 神長美津子（平成30年）
「保育ナビカリキュラム・マネジメントの実際—」（4月号～1月号）フレーベル館
- お茶の水女子大学『幼児の教育』編集委員会（平成30年）
「幼児の教育」（春号～冬号）フレーベル館
- 大豆生田啓友（平成30年）
「あそびから学びが生まれる動的環境デザイン」 学研教育みらい
- 鹿児島大学教育学部附属幼稚園（平成29年）
「遊びの中で育まれる子どもの学び
～幼稚園教育要領の改訂のポイントを踏まえた保育実践～」
- 鹿児島大学教育学部附属幼稚園（平成30年）
「遊びの中で育まれる子どもの学び
～子どもの育ちを共有し、小学校とのつながりを深める保育実践～」